

# 敬愛大学国際研究

第26号

[2013年2月]

## 論文

- 「海図のない記憶の海」を彷徨って  
——マーク・トウエイン『自伝』の語り …………… 有馬容子 ( 1 )
- Current Account Imbalances in the Euro Area Focusing  
on the SEA Countries …………… Keisuke ORII ( 23 )

## 研究ノート

- 小学校外国語活動の現状と今後の課題  
——イングランドの外国語教育政策との比較から …… 佐藤佳子 ( 45 )
- 2011年度宮城ボランティア活動とその教育的意義  
——敬愛大学国際学部の場合 …………… 櫛田久代 ( 61 )

## 史料

- 近世アウクスブルクの医師の日記の邦訳 ( 3・完 )  
——「医師フィリップ・ヘービシュテッターの日記」(1597 - 1635年)  
…………… 山本 健 ( 83 )

## 報告

- 2011年度教員研究活動報告 …………… (129)

[論文]

# 「海図のない記憶の海」を彷徨って

マーク・トウェイン『自伝』の語り

有馬 容子

## Wandering Around in the “Uncharted Sea” of Recollection — Spoken Narrative in *Autobiography of Mark Twain* —

Yoko ARIMA

*Autobiography of Mark Twain, Volume 1* (the first of a projected three-volume edition) immediately became a bestseller when it was published by University of California Press in 2010. It indicates the fact that its narrative as well as its humor, is sufficiently capable of making the reader laugh even today.

However, as accumulated manuscripts of false starts show, Twain tried repeatedly to write his autobiography in vain for more than 30 years before he finally discovered the right way to do an autobiography. Namely, he discovered his preference for free-wheeling, spoken narrative and decided to experiment with dictation.

The disinhibiting nature of talk rid Twain of the obstacles that had been hindering him from writing. While, as Twain states, the narrative should flow “as flows the brook” following the law of narrative, or “apparently systemless system,” it was a difficult art with a pen in the hand. Also a free-wheeling way of talking, and accompanying digression was requisite for Twain’s humor. As he took to talking along starting at no par-

ticular time of his life, but rather wandering at his free will all over his life, the digression took him far and wide over “an uncharted sea of recollection,” and brought together widely separated things that were both past and present. The resulting surprises and contrasts formed a vital part of his humor.

Ursula K. Le Guin has stressed the importance of the rhythm which dislodges or unlocks the writer’s ideas and visions. By dictating his own *Autobiography*, Twain must have also found that rhythm that dislodged the mass of him hidden inside, which was tossing and boiling like “volcanic fires.”

Twain used the language that people naturally used when they talked, and selected from his life merely the common experiences which go to make up the life of the average people, being convinced that these episodes were of a sort which would interest people many years hence. The uncensored version of *Autobiography of Mark Twain* finally enables us to listen to and enjoy Twain’s authentic and unsuppressed voice, which is surely what Twain craved.

## はじめに

2010年、カリフォルニア大学出版局はThe Mark Twain Project（以下MTP）による新しい『自伝』完全版の第1巻（*Autobiography of Mark Twain*, Vol. 1、最終的に全3巻になる予定。以下新版『自伝』）を出版した。この新版『自伝』の画期的なことは、MTPが『自伝』として残されたマーク・トウェイン（Mark Twain）の原稿を徹底的に検証し、実験的に書かれた夥しい量の原稿の中からトウェインが本当に『自伝』に取り入れることを決めていたものを判別し、それを加えたうえで彼が望んだとおりの順番、つまり、1906年以降口述した順番どおりに復元することにはじめて成功したことである。その結果、トウェインは書き出しに失敗した原稿を未整理のまま残したのではなく、彼自身が原稿の山からどの原稿を取り入れるかを決めていただけでなく、1906年以降の口述をどのような形で終わらせるかに至るまで整然と決めていたことが明らかになった。

これまでに、その一部を生前に出版した *North American Review* 版<sup>①</sup>、トウエインの死後公認の伝記執筆者アルバート・ビゲロー・ペイン (Albert Bigelow Paine) が編集して出版したペイン版 (*Mark Twain's Autobiography*, 1924)、ペインが含まなかった原稿をバーナード・デヴォート (Bernard DeVoto) が編集して出版したデヴォート版 (*Mark Twain in Eruption*, 1940)、口述された順番ではなくエピソードを区切って時系列的に編集し直したチャールズ・ナイダー (Charles Neider) のナイダー版 (*The Autobiography of Mark Twain*, 1959) があり、今回の新版『自伝』の内容自体はすべてが未公開であったわけではない。しかし、これまでの版はそれぞれの編集者が内容をエピソードごとに分断してそれぞれの価値基準に従って再編集したものであり、トウエインが望んだとおりの順番で編集されることがなかった (Smith 3-5)。それはひとつには残された膨大な原稿をトウエインが系統立てることなしに未完で残した、雑ばくな原稿の山であるかのように誤解していたからである。

1906年1月から1日2時間のペースで開始された口述は、はじめの頃はほぼ毎日行われ、原稿に起こすとその量は膨大なものになった。それをトウエインが語ったそのままの順番で再現することにどれだけの意味があるのか、ナイダー版『自伝』のように整理し、時系列に並べ変えたほうがよいという意見もある (渡辺 14-23)。しかし、実際に新版『自伝』を読むと、果たしてそうだろうかという疑問が湧いてくる。内容的にはすでに出版されている版に含まれていて馴染みのあるエピソードもかなり含まれているのにもかかわらず、新たな発見も少なくない。どの版よりもユーモラスである。何よりも1906年以降のトウエインが、そこに存在して毎日語ってくれているような現実観があり、百数年前の口述とは思えないほど身近な感じもする。そもそもナイダー版『自伝』を読んでいたのではトウエインが残そうと望んだ『自伝』の口述のほぼすべてが、最晩年の1906年以降であったことさえ明確にはわからない。これだけ印象が違うということはこれまで編集されてきた『自伝』で大事な部分が少ないから切り落とされていたのではないかと疑っても不思議はないだ

ろう。

本稿ではまずトウェインが口述という手段にこだわったのはどうしてかを確認し、それが順番どおりに再現されることによってどのような効果が発揮されるのか、既刊の第1巻からわかる範囲で具体的に検討し、その意味を考察したい。

## 1. 蓄積した記憶を放出させるリズム

トウェインが『自伝』を書き始めたのは、友人で当時国務長官であったジョン・ヘイ (John Hay) に勧められたからであり、次のような経緯があった (*Autobiography of Mark Twain* 223-24)。口述ならではの妙を示すためにも、あえてトウェインが語りながら組み込んだ細部の描写を入れて説明する。

それはヘイが40才、トウェインが42才のときで彼がトウェインに言ったことは大まかに次のようなことであった。人間というのは40才で人生の頂点に上り詰め、その後終末の方向へ下降し始める。普通の人間は、厳密には言わないが大体平均的な人間というのは、その年齢までに自分の人生が成功だったか失敗だったか結果が出ている。どちらにせよ、記録に値するだけの人生を終わらせているし、どちらにせよ、生きてきた人生は書き留めるに値している。そう言うと彼はトウェインに『自伝』を書き始めたか、もう2年も失ってしまったからすぐに始めなくては、と発破をかけたのである。

トウェインはヘイが自分たち2人を平均的な人間の部類に入れたことには怒りを覚えなかったが、多少なりとも心が傷つけられた。彼は失った2年間を取り戻そうと、ただちに『自伝』の執筆にとりかかった。ところがいつものことながら、なかなか順調に筆が進まない。1週間で決意は消え、書き始めた原稿は全部捨ててしまった。それから、3年か4年ごとにまた新しく書き始めては捨てる、ということが続いた。書き留めた内容を『自伝』に使えたらと思って日記を書いたこともあったが、1週間

しかもたなかった。この8年から10年のあいだに再び『自伝』を書いてみようとしたこともあったが満足のいくものではなかった。いつもの駄目な感じのトウエインがありありと語られ、じわじわと可笑しさがこみ上げてくる。あとで述べるがトウエインの口述は、このユーモラスな気分<sup>ナラティブ</sup>に達しているとき最高潮になる。

そのあと、トウエインは口述にこだわった理由について核心に触れる内容を比喩的に説明しだすのである。彼は、ペンで書くと文語調すぎてしまう。ペンを握っていると物語を創作するのは難しい。それは執筆の速さがナラティブに合っていないからだ、と説明する。ナラティブというのは、小川が山を流れ落ちるようにさらさらと流れなければならない。ところが、ペンを握って書いているとその流れの速さは運河の流れのように「ゆっくりと、なめらかに、礼儀正しく、眠たげで (slowly, smoothly, decorously, sleepily)」、「上品で、整いすぎている (too prim, too nice)」。その進み方やスタイルはナラティブに合っていないのだ。

ペンで書く速さがナラティブに合っていないとすれば、どういうテンポが適切なのだろう。本格的に『自伝』の口述を始める2年前、トウエインはその面白さをウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) に以下のように興奮気味に語っている。

I've struck it! And I will give it away—to you. You will never know how much enjoyment you have lost until you get to dictating your autobiography; then you will realize, with a pang, that you might have been doing it all your life if you had only had the luck to think of it. And you will be astonished (& charmed) to see *how like talk it is, & how real it sounds, & how well & compactly & sequentially it constructs itself, & what a dewy & breezy & woodsy freshness it has...* (MTHL II 778 強調筆者)。

口述したときの音や無駄のない構成、そして全体としてその清々しさに感動している様子が伝わってくる。新版『自伝』の編集長ハリエット・エリノア・スミス (Harriet Elinor Smith) がその序文で指摘しているようにこの頃からペンによる制約を解消するには口述という手段が最も

有効であることを発見していたと考えられる (20-21)。

実際、清々しく流れるテンポを獲得するとトウェインの想像力は活性化され、内容が勢いよく飛び出してくることがあったようである。ナイダー版『自伝』第58章(1906年以降に口述された。新版『自伝』第1巻には未所収)には、いざ口を開けば、語りたい内容が飛び出してくる、言葉が追いつかない様子が語られている。それは同時に20もの異なった方向から、押し寄せてきて、しばらくはこの「ナイアガラの滝の大波」に吞まれ、水中に沈んで、息をすることすらできなくなったという(372)。1905年頃のトウェイン自身を代弁していると考えられる『人間とは何か』(*What is Man?* 1906)の老人も強く感動するようなものにぶつかったとき、口を開いて言葉にすると、心が<sup>マインド</sup>注意を集中させ、人間が意識しないのに言葉が飛びだしてくる様子を語っている(182)。

ということは、つまり膨大な知識や過去の記憶といったものがトウェインの内面に蓄積されていて、彼が外に出す方法さえみつければ、凄まじい勢いで飛び出してくる状態であったということであろう。彼は新版『自伝』の最終的な形が固まってからの口述の部分に3種類の序文を書いていたが、その中のひとつ“The Final (and Right) Plan”は次のような言葉からはじまる。“What a wee little part of a person’s life are his acts and his words!”(人間の行動と言葉は人生のなんとわずかな部分でしかないことか!)。続けて、人生の本当の中身は頭の中にあるのであって、その人間にしかわからない。頭の中の工場は常に稼働していて、彼の考えたことが彼の歴史であり、言葉や行動は彼の世界の薄い外皮でしかないと述べる。そして大部分は隠れていて、昼夜休まず煮えたぎる溶岩のように活動しているから、そのエネルギーに活動する膨大な量の中身を書けば1日8万語の本1冊、1年で365冊になるほどの量になり、とても書き尽くせるものではない。『自伝』はその人間の着ている服やボタンにしかずぎないと表現している。

ペンで書いていたのではとても追いつかないほどの、隠れた膨大な知識を外に出す方法が、口述だったと言えるだろう。『自伝』はこの口述と

いう方法の発見によりやっと順調に開始されたわけだが、それにより口火を切られた想像力のほとぼしりは他の創作活動にも影響を及ぼしていることは見逃せない。1905年から1906年頃の執筆活動をざっとみると、妻のオリヴィアが亡くなった翌年であるにもかかわらず、この短期間にトウェインは彼自身の衰弱していく体力を考えれば驚くほどの集中力でさまざまな作品の執筆にあたっている。1905年の4月には「落伍者の避け所」(“The Refuge of the Derelicts”、以下「落伍者」)を断続的に執筆、5月20日から6月23日の約1ヵ月で現存の『細菌ハックの冒険』(“Three Thousand Years Among the Microbes”)の原稿をすべて執筆し、その直後6月末から1ヵ月ほど、『ミステリアス・ストレンジャー44号』(“The Mysterious Stranger, No. 44”)の修正にとりかかり、1905年の半ばから1906年の初めの数ヵ月の間には「ストームフィールド船長の天国訪問記」(“Captain Stormfield’s Visit to Heaven”)の30年も前の原稿を読み直し、“A Journey to the Asterisk”を含む“Captain Stormfield Resumes”(第5章)と“From Captain Stormfield’s Reminiscences”(第6章)およびはしがきを加えている(1907年に出版されたときには含まれなかった)。1906年の7月には「イヴの日記」(“Eve’s Diary”)を執筆し、すでに書かれていた「アダムの日記」(“Adam’s Diary”)に修正を加え、その後10月までに魂についての議論を含む『人間とは何か』第6章の「困難な問題」を加え“Interpreting the Deity”と“A Horse’s Tale”を書いた。その間、『自伝』の口述をし(神に関する内容を多く含む)、1906年の6月頃「落伍者」を断続的に執筆しているのである(*Fables of Man 12-14, The Bible According to Mark Twain 135*)。

作家は往々にして自分の内面にぎっしり詰まっているアイデアやヴィジョンを外に出すのに苦勞するようである。アーシュラ・K・ル＝グウィン(Ursula K. Le Guin)はヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)が友人のヴィタ・サックヴィル＝ウエスト(Vita Sackville-West)に出した手紙の以下の部分を引用してこのことに触れている。ウエストは「適切な言葉」を見つけることにこだわって文体について苦悩していた。ウルフは以下のように書いている。

...here am I sitting after half the morning, crammed with ideas, and visions, and so on, and can't dislodge them, for lack of the right rhythm. Now this is very profound, what rhythm is, and goes far deeper than words. A sight, an emotion, creates this wave in the mind, long before it makes words to fit it...

ウルフは適切な言葉を探すより、正しいリズムをつかむことの方が大事なのだと言っているのである。彼女はその午前中、アイデアもヴィジョンも頭にいっぱい詰まっているのに「正しいリズムがつかめなからそれを外に出すことができなかった」のであり、そのリズムとは言葉よりはるかに深いところにあり、ある光景や感情はそれにふさわしい言葉を作り出すより前にこの波を作るのだと書いている。ル・グウィンはこちらにさらに自分の考えを加え、記憶と経験よりさらに深いところに、想像力と創作よりさらに深いところにリズムがあって、記憶と想像力と言葉はみな、このリズムに合わせて動いていくのだとしている。そして作家の仕事は、「さらに深く潜っていき、そのリズムを感じ、見つけ、そのリズムに合わせて動き、それに動かされて、そのリズムが記憶と想像力を動かして言葉を探しあてるようにさせること」だと述べている (“The question I get asked most often” 280-282)。

『自伝』の方法に苦悩するトウェインの様子を知れば知るほど、新版『自伝』で彼の語りのリズムに触れれば触れるほど、『自伝』の口述は彼にとって正しいリズムをもたらしてくれるものであったのではないかと思えてくる。

## 2. 海図のない航路に行く——システムのないシステム

それではトウェインの口述のリズムとは、実際にどのようなものだったのだろうか。まずトウェイン自身の説明から探してみよう。彼は新版『自伝』の最初のページの序文 “An Early Attempt” で、『自伝』が長続きしなかったもうひとつの大きな理由を以下のように述べている。これは

ヒントになるだろう。

This is not to be wondered at, for its plan is the old, old, old unflexible and difficult one—the plan that starts you at the cradle and drives you straight for the grave, with no side excursions permitted on the way. Whereas the side-excursions are the life of our life-voyage, and should be, also, of its history (203).

トウエインはここで通常の『自伝』のように、揺りかごから墓場までまっしぐらに書くという方法は、脇道にそれることを許さない柔軟性に欠くものだから長続きしなかったと言っている。道草を食うことは人生という旅の原動力であるし、人間の歴史に活力を与えるものでもあるのに、と不満気でもある。彼にとってこの脇道にそれるということは大事な要素だった。

さらに、新版『自伝』の最終版に対する3つの序文のひとつ“The Latest Attempt”では、この脇道にそれるということが、口述にどのように反映されるのか具体的に述べている。

Finally, in Florence in 1904, I hit upon the right way to do an Autobiography: start it at no particular time of your life; wander at your free will all over your life; talk only about the thing which interests you for the moment; drop it the moment its interest threatens to pale, and turn your talk upon the new and more interesting thing that has intruded itself into your mind meantime (220).

『自伝』を口述する正しい方法としてトウエインが語っているのは、特に自分の人生のどの部分を語るかは決めず、自由にあちらこちら彷徨いながら語ることであり、そのとき興味をもったことのみを話し、興味が薄れればあっさり次の話題に移ってしまうという方法である。そのまま文章に起こせば、途方もなく冗漫なものになりかねない印象を与えるが、彼は時系列的に語ることは決してせず、この方法で『自伝』の口述を続けた。

この方法についてハウエルズには次のように説明している（1906年3月

25日の口述)。

... its apparently systemless system—only apparently systemless, for it is not that. It is a deliberate system. *It is a system which follows no charted course and is not going to follow any such course.* It is a system which is a complete and purposed jumble (441 強調筆者)。

見たところではシステムがないようだが、「海図にある航路」を進まないというだけで、歴としたシステムであることを強調している。具体的に想像するのは難しいが、たとえばこれはトウェインがネバダ州ジャックラス峡谷で暮らしたときの友人ジム・ギリス (Jim Gillis) の語りと非常に類似しているように思われる。ジムは豊かな想像力を持ち、即興で話を作り出す天性のユーモリストであった。彼はインスピレーションを得て語り出すと自然に展開するのに任せ、どのような方向に発展するのか、どのような形で終わるのか、などといったことは一向に気にしなかった。そのくせ話の組み立ては実に巧妙だったという (ナイダー版『自伝』27章)。しかし、これまでの『自伝』では、ナイダー版『自伝』のようにエピソードごとに切断され、その話題に至るまでの連想の詳細はほとんど余計なものとして削除されてしまっていた。したがって、実際にはどのような語りであったか全貌を把握することができなかつたと言えよう。新版『自伝』第1巻が出版されたおかげで我々は、はじめてその語りに触れることができるわけである。

ここで改めて、トウェインの膨大な記憶を呼び覚ますリズムを具体的に検討してみたい。ここでは特に、トウェインの生涯の友ジョセフ・ホプキンス・トウィッチェル (Joseph Hopkins Twichell) に関する記述に焦点を当て、辿ることにする。新版『自伝』は既刊がまだ1巻のみだが、他の『自伝』、特にナイダー版『自伝』よりはるかにトウィッチェルに関する記述が多く、他の版にない特徴を把握するには適切な題材と思われるからである<sup>(2)</sup>。

トウィッチェルは聖職者でありながら、生涯キリスト教を信じることのなかったトウェインの掛け替えのない友であった。その交友は1868年

に知り合ってからトウェインが死ぬまで40年以上続いた。新版『自伝』では話の展開の節々でトウィッチェルが登場し、トウェインの言う「次の話題となる新たな興味 (the new and more interesting thing)」をもたらす役目を果たしている。不運の役者ジョン・マロン (John Malone) が亡くなったことも、結婚以来のクレメンス家の御者であったパトリック (Patrick) の臨終の知らせをもってくるのも彼である。そして、そういった悲しいことがあるとなおさらふざけたくなる性格の持ち主だったトウェインは、決まってトウィッチェルのことを話題にしたがった。彼はトウィッチェルのことを話題にするとユーモラスな気分になり替わるようだった。そしてそれはいつも大きな笑いを誘う途方もなく可笑しい種類のものになった。トウェインは語っているうちにふざけたい気分になり、別の話題に移る途中で、「トウィッチェル、トウィッチェル」と言いかけることがある。彼は道草を食いながら興味のあるものからより面白いものへと変化して語るトウェインの口述のリズムを形成する格好の道具だったのである。

新版『自伝』は日記の形式をとっているので1906年以降のニューヨークにおける口述の日々、トウィッチェルはトウェインの極めて身近に存在し、彼と度々出かけ、行動を共にしていることがわかる。しかも、トウェインの“systemless system”が再現されているためだと思われるが、その一見余計なものに思われる細部は未整理の無駄な情報という印象を与えるどころか、不思議にも効果的にユーモアを生み出している。毎日2時間の口述を文字どおりそのまま起こしたのでは、決してこのように整然とまとまることはない。トウェインがいかに気取らない簡潔なスタイルにこだわった作家であったかを忘れてはいけない。一見無駄な遊びのように思える描写も、ユーモアを活かすために計算された最小限の表現なのである。

語りの面白さは説明するよりも具体的にみるべきだろう。少し長くなるが、トウィッチェルに関連した部分を、その内容に沿って大まかに紹介する。以下はトウェインが、マロンが亡くなったことを知った後に続

いて口述した部分である。無駄にみえる細部も、原文ではリズムの一部として大事な役目を果たしているので、あえて含めることにする。

その前の晩トウェインはトウィッチェルと一緒にシッケルズ (Daniel Sickles) 将軍を訪問していた。シッケルズ将軍は南北戦争中トウィッチェルが従軍牧師として所属していた大部隊を率いていた。トウェインは彼に1度か2度しか会ったことがないのに、トウィッチェルとつき合った年数分 (38年か39年間) 知り合いだったような気がしていたというから、トウィッチェルがいかにこの将軍のことを好んで話していたかがわかる。ところがトウェインにとってはどうも好みの人物ではないらしい。彼は、シッケルズ将軍のスピーチのつまらなさを婉曲的に、しかし立て続けに指摘してみる。要点はぎっしり詰まっているのだが、活気がないというか単調というか、じきに眠くなってしまう。自分も、トウィッチェルに1度や2度足を踏みつけられた。ビル・ナイ (Bill Nye : 当時人気のあった文学的コメディアンのみひとり) もワグナーの音楽の方がいいと誰かから聞いたと言っていた、と。しかし、それ以上は奥歯に物の挟まったような話し方しかできない。しかも、将軍は本来ならばトウェインが思いっきり皮肉りたくなるような虚栄心の強い人間でもあるらしいのだ。彼は自分の戦争で失った足のことをひととき大事に思っており、死ぬ直前に自分が立派に見える名言を残すことにひどく執着している。しかし、トウェインとしては世の中から、特にトウィッチェルから立派な軍人として尊敬されている人物だけに、たとえ存命中に出版する予定のない『自伝』の口述であっても批判がましいことはおくびにも出せないのだ。

このようなシッケルズ将軍の話もトウィッチェルがかかわっていることでほほえましいユーモアに変化する。トウィッチェルは心から将軍を敬愛している。将軍が亡くなったという誤報を自分の司る日曜礼拝の直前にもらった彼は、気が動顛してもはや感情が抑えられない。会衆は普段は沈着冷静な彼がさほど感動的でもない章を読みながら、声を詰まらせ涙を流している様子にただならぬ異様さを感じる。

しかし、ユーモアが全開になるのは、次に続く口述だ。このエピソード

ドを語っているあいだに、トウェインはすっかり楽しい気分になったらしい。トウィッチェルというのは本当に面白い経験をたくさんしているんだ、と語り出すとあまり面白くないシクルズ将軍のことなど、どうでもよくなってしまふ。

それはある土曜日の晩の出来事ということになっている。日曜日には礼拝があるので、聖職者のトウィッチェルには、取り返しのつかないことがあってはならない日だ。彼は妻の洋服ダンスのところに珍しいビンを見つけて、それが育毛剤だと勘違いする。勝手に自分の部屋に持って行って、たっぷり髪の毛にしみこませたあとすっかり忘れてしまった。ところが次の日、それが彼の髪を輝くばかりのグリーンに染めてしまったことが判明する。あわてて代わりの牧師を探すがみつからない。結局自分が説教することになるが、彼は軽い内容の説教をまったく持ち合わせていなかった。しかたなく、いつものとても深刻な、厳粛な説教をせざるをえなかった。

悪いことに、その説教の厳粛さと髪の毛の「<sup>ゲイユテイ</sup>賑やかさ」はまったく調和していなかった。説教を聞いていた人たちはハンカチを口に押しつけて必死になって笑いをこらえていた。ところが、当のトウィッチェルは満更でもない様子なのである。彼が言うのには教会に集まった人たちの「全員」が、この全員という言葉**を強調して言ったのだが**、始めから終わりまで、いままで見たことがないほど熱心に彼の説教を聞いていた。いつもなら多少は関心がなさそうであったり、意識がどこかにそれていたりという感じがあったが、今回はそんなのではない。そこに座っていた人たちは全員が、これは「今日ここに集まった人たちのためだけのショウなんだ。すべてものにしなくては。少しも無駄にしてはいけない」と思っているようだった、とトウィッチェルは言うのである。さらに、説教壇から降りてくると、かつてないほどの数の人たちが彼に握手を求め、説教を褒め称えるために待っていたと言うのである。

トウェインは会衆が説教に興味をもったのではなく、彼の髪の毛をもっと近くで見ただけだということを知っていたから、こんな偽り

の行為が教会の中で起こったなんて残念だと言う。その後どうなったかという、今度はトウェインの説明によれば、毎週日曜日がくるたびにトウィッチェルの髪の毛への関心はますます高まっていった。というのは彼の髪は単なる「単調に」グリーンだったのではなく、濃いグリーンになったり、赤みを帯びたり、紫っぽく、黄色っぽく、青っぽくという風に多種多様に変化し、いつも魅惑的なまだらだったからだ。そして毎週その前の週の日曜よりも「ちょっと面白かった」。おかげで彼は有名になってニューヨークやボストン、サウスカロライナ、それに日本からも人々が見にくるようになった。彼の髪の毛が魅惑的に変化しているあいだは、教会の席も空席無しという状態だった。トウェインはおかげでたくさんの人たちがショーを見るために教会に加わり、ビジネス面で停滞気味だった教会を繁栄させるきっかけになったと結んでいる。

心の底ではあまり面白くないと思っているシッケルズ将軍のことを語りながら、トウィッチェルの突拍子もない経験のことがひらめいたときのトウェインの嬉しそうな顔が浮かび上がってくるようである。彼は別のところで『自伝』の口述の醍醐味を次のように語っている。

... here we have diary and history combined; because as soon as I wander from the present text — the thought of to-day — that digression takes me far and wide over *an uncharted sea of recollection*... The privilege of beginning every day in the diary form is a valuable one. I may even use a larger word, and say it is a precious one, for it brings together widely separated things that are in a manner related to each other and consequently pleasant surprises and contrasts are pretty sure to result every now and then (283 強調筆者).

『自伝』を日記と過去の記憶とを組み合わせさせた形にした理由について語っている部分であるが、それはいま考えていることを語っていて、脇道にそれると遙か遠く「海図なき記憶の海」に彷徨い出ることになり、「ひどく離れていた記憶がいわばどこかでつながっていて」、「嬉しい驚き」やいま語っていることとのコントラストが生じることになるからだと言

っている。トウィッチェルの話を思い出したときのトウェインの嬉しさはまさにこの「海図なき記憶の海」での航海で思いがけなく見つけたものの驚きとそれがいま語っていることとのあいだに生じさせる嬉しいコントラストによるものだったのだろう。

新版『自伝』の大きな目的は通常の『自伝』のように時系列的に語るのではなく、話し始めた話題の興味が薄れたら他のことに話題を移して語り続けるという、一見冗漫な語りがいかに読者を楽しませるものであるかを実践し、その楽しさを紙に定着させることだったのではないだろうか。トウェインがそれを歴とした“system”だと言い張るだけあって、このトウィッチェルのエピソードを例にとってみても、ユーモアを最大限に活かした無駄のない構成であることがわかるのである。

悲しさを誘うパトリックの葬式の後にも、戦没者慰霊の厳粛な場を司るトウィッチェルと式典に疲れ果てた軍人たちとの対照を描くユーモラスな場面が語られる。しかし、「海図のない記憶の海」に出航し、現在の文脈と過去の出来事がつながるとき、それは思い出したくない過去の悲しい記憶であることもあった。パトリックの死は亡くなった最愛の娘スージー (Susy) の思い出につながり、トウェインは古い原稿の中からスージーの書いた、「父トウェイン伝」に関連する記述を見つけることになる。それ以降130ページほども、それに基づいて呼び起こされた記憶が語られることになるのだ。トウェインは1896年に亡くなったこの娘にまつわる悲しい記憶を、一時は無害化して忘れることに必死になった。夢と現実の区別がわからなくなる、いわゆる一連の「夢の作品」の中で悪夢から覚めるプロットを書き続けたのもそのひとつである。1906年になってやっと彼女の記憶をユーモアを交えて語るができるようになったのだろう。しかし、それも口述しながら記憶の海を彷徨って思いがけない巡り合わせで浮かび上がってきたものであり、決まった航路を行くように時系列的に語っていたのでは、決して日の目を見ることはなかったかもしれない内容なのだ。このような繊細なトウェインの心の糸をすべて切り離してしまったこれまでの『自伝』が、多くを失っていたことは否

めない事実だろう。

### 3. モリス事件

没後100年で出版された新版『自伝』は1年で販売部数50万部に迫るベストセラーになったが、それは当然のことながら現代の読者をも引きつける面白い内容であったからに他ならない。時代を超える作品を残すためにトウェインは、長年の試行錯誤の結果磨き抜いた技を身につけていた。そのためには文体や内容についてどのように工夫すべきかについても『自伝』の中で詳しく語っていたのである。しかし、すでに述べたように、これまでの『自伝』はそれぞれの編集者の価値基準に従い、削除された部分があるために、肝心な部分が抜け落ちていることも多く、時代を超える作品の妙にかかわる大事な部分についても例外ではなかった。

たとえば、当時しばらくのあいだ新聞を賑わし続けていたモリス事件 (Morris incident) もそういった例のひとつである。ナイダー版『自伝』ではみごとにそのすべてが削除されてしまっている。しかし、トウェインは新版『自伝』で他のことを語りながらも50ページほどその事件から意識を逸らせないでおり、それは明らかに『自伝』口述中の彼を触発する興味深い事件であった。

この事件は、簡単に説明すれば次のような事件であった。教養も身分もあり気品のあるモリス婦人が夫の公職からの解雇を不当とし、調査を願い出たものの埒が開かず、当時の大統領セオドア・ローズベルト (Theodore Roosevelt) に面会を求めたことに端を発する。大統領の私設秘書バーズ (Barnes) が頑として取り次がず、静かにいつまでも待つことを主張した婦人としてしばらく押し問答した結果、バーズは警備の警官に指示し、力づくでホワイトハウスから数ブロック先の警察署まで彼女を運び出し、精神異常行為として罰金を科した。婦人はショックと怒りから心身ともに障害を受け入院する事態となった。しかし、彼女はあくま

でも冷静であり、落ち着いた巧みな言葉遣いからも彼女が精神異常ではないことは、誰からも明らかであった。

トウェインはこの事件がいかに取るに足りないものであるかを混乱の19世紀末から20世紀初期のアメリカにおける内外の大問題と対比させて目立たそうとしている。当時ロシアではすでに革命の兆しがあった。中国では大きな動乱が差し迫っていることを予見させる不穏な動きがあり、そのためにアメリカはアギナルド (Emilio Aguinaldo) 将軍を卑劣な方法で捕らえたファンストン (Frederick Funston) 将軍の指揮のもとにフィリピンから連隊を動員していた。トウェインがそれぞれの問題はそれだけで充分なスペースを占めるに値する事件であるのにもかかわらず、そこにこのモリス事件が割り込んですべてかき消してしまっていると嘆いていることは確かである。自分の『自伝』がいつ出版されるか知らないが、そのとき国民がこのモリス事件を読んで思い出そうとしても思い出せないだろうと言って、散々虚仮こげにしている様子でもある。

ところが、トウェインのポイントは実は他のところにある。内容はともかく、当時、このつまらぬ事件についてアメリカ中の人たちが腹を立て躍起になって議論しており、彼はその事件がそれだけ皆の関心を引きつけ、感情を煽り立てているというその事実に強い興味を持っていた。そしてこういったものこそ『自伝』にもってこいの題材なのだ、と言う。確かに、時間が経てば何の価値もなくなる事件だ。しかし、人生とは大きな事件ばかりではなく、つまらないこともたくさん詰まっているものだ。些細な出来事だからといってそれらを削除してしまっている『自伝』は人生の本来の形を映しだしていない、「人生というのはそういった大小の出来事にぶら下がっている人間の感情や興味からなっているのだ」と言うのである (258-59)。

モリス事件について語る少し前の部分で (1906年1月10日の口述)、トウェインは人生とは現実と実際に起こる事件からなっているのではなく、そのほとんどが「頭ヘッドの中に永遠に嵐のように渦巻いている思考からなっているのだ」(256)と語っている。すでに述べたように1906年の口述の

時期、トウェインは人間の現実を決してむき出しの針金のような事実の羅列ではなく、実は人間の頭の中にあるさまざまな思考を<sup>かたど</sup>模っているのが人生だという考えを持つようになっていた(6ページ参照)。

このように人間の心の動きに強い関心をもつようになると、いかにもトウェインらしく、興味の矛先は平凡な人の人生に向いていく。1906年3月26日には『自伝』に自分の輝かしい功績ではなく、普通の人の人生にもあるような、平凡な経験を取り上げる決心を述べている。ナラティブというのは普通の人が興味をもつようなものでなければならない。読者にとってなじみがあり、自分の人生を投影できるのはそういった平凡な出来事であるというわけである。人生で有名な人たちと接触したときのことばかりを書きたがる伝記作家に対しては「有名でない人との接触も同じように面白かったのに、それは読者にとってもそうであるのに、それに有名な人たちとの巡り会いよりずっと多いのに」と皮肉っている(441)。1905年6月ニューハンプシャー州のダブリンで『自伝』を口述していたときも、古い手紙の束から新たな題材を探しているうちに「身分が高くても低くても、金持ちでも貧しくても、有名でもそうでなくても、すべての人たちの喜びと悲しみがかけがえのないものとなった。以前はそんなことはなかったのだが、彼らの心の中の出来事を自分の心で受け止めることができるようになった」と感想をもらしている(*Fables of Man* 14)。

1905年頃のトウェイン自身の様子を最もよく反映していると思われる作品「落伍者」には、これに呼応した部分がある。この作品には全人類の父アダムの子孫を救うという変わった計画を提案するジョージ・スターリング(George Sterling)という若い画家が登場する。ストームフィールド(Stormfield)提督の住む避難所に居候している彼は人生に失敗してそこに流れ着いてきた落伍者の一人一人の心の中を知るに連れて、以前はつまらないとしか思えなかった平凡な人たちの心に共感し、その面白さを実感するようになるのだ。この時期トウェインは以前書いた「アダムの日記」を読み直し修正を加えているが、これは全人類の父アダ

ムの記念碑を計画するジョージと相通ずる人間をいとおしむ気持ちの現われであろう。

トウェインはモリス事件の経過をずっと観察しているうちに、内容だけではなく、言葉についても大事な発見をしている。つまらない内容だと思いつつも、それに関する記事を読んだ彼はその言葉の力に驚嘆するのである。何年先になるかわからないが、それを読む人がいた場合の実験としてモリス事件の記事そのものを『自伝』に挿入し、次のように指摘する。取るに足りない内容だが、現在我々が使っている極めて自然な言葉で語られており、このような言葉で語られているものはたとえ100年先に読まれても、我々が今感じているのと同じ強い関心を惹きつける力があるだろう、と。そして、この記事がニュースとすれば、歴史の言葉と対比させて次のように説明する。もし、その事件が50年前に起きていて、歴史家が発掘して彼の言葉で意見を加えて記述すれば、それは歴史であって、読者の興味はたちまち冷めてしまう。歴史は読者の強い関心を引きつけるという点ではニュースに太刀打ちができない。実際に異常な事件を目撃した人がそれをナラティブの形にするとそれはニュースで、そこに反映される強い関心は永遠に残り、そのエピソードは時間がたつても風化することはないのだ、というのである。

トウェインは1867年に自分が新聞の記事を書いていた頃の記憶を語り出す。ある記事の取材のために米国議会図書館司書の友人を訪ねた彼はその目的の資料ではなく、別の記事に釘付けになってしまった。それは59年前にある紳士によって書かれたもので、彼は英国軍が首都を焼き尽くした事件を目撃し、そのことが鮮やかに頭に残っている状態で自分が普段使っている言葉を使って綴ったものであった。その記事にトウェインは強く引きつけられ、興奮し、自分の任務も忘れて読むことに没頭してしまっただけという。

考えてみればトウェインは若い頃から、このような生き生きと内容を伝える力のある言葉を、常に意識して作品に取り入れようとしてきた。彼が日記と自伝を一緒にした形で『自伝』を書くことに決めていたのは、

まだ内容の面白さが鮮明に頭に残っており、興奮が消えないうちにしか語れない迫力のある言葉に執着したからなのである。彼はかつて作品に書こうと思った要点をノートに記録し、あとで思い出しながら再現しようと試みたことがあったがうまくいかなかった。しばらく使わないで放置しておくで効力を失ってしまい、それを読んで興奮したりインスピレーションを得たりすることはなかったのである（283）。そのときの興奮が伝わってくるような力のある言葉で語ってこそ、思わぬ過去の記憶を呼び覚ます連想の連鎖も可能だったのであろう。

#### 4. 結 び

トウェインは口述を本格的に始める10年ほど前、“How to Tell a Story”（1895）の中で、ユーモラスな話とは好きなようにあちらこちら彷徨いながら特に結末を気にしないで語るものだと述べている。そして、それは断固とした芸術作品で高度で繊細な技を要し、名人でなければ語れない、それにその語りの芸はアメリカのものだと述べている。トウェイン自身、語りのユーモアの名手であり19世紀半ばから後半に活躍した文学的コメディアンの一りであったのは有名である。フロンティアユーモアの語りの息づかいをそのまま残した短編“The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County”や“His Grandfather’s Old Ram”、ネバダの山中で聞いたジム・ギリスの語りの妙をそのまま再現しようとした“Tom Quarts”や“What Stumped the Bluejay”なども書き残している。

トウェインの内面に蓄積された膨大な知識や経験を外に放出させることを可能にしたのは、やはりこのリズムだったのであろう。彼は35年間の試行錯誤の結果やっとそのことを突き止め、『自伝』を完成させることができたのである。新版『自伝』に彼はそのリズム、つまりインスピレーションを得、その連想から糸を紡ぐように語るそのリズムそのものを流し込もうとした。結局、新版『自伝』は彼自身の語る「語りのユーモア」の集大成だったと言えるのである。エピソードごとに分断してしまった

これまでの『自伝』はトウェインが苦勞して残そうとしたその技を完全に無視してしまうことであつたと言わざるを得ない。

新版『自伝』（全3巻）のうち現在既刊は1巻のみだが、今後これまでさまざまな版で読まれてきたトウェインの『自伝』研究、あるいはいまだに誤解の多い晩年の研究に新たな発展を期待できるだろう。ナイダー版『自伝』に親しんできた読者は、本稿で述べた点以外にもさまざまな視点から、これまでとの解釈の違いを発見することが可能だろう。また、新版『自伝』を日本に紹介する際には、アメリカ特有のユーモラスな語り の妙をいかに表現するかが大きな課題となるに違いない。

新版『自伝』を開けば、ベッドに横たわり、ほぼ毎日2時間の口述を続けるトウェインがいる。100年以上も残ることを想定に選び抜かれた言葉で語られたエピソードに、現代の我々は耳を傾け、そのユーモアを満喫することができるのだ。『アーサー王宮廷のコネティカット・ヤンキー』（*A Connecticut Yankee in King Arthur's Court*, 1899）で、主人公ハンクは自分の中にあるオリジナルなものは、針の先で隠れてしまう程度のもものかもしれないし、微細なアトムのようなものかもしれないが、そのオリジナルなもの、その本当に自分であるものを大事にしたいと語っている（第18章）。その後もトウェインは複数の作品の中で、たとえば自分の一部であっても永遠に残ってほしいという願望、あるいはその裏返しの表現である自分が完全に消滅してしまう恐怖に言及している（『細菌ハックの冒険』第6章）。永遠に残るといふ彼の願望は、みごとに達成されたことになるだろう。我々は新版『自伝』に、等身大のトウェインの姿を見出すことができるのだから。

（注）

- (1) 1906年から1907年に“Chapters from My Autobiography”として一部を*North American Review*誌に発表。1990年にMichael J. Kiskisが*Mark Twain's Own Autobiography: The Chapters from the North American Review*として出版。
- (2) ナイダー版『自伝』でトウィッチェルが描写されるのは42章、54章、56章のみである。

（参考文献）

Le Guin, Ursula K. “The Question I Get Asked Most Often.” *The Wave in the Mind*.

- Boston: Shambhala, 2004.
- Twain, Mark [Samuel Langhorne Clemens]. *Autobiography of Mark Twain*. Vol. 1. Ed. Harriet Elinor Smith, et al. Berkeley: U of California P, 2010.
- . *The Autobiography of Mark Twain. Including Chapters Now Published for the First Time*. Ed. Charles Neider. New York: Harper, 1959.
- . *The Bible According to Mark Twain*. Ed. Howard G. Baetzhold and Joseph B. McCullough. New York: Simon and Schuster, 1996. 189–94.
- . “The Refuge of the Derelicts.” *Mark Twain’s Fables of Man*. Ed. John S. Tuckey. Berkeley: U of California P, 1972. 157–248.
- . *What Is Man? and Other Philosophical Writings*. Ed. Paul Baender. Berkeley: U of California P, 1973.
- Twain, Mark and William Dean Howells. *Mark Twain-Howells Letters: Correspondence of Samuel Clemens and William D. Howells, 1872–1910*. Ed. Henry Hash Smith and William M. Gibson. Cambridge: Harvard UP, 1960.
- 渡辺利夫「“Genius is not enough” フランクリン『自伝』からマーク・トウエイン『自伝』まで」『マーク・トウエイン——研究と批評』第11号、日本マーク・トウエイン協会（南雲堂、2012年）14–23ページ。

[Article]

# Current Account Imbalances in the Euro Area Focusing on the SEA Countries

Keisuke ORII

As a key component of the eurozone crisis, current account imbalances in the Euro Area and its causes are examined both theoretically and empirically. A theoretical model shows that the deteriorated current account balances with high growths supported by domestic credit and financial inflows in the SEA countries lack sustainability. Empirical analyses find out significant determinants of the current account imbalances: income level and its growth rate, domestic credit, saving rate, inflation rate and labor cost. It is also found that regional idiosyncrasy in the economic union should be taken into consideration.

## 1. Introduction

At the end of 2009, two years after the U.S. subprime mortgage loan problem evolved to a world-wide financial crisis in the middle of 2007, European sovereign debt crisis emerged. Greece disclosed the actual figures of its budget deficit, which impaired the credibility of its sovereign bond. Contagion of discredit towards sovereign bonds spread all over the southern euro area (SEA, hereafter) including Ireland. Yield spreads of long-term bonds between Germany and the peripheral euro area widened to critical levels. The SEA countries sought financial assistance one after another from EU, ECB, or other IFIs (international financial institutions) like IMF. A series of discredited sovereign debts cast

doubt on the viability of the single currency itself.

Along with providing financial aid to Greece in May 2010<sup>1</sup>, the European Union decided to establish a special fund: the European Financial Stability Fund (EFSF). The European Central Bank (ECB) also embarked on a set of sizable financial assistance. It provided liquidity to financial market by name of the Long-term Refinance Operations (LTRO) in December 2011 and February 2012 by obtaining eligible collateral from banks. Outright Monetary Transactions (OMT) inaugurated in September 2012, through which the ECB purchased directly the SEA bonds from markets. The euro area decided to establish another financial safety net, European Stability Mechanism (ESM) by absorbing EFSF. Although the LTRO repayments started in January 2013, the eurozone economy has yet to recover<sup>2</sup>.

Causes of the European sovereign bond crisis have been studied from various points of view. Some researchers emphasized the lack of banking union or fiscal union, and others revisited a classical query of whether the eurozone had been an optimum currency area. There is, however, another important direction of analysis: current account imbalances. This paper aims at addressing current account imbalance problems as the nucleus of the eurozone crisis. It will contribute much to interrogate whether there are drawbacks in forming a currency union among a mixture of countries in terms of economic development, specifically when current account imbalance problems have been underestimated.

The remainder of this paper is structured as follows. The next section surveys main literature concerning the current account imbalances as a cause of the eurozone crisis. Section 3 documents the stylized facts of the crisis by choosing relevant economic indicators. Section 4 employs a theoretical approach to the intertemporal budget constraint of a capital importing economy to draw implications of the current account problems. Section 5 attempts an empirical research to find significant determinants of the current account imbalances in the euro area for considering crisis mecha-

nism. The final section concludes.

## 2. Literature survey

This section briefs relevant papers about current account imbalances and the eurozone crisis. Concentrating on studies after 2000, I classify them into the following three groups: the pre-crisis (2.1), post-crisis (2.2), and global standpoint (2.3) studies.

### 2.1 Pre-crisis studies

In spite of widespread concerns beforehand, especially from the U.S. commentators, the launch of the euro received an unexpected appraisal at the beginning of this century. At that time, Blanchard and Giavazzi (2002), revisiting the Feldstein-Horioka puzzle<sup>3</sup>, found that the high cross-country correlation between saving and investment had substantially declined in the euro area. They argued that the current attitude of benign neglect vis-à-vis the current account in the euro area countries was appropriate, and that countries with sizable current account deficits such as Portugal and Greece should not worry and need not take measures to reduce their external deficits.

In the first half of the last decade, however, “current account imbalances” or “global imbalances” primarily meant the colossal current account deficits recorded by the U.S. A massive amount of the U.S. current account deficits was, then, recognized as one of the main disturbances in the global financial architecture. Among a number of researches<sup>4</sup>, Caballero, Fahri and Gourinchas (2008) provided a theoretical model to explain the global imbalances by employing a global framework.

Lane and Milesi-Ferretti (2006) examined potential differences across European economies in their vulnerability to a shift in global imbalances. They assessed the potential impact on Europe of an unwinding of global imbalances, concluding that a substantial real dollar depreciation entailed by a reduction in the U.S. trade deficit would convey a limited effect on European economies. This indicates that the underlying problems in the

euro area were, then, scarcely noticed. The main concern was directed to the adverse effect of the looming dollar's real depreciation on the European economies.

## **2.2 Pre-crisis studies**

After sovereign bonds issued by the SEA countries began to lose their credibility, academic interests returned to the external balance problems in this region<sup>5</sup>.

Among them, Jaumotte and Sodsriwiboon (2010), focusing on the SEA countries, found that the decline in the current accounts coincided with a large decline in private savings and a much more moderate increase in investment rates. Arguing that lower savings explain most of the abnormal deterioration in current accounts in the SEA, however, they noted that the situations varied substantially across countries, and that the current account deficits were expected to remain high in the medium run.

Giavazzi and Spaventa (2010) also focused on the SEA countries. Concluding that the growth driven by domestic demand and financed with foreign borrowing was unsustainable, they found that an extraordinary expansion of domestic credit primarily led to a construction boom in the SEA countries and that the credit growth was fed by foreign borrowing. They also emphasized that the credit was expended mainly in the domestic construction sector, which was a less competitive industry.

Eichengreen (2010) pointed out that members of the euro-area periphery had run persistent deficits against both the rest of euroland and the rest of the world, while the surpluses of the countries of the euro-area's core have been offset, in part, by deficits vis-à-vis the rest of the world. Therefore, he stressed that an adequate analysis of imbalances in the euro area should be consistent with both patterns.

Meanwhile, Chen, Milesi-Ferretti and Tressel (2012), minutely analyzing trade statistics in the euro area, found that the term of trade shock was associated with higher oil prices. They argued that the oil price hike raised the demand for machinery in oil producing countries, which stimulated demand for Germany's

export goods produced mainly in the emerging European countries. In addition, the SEA countries had to confront the rise of China as a rival in exporting markets. In sum, rising oil prices, the integration of CEE, and the rise of China constituted factors in rising net foreign liabilities of the SEA countries. Their current account deficits were financed mainly by the euro area's surplus countries.

### **2.3 Global standpoint studies**

There is another group of research studying about external imbalances from a global point of view.

Lane and Milesi-Ferretti (2011) examined the external adjustment process following the financial crisis<sup>6</sup>. They calculated that average net external liabilities in Greece, Portugal, and Spain expanded from around 36% of GDP in 2000 to 87% in 2007. In a painful process of currency account adjustment in deficit countries, they found that external adjustment was achieved primarily through demand compression and that changes in other investment flows<sup>7</sup> were the main channel of financial account adjustment.

Admitting that two-way financial flows often dwarf the net flows measured in the current accounts, Obstfeld (2012) warned that large current account imbalances can also signal elevated macroeconomic and financial stresses. After investigating the relationship between current accounts and changes in the net international investment position (NIIP)<sup>8</sup> for more than 80 countries, he concluded that, although the balance sheet mismatches of leveraged entities provided most direct indicators of potential instability, the imbalances might well be a symptom that deeper financial threats were arising.

Taylor (2012) pointed out that there were two competing views of the global financial crisis. The first one stresses the external factors: massive and growing international financial flows caused by an unprecedented mix pattern of current account surpluses and deficits lead to the global financial crisis. And the second one underlines the domestic factors: risks derive from excessive credit booms in local banks. Through historical

examination, he finds that global imbalances are not as important as if often perceived.

Overall, the literature suggests that, for investigating crisis causes and mechanisms in a particular region like the SEA countries, it seems necessary to analyze both from global and regional point of views.

### 3. Stylized facts

From the literature concerning the crisis in the SEA countries, a triad of crisis elements can be observed. First, financial integration in the euro area made cross-border lending and borrowing easier and at lower cost. Second, domestic financial institutions in the SEA economies benefited much from intermediating resources with lower interest rates than before. Third, domestic credit was mainly directed towards the housing sector (non-tradable goods sector), instead of being invested in the tradable goods producing sector to improve its competitiveness.

In this section, a dozen of relevant data are to be explored to endorse this outline. External balance, individual income, credit and liabilities, savings and investment, and prices and labor costs are examined.

#### **3.1 External indicator: Current account balance**

Table 1. A demonstrates the progress of current account balance/GDP ratios country by country in the euro area. Of the 11 original members of the euro Luxembourg is excluded<sup>9</sup>, replaced by Greece, which adopted the euro in 2001. In the upper part are the core and northern euro area countries. The SEA countries including Ireland are placed in the lower part. Four year averages are computed for each period.

It is obvious that since the launch of the euro in 1999, the current account balances of the SEA countries continued aggravating during the pre-crisis period. Greece, Portugal, and Spain display a typical pattern of deterioration. Italy, though its deficit size is marginal, also shares a common pattern. In contrast, the

**Table 1 Selected Economic Indicators**

A. Current account balance/GDP (%)					B. GDP per capita (PPS based: euro)				
	1996-99	2000-03	2004-07	2008-11		1996-99	2000-03	2004-07	2008-11
AUT	-2.2	0.7	2.7	2.9	AUT	23,236	26,021	28,730	33,916
BEL	5.2	3.8	2.3	-0.6	BEL	21,397	24,648	27,963	32,347
FIN	4.9	7.4	4.5	1.1	FIN	19,734	25,539	29,124	34,944
FRA	2.4	1.1	-0.4	-1.7	FRA	20,795	23,707	26,493	30,143
GER	-0.8	0.6	5.9	6.0	GER	23,450	24,912	26,614	30,124
NED	4.8	3.2	7.8	6.7	NED	21,211	26,250	30,179	36,160
(Avg.)	2.4	2.8	3.8	2.4	(Avg.)	21,637	25,180	28,184	32,939
GRE	-3.3	-7.0	-9.9	-11.5	GRE	10,247	12,634	16,748	20,752
IRL	1.5	-0.5	-3.3	-1.5	IRL	16,121	27,805	36,927	40,261
ITA	2.2	-0.3	-1.0	-2.9	ITA	17,542	21,044	24,026	26,326
POR	-6.5	-8.8	-9.9	-10.3	POR	9,491	12,451	14,218	16,191
SPA	-1.1	-3.7	-7.9	-5.6	SPA	12,424	15,644	19,706	23,858
(Avg.)	-1.4	-4.1	-6.4	-6.3	(Avg.)	13,165	17,916	22,325	25,478

C. GDP per capita growth rate (%)					D. Domestic credit to private sectors (growth rate: %)				
	1996-99	2000-03	2004-07	2008-11		1996-99	2000-03	2004-07	2008-11
AUT	2.1	2.6	4.4	2.0	AUT	1.7	1.3	2.4	0.9
BEL	2.1	3.3	4.3	1.6	BEL	2.6	-2.2	5.2	0.5
FIN	4.7	4.1	4.9	0.8	FIN	-3.7	4.6	6.0	4.3
FRA	2.8	3.0	3.6	0.9	FRA	-1.3	2.1	4.4	2.4
GER	0.8	1.6	3.2	1.8	GER	3.7	0.0	-2.5	-0.2
NED	4.1	4.6	4.3	0.8	NED	7.4	4.1	6.0	1.3
(Avg.)	2.8	3.2	4.1	1.3	(Avg.)	1.7	1.7	3.6	1.5
GRE	6.2	6.4	6.1	-1.9	GRE	8.0	11.0	9.3	6.5
IRL	12.9	9.4	5.1	-5.0	IRL	9.4	2.8	14.0	1.1
ITA	6.7	3.9	2.9	-0.2	ITA	5.7	4.3	4.7	4.9
POR	6.6	4.1	3.7	0.1	POR	13.6	5.4	4.6	4.2
SPA	5.6	6.2	5.8	-0.4	SPA	5.4	5.8	12.7	2.3
(Avg.)	7.6	6.0	4.7	-1.5	(Avg.)	8.4	5.9	9.1	3.8

E. Banks' external liabilities (growth rate: %)					F. Gross savings/GDP ratio (%)				
	1996-99	2000-03	2004-07	2008-11		1996-99	2000-03	2004-07	2008-11
AUT	18.8	2.1	10.8	-1.7	AUT	22.9	24.2	25.8	25.4
BEL	4.1	0.8	13.8	-14.7	BEL	25.6	25.6	25.8	23.0
FIN	21.2	22.4	19.8	27.6	FIN	23.9	27.4	26.2	21.4
FRA	6.9	7.6	22.5	-8.2	FRA	19.9	20.2	19.9	18.2
GER	25.8	4.4	4.6	-3.7	GER	20.8	20.1	24.0	23.9
NED	17.0	7.4	15.9	1.1	NED	26.8	26.6	28.0	24.1
(Avg.)	15.6	7.5	14.6	0.1	(Avg.)	23.3	24.0	24.9	22.7
GRE	31.7	15.5	32.0	-5.5	GRE	18.0	14.6	12.7	5.9
IRL	33.4	30.5	22.5	-14.6	IRL	22.8	21.9	22.9	13.1
ITA	1.5	4.0	7.5	-7.9	ITA	21.9	20.7	20.4	17.2
POR	16.3	18.8	7.5	-7.1	POR	20.1	17.2	13.5	10.1
SPA	18.9	9.6	3.8	3.8	SPA	22.1	22.7	21.9	18.7
(Avg.)	20.4	15.7	14.7	-6.2	(Avg.)	21.0	19.4	18.3	13.0

G. Gross fixed capital formation/  
GDP ratio (%)

	1996-99	2000-03	2004-07	2008-11
AUT	24.5	23.0	22.5	22.4
BEL	21.3	20.5	22.3	21.3
FIN	19.9	20.1	21.3	20.0
FRA	18.6	19.2	20.8	20.1
GER	21.4	18.4	18.2	17.9
NED	22.2	19.8	19.7	18.3
(Avg.)	21.3	20.2	20.8	20.0
GRE	23.5	24.7	23.4	17.3
IRL	22.9	24.0	23.4	12.1
ITA	20.2	21.0	21.2	19.8
POR	27.6	24.8	22.6	18.8
SPA	24.7	27.7	28.9	22.7
(Avg.)	23.8	24.5	23.9	18.2

H. Inflation rate (HICP based: %)

	1996-99	2000-03	2004-07	2008-11
AUT	0.8	1.8	2.0	2.2
BEL	1.2	2.0	2.1	2.5
FIN	1.3	2.2	0.9	2.6
FRA	0.8	1.9	1.9	1.8
GER	0.9	1.4	1.9	1.6
NED	1.9	3.3	1.5	1.6
(Avg.)	1.2	2.1	1.7	2.1
GRE	3.9	3.4	3.2	3.3
IRL	2.0	4.4	2.5	0.2
ITA	1.8	2.6	2.2	2.2
POR	2.1	3.5	2.5	1.6
SPA	1.9	3.2	3.2	2.2
(Avg.)	2.3	3.4	2.7	1.9

I. Nominal unit labor costs  
(growth rate: %)

	1996-99	2000-03	2004-07	2008-11
AUT	-0.3	0.5	0.2	2.1
BEL	1.0	1.9	1.4	2.5
FIN	0.4	1.6	0.7	4.3
FRA	0.5	2.3	1.5	2.2
GER	0.0	0.3	-1.5	2.0
NED	1.7	3.6	0.6	1.7
(Avg.)	0.6	1.7	0.5	2.5
GRE	6.3	2.9	1.7	1.9
IRL	1.4	4.1	4.8	-2.2
ITA	1.9	2.6	1.9	2.0
POR	3.9	3.7	1.5	1.3
SPA	2.2	2.9	3.3	0.7
(Avg.)	3.1	3.2	2.6	0.8

J. Real labor productivity  
(growth rate: %)

	1996-99	2000-03	2004-07	2008-11
AUT	2.1	1.2	1.8	-0.4
BEL	1.6	0.9	1.3	-0.3
FIN	2.3	1.8	2.7	-0.8
FRA	1.2	0.7	1.5	0.1
GER	1.0	0.9	1.6	0.0
NED	1.4	0.5	1.9	-0.1
(Avg.)	1.6	1.0	1.8	-0.3
GRE	3.9	3.5	1.1	2.3
IRL	2.6	3.3	1.7	-2.0
ITA	0.8	-0.3	0.6	-0.7
POR	2.2	0.5	1.5	0.7
SPA	0.3	0.1	-0.1	2.1
(Avg.)	2.0	1.4	1.0	0.5

Notes: AUT (Austria), BEL (Belgium), FIN (Finland), FRA (France),  
GER (Germany), NED (the Netherlands), GRE (Greece), IRL (Ireland),  
ITA (Italy), POR (Portugal), SPA (Spain).

Sources: *Eurostat*, World Bank, IMF, OECD.

core and northern countries follow the opposite trend: the current account balance improved gradually. It is notable that German external position turned positive in the 2000-03 period and its surplus surpassed as much as 5% of GDP immediately before crisis.

### 3.2 Income indicators: GDP per capita and its growth rate

PPP-based GDP per capita figures are tabulated in Table 1.B<sup>10</sup>. The SEA countries increased its income level from 13,000 euros

to 22,000 euros during the pre-crisis period. Their income divergence vis-à-vis the core countries halved from 8,500 euros in 1996–1999 to less than 4,000 euros in 2004–07.

This is reflected in the growth rates (see Table 1.C). Growth rates of GDP per capita (PPP-based) in the SEA countries were much higher than those of the core countries: the margins were 4.8% points in 1996–99, 2.8% points in 2000–03, and 0.6% points in 2004–07. After the crisis, however, the wedge inverted: the growth rates in the SEA countries turned negative, while those in the core countries remained positive.

Subsections 3.1 and 3.2 synthetically demonstrate that, in the euro area, current account balance diverged according as the SEA countries caught up with the core countries in terms of income level by accelerating growth rates.

### **3.3 Financial indicators: Domestic credit and banks' external liabilities**

Rising income levels were supported by soaring domestic credit. Table 1.D shows that the domestic credit to private sectors expanded with much higher speed in the SEA countries than in the core euro area. Ireland and Spain, specifically, registered more than 12% credit growths per annum in the 2004–07 period.

This credit expansion is estimated to have been, at least partly, financed by cross-border financial inflows. Table 1.E endorses a higher rate expansion of external liabilities in the local financial institutions in the SEA countries. But the wedge between the SEA and core countries was smaller than in the case of domestic credit. In 2004–07, banks in both areas expanded their external liabilities with almost the same growth rate. One reason might be that not only the SEA countries but the core countries had been attracting overseas funds in the run-up stages before crisis.

### **3.4 Macroeconomic balance indicators: Savings and gross fixed capital formation**

Deteriorating external positions in the SEA countries are mirrored in the declining savings rates. Table 1.F demonstrates that,

while the gross savings rates in the core countries edged up during the pre-crisis period, those in the SEA countries on average fell by 2.7% points. Notable declines in the savings rates were found in Greece and Portugal.

Meanwhile, narrower wedge is observed in the gross fixed capital formation/GDP ratios between these two areas (see Table 1.G). The investment/GDP ratio scarcely changed across the periods in both regions. It is noteworthy that Portugal showed a downward trend in this ratio, while Spain experienced ups and downs between 1996 and 2011.

### **3.5 Competitiveness indicators: Price, labor costs, and productivity**

Inflation rates are shown in Table 1.H, where four-year averages of annual growth rates of the HICP (Harmonized indices of consumer prices)<sup>11</sup> are tabled. While the inflation rates seem rather contained in both areas, the SEA countries display moderately higher inflation rates than the core euro economies by the margin of approximately 1% points.

Unit labor costs followed the similar pattern. Seen from Table 1.I, annual increases in the labor costs were contained within 0.5% to 1.7% in the core countries. On the other hand, labor costs in the peripheral economies rose with much higher rates. The SEA countries underwent at least 1.5% more rise in the labor costs than in the core euro area during the pre-crisis period.

Labor productivity data (Table 1. J), however, confirm less unambiguous distinction between the two country groups. The margin obtained by SEA countries in the growth rates of real labor productivity was less than 1% point during the 16 years, with an exception of the 2004–07 period, when the productivity growth in the SEA countries failed to surpass that in the core euro area.

### **3.6 Main findings**

During the pre-crisis period, the SEA countries witnessed simultaneous proceeding of deteriorating current account deficits

and catching-up with the core countries by accelerated growth rates in income levels. Ballooning domestic credit financed in part by external liabilities supported this growth mechanism. Notable declines in savings rates were seen in Greece and Portugal, though investment rates were rather stable across the region. Contained but higher inflation rates and unit labor costs than in the core countries gradually impaired the competitiveness of the SEA countries, which could not be fully compensated by rising productivity.

## 4. Theoretical analysis

Among dozens of models which explains current account behaviors, Giavazzi and Spaventa (2011) provide a compact and relevant model explaining the mechanism of the euro crisis. Based on their model, this section attempts to describe why the high growths financed by capital inflows were not sustainable in the SEA economies.

### 4.1 Analytical framework

This is a two-period model consisting of periods  $t$  and  $t+1$ . Agents can consume both traded goods  $T$  and non-traded goods  $N$ . They exchange traded goods with the ROW (rest of the world) in each period, while non-traded goods cannot be traded.

The home country can consume traded goods  $C_t^T$ . This can be larger or smaller than  $Y_t^T$ , the output of period  $t$ , which is assumed exogenously fixed. Meanwhile it can consume non-traded goods produced only in the same period. It is expressed as

$$C_t^N = Y_t^N \quad (4.1)$$

Domestic output of traded goods at time  $t+1$  is described as

$$Y_{t+1}^T = q^T A^T K_t^T \quad (4.2)^{12}$$

while domestic output of non-traded goods at time  $t+1$  is described as

$$Y_{t+1}^N = q^N A^N K_t^N \quad (4.3)$$

$Y$  denotes output in each sector,  $A$  signifies productivity, and  $q$  is the relative price between time  $t$  and time  $t+1$ , which is expressed as

$$q^T = \frac{P_{t+1}^T}{P_t^T} \quad (4.4)$$

$$q^N = \frac{P_{t+1}^N}{P_t^N} \quad (4.5)$$

In the meantime,  $K$  is the amount invested in each sector. Capital goods are assumed to be imported from abroad as an extreme assumption, and its allocation between the two sectors is decided after capital goods are imported.

$$K_t = K_t^T + K_t^N \quad (4.6)$$

Net import equivalent to current account balance (-) at time  $t$  is computed as

$$(C_t^T - Y_t^T) + K_t \quad (4.7)$$

while net export at time  $t+1$  is computed as

$$Y_{t+1}^T - C_{t+1}^T \quad (4.8)$$

## 4.2 Intertemporal budget constraint

Using (4.7) and (4.8), the intertemporal budget constraint for this economy is expressed as

$$Y_{t+1}^T - C_{t+1}^T = \left[ (C_t^T - Y_t^T) + K_t \right] (1+r) \quad (4.9)$$

where  $r$  denotes the real interest rate for borrowing and lend-

ing at the world market. Substituting (4.2) into (4.9) makes the following expression:

$$q^T A^T K_t^T - C_{t+1}^T = K_t (1+r) + (C_t^T - Y_t^T) (1+r) \quad (4.10)$$

By employing (4.1), (4.3) and (4.6), the expression (4.10) can further be re-written as

$$\begin{aligned} q^T A^T (K_t - K_t^N) - C_{t+1}^T &= (K_t - K_t^N) (1+r) + (C_t^T - Y_t^T + K_t^N) (1+r) \\ &= (K_t - K_t^N) (1+r) + (C_t^T - Y_t^T + \frac{Y_{t+1}^N}{q^T A^T}) (1+r) \\ &= (K_t - K_t^N) (1+r) + (C_t^T - Y_t^T + \frac{C_{t+1}^N}{q^N A^N}) (1+r) \end{aligned} \quad (4.11)$$

Finally, the intertemporal constraint is re-arranged to the following expression:

$$\left[ q^T A^T - (1+r) \right] (K_t - K_t^N) - C_{t+1}^T = (C_t^T - Y_t^T) (1+r) + \frac{C_{t+1}^N}{q^N A^N} (1+r) \quad (4.12)$$

### 4.3 Implications from theoretical analysis

The left-hand side of the equation (4.12) is the current account surplus at time  $t+1$ . This should match the right-hand side of (4.12), which is the current account deficit at time  $t$ , in order to satisfy the intertemporal constraint.

The first implication concerns productivities of the two sectors. Although the net product of imported capital goods  $q^T A^T - (1+r)$  in the left-hand side of (4.12) is normally assumed to be positive, a low productivity in the traded goods sector ( $A^T$ ) pulls down the net product of imported capital, which makes the intertemporal budget constraint more stringent. Meanwhile, a low productivity in the non-traded goods sector ( $A^N$ ) reduces the output of non-traded goods at time  $t+1$ , which indicates that the intertemporal budget constraint should also be stringent. Lower productivities in any sector or both sectors will, therefore, expose this country to the risk

that budget constraint should be violated.

The second implication concerns the allocation of capital goods between the two sectors. If the capital is totally invested into the non-traded goods sector as the extreme case ( $K_t = K_t^N$  and  $K_t^T = 0$ ), the expression (4.12) is transformed to

$$-C_{t+1}^T = (C_t^T - Y_t^T)(1+r) + \frac{C_{t+1}^N}{q^N A^N}(1+r) \quad (4.13)$$

The consumption of non-traded goods is supposed to be positive ( $C_{t+1}^N > 0$ ), as the capital used in the non-traded goods sector is assumed positive ( $K_t^N > 0$ ). If the output of traded goods at time  $t$  fails to exceed the consumption of traded goods at  $t$ , that is  $C_t^T - Y_t^T > 0$ , it will violate the budget constraint described as in (4.13). In conclusion, a country with a current account deficit at time  $t$  may not satisfy the intertemporal budget constraint when many of the capital goods are invested in the non-traded goods sector<sup>13</sup>.

## 5. Quantitative analysis

This section employs regression approach to confirm the insights described in the previous sections. After the regression form and data sources are introduced in the next subsection 5.1, a compact sample with 11 countries is applied in the following subsection 5.2. Then the sample is extended to 26 countries including northern and CEE (central and eastern European) countries in the final subsection 5.2.

### 5.1 Regression model and data sources

Determinants of current account balances in Europe are explored in this section<sup>14</sup>. Several candidate variables are chosen for examining the above mentioned insights. The standard model takes the following form:

$$cagdp_{it} = c + \beta_1 gdp_{it} + \beta_2 gdp_{it} growth_{it} + \beta_3 credit_{it} + \beta_4 savings_{it} \\ \beta_5 cpi_{it} + \beta_6 ulc_{it} + u_{it} \quad (5.1)$$

This standard model consists of a constant, six independent variables chosen among major proxies, and the error term ( $u$ ). The coefficient of the gross domestic product per capita ( $gdppc$ ) is expected to be positive: higher income countries such as Germany and the Netherlands will record a favorable current account balance, while lower income economies will continue suffering current account deficits with vigorous import demand. Likewise, countries registering higher growth rates in income per capita ( $gdppcgrowth$ ) are expected to suffer current account deficits in that a higher growth will be realized by steady investment which is supported by imports of both consumption and capital goods from abroad. Ballooning domestic demands will be financed by domestic credit ( $credit$ ) from financial institutions which attract overseas funds. In turn, economies with lower savings rate ( $savings$ ) are expected to experience deteriorating current account balances. Furthermore, a higher inflation rate ( $cpi$ ) will impair international competitiveness, so will rising unit labor costs ( $ulc$ ) in the domestic industries.

Data sources are as follows. *Eurostat* data are applied for current account/GDP ratios (%) with their partners all over the world, GDP per capita standardized by PPP (purchasing power parities), banks' external liabilities, price index (HICP index), and real labor productivity per person employed. *World Bank Open Data* are employed for domestic credit to private sectors, gross savings/GDP ratio<sup>15</sup> (%), and investment/GDP ratio (%) as gross fixed capital formation/GDP. *OECD StatExtracts* data are applied for unit labor costs calculated as the quotient of total labor costs and real output with 2005 as the base year of real output.

Data frequency is annual, and the sample period is 15 years of 1997 to 2011. Balanced panel regression with ordinary least squares is applied for all models below.

## 5.2 Basic sample regressions

The basic regression undertaken in this subsection employs the sample of 11 countries. It consists of five core countries

**Table 2 Determinants of the Current Accounts: Basic Regressions with the Sample of 11 Countries**

Determinants	Standard model (2.0)	Alternative model (2.1)
Constant	-54.370 (7.169) ***	-54.695 (8.715) ***
GDP p.c.	4.360 (0.774) ***	4.050 (0.928) ***
GDP p.c. growth rate	-23.160 (6.647) ***	-15.044 (7.075) ***
Domestic credit/GDP	-0.027 (0.005) ***	
Savings/GDP	0.735 (0.050) ***	0.764 (0.055) ***
Inflation rate	-0.550 (0.188) ***	-0.571 (0.201) ***
Unit labor cost	-42.937 (8.888) ***	-40.536 (9.515) ***
Banks' external liabilities/GDP		-0.728 (0.341) **
Investment/GDP		
Labor productivity		
Adjusted R-squared	0.804	0.776
Observations	165	165

Notes: Standard errors are in parentheses. \*\*\*, \*\*, \* are significant at the 1%, 5%, and 10% levels, respectively.

of Germany, France, the Netherlands, Belgium, Austria, plus Finland, and five peripheral countries of Italy, Spain, Portugal, Greece and Ireland.

Regression results are shown in Table 2. The standard model in the first column demonstrates that all the six regressors report high significance at the level of one percent. Signs of the coefficients are also as expected: countries with higher GDP p.c. are likely to record more favorable current account balances, but rapidly growing economies are apt to suffer unfavorable current account balances. Soaring domestic credit in proportion to GDP, in turn, will be likely to deteriorate external balance, while countries with higher saving rates will see favorable results in current account balance. Likewise, economies with higher inflation rates or unit labor costs are apt to suffer unfavorable current account balances.

Regression results using alternative models are shown in the following three columns. Banks' external liability variable is able to replace domestic credit with a favorable significance at the 5% level (model 2.1). An expected sign can be obtained with a limited decline in the degree of fitness of the model. Meanwhile, investment/GDP ratio also succeeds to obtain high significance as a substitute for savings/GDP ratio with an expected sign, while it damages the fitness of the

Alternative model (2.2)	Alternative model (2.3)
-73.467 (10.491) ***	-54.115 (7.496) ***
8.981 ( 0.957) ***	4.306 (0.810) ***
44.713 ( 9.379) ***	-33.803 (8.881) ***
-0.034 ( 0.007) ***	-0.028 (0.005) ***
	0.734 (0.053)
-0.946 ( 0.261) ***	-0.700 (0.194) ***
1.523 (13.602)	
-----	
-0.615 ( 0.112) ***	0.408 (0.144) ***
0.612	0.786
165	165

model (model 2.2). Labor productivity is also able to replace the unit labor costs with highest significance, an expected sign and not greatly impairing the model's fitness (model 2.3).

### 5.3 Extended sample regressions

In this subsection, the sample is enlarged to include the northern and eastern part of Europe. The extended sample involves 26 countries: 11 countries already examined in the previous subsection, joined by the United Kingdom, Switzerland, 3 northern European countries (Denmark, Norway and Sweden), 3 Baltic countries (Estonia, Latvia and Lithuania), and 7 CEE (central and eastern Europe) countries (Bulgaria, the Czech Republic, Hungary, Poland, Romania, Slovenia and the Slovak Republic)<sup>16</sup>.

The standard model with an enlarged sample takes the following form:

$$cagdp_{i,t} = c + \beta_1 gdp_{i,t} + \beta_2 gdp_{i,t} growth_{i,t} + \beta_3 credit_{i,t} + \beta_4 savings_{i,t} + \beta_5 \pi_{i,t} + u_{i,t} \quad (5.2)$$

Labor cost variable (ulc), which joined the sample in the previous section, is excluded in this regression, since labor

**Table 3 Determinants of the Current Accounts: Extended Regressions with the Sample of 26 Countries**

Determinants	Standard model (3.0)	Alternative model (3.1)
Constant	-62.400 (3.645) ***	-66.642 (3.302) ***
GDP p.c.	6.659 (0.419) ***	7.355 (0.383) ***
GDP p.c. growth rate	-13.285 (3.858) ***	-17.327 (3.496) ***
Domestic credit/GDP	-0.040 (0.007) ***	-0.032 (0.006) ***
Savings/GDP	0.109 (0.044) **	0.144 (0.040) ***
Inflation/GDP	-1.151 (0.195) ***	-0.363 (0.235)
EU dummy variable		-5.628 (0.603) ***
Euro dummy variable		-0.924 (0.684)
SEA dummy variable		
CEE dummy variable		
Adjusted R-squared	0.506	0.604
Observations	390	390

Notes: Standard errors are in parentheses. \*\*\*, \*\*, \* are significant at the 1%, 5%, and 10% levels, respectively.

cost data are not available in several countries<sup>17</sup>.

The regression results are shown in Table 3. The standard model herein consists of a constant and five independent variables. All the five regressors remain significant at least at the 5% level. The signs of the coefficients are also as expected. But the fitness of the model with this extended sample fails to outperform the basic regression in the previous subsection.

However, when appropriate dummy variables are introduced, it becomes able to improve the fitness. The alternative model (3.1) with the EU dummy variable is more favorable while the EMU dummy is not able to obtain sufficient significance. Other alternative models (3.2 and 3.3) also prove that the EU, SEA and CEE dummy variables are effective. In these alternative models, signs of the dummy variables are all negative: joining EU is likely to deteriorate external balances, at least at the initial stage of the currency union. Likewise, the peripheral locations in Europe, represented by the SEA and CEE dummy variables, were liable to worsen the external balances in the period examined herein.

Alternative model (3.2)	Alternative model (3.3)
-29.246 (5.565) ***	-39.916 (5.215) ***
3.641 (0.560) ***	4.882 (0.529) ***
-12.866 (3.530) ***	-16.432 (3.256) ***
-0.037 (0.007) ***	-0.029 (0.006) ***
0.064 (0.043)	0.097 (0.039) **
-0.918 (0.250) ***	-0.196 (0.274)
	-4.861 (0.571) ***
	-0.798 (0.638)
-5.461 (0.803) ***	-4.740 (0.736) ***
-6.807 (1.069) ***	-5.247 (0.989) ***
0.587	0.657
390	390

## 6. Conclusion

As a main cause of the eurozone crisis, current account imbalances in the currency union are now under investigation in the academic field. This paper, focusing on the SEA countries, researches about external imbalance problems both theoretically and empirically.

Theoretical analysis demonstrates the plausibility that the high growths in the SEA countries were not sustainable. The intertemporal budget constraint might be violated when the productivity in the peripheral economies failed to improve sufficiently and the imported capital was invested predominantly in the non-traded goods sector with lower productivity.

Empirical analysis confirms the mechanism how the current account balances in the SEA countries deteriorated. Significant variables are confirmed: per capita income levels, its growth rates, domestic credit booms, savings rates, and hikes in prices and labor costs. It is also proved that the local idiosyncrasy, which can be addressed by introducing appropriate dummy variables, should be effective, particularly in the enlarged pan-European sample.

## Notes

1. The EU decided the assistance to Ireland in November 2010 and to Portugal in May 2011, respectively.
2. According to the latest economic forecast by the European Commission announced in February 2013, the eurozone is expected to contract by 0.3% in 2013, while a recovery is forecast in 2014 with a positive growth rate of 1.4%.
3. Unlike in a closed economy, where saving equals domestic investment, saving and investment can diverge under capital mobility. However, the evidence found by Feldstein and Horioka (1980) claimed that changes in national saving rates ultimately changed domestic investment rates by the same amount, even among industrial countries due partly to limited capital mobility. For details, see Obstfeld and Rogoff (1996), pp. 161–4.
4. Orii (2010) documents the main literature.
5. Lane (2012), in attempting a comprehensive analysis of the European sovereign debt crisis, pointed out the external imbalance problems as one of the major factors, and linked the woes in the SEA countries with the ‘sudden stop’ problems caused by a large current account deficit.
6. The sample of Lane and Milesi-Ferretti (2011) includes 67 countries worldwide.
7. ‘Other investments’ in balance of payments denote financial flows other than foreign direct investment (FDI) and portfolio investment, including banks’ lending and foreign aid.
8. Net international investment position (NIIP) refers to the difference between a country’s gross external financial assets and liabilities, which includes both its government assets/liabilities and private assets/liabilities.
9. Luxembourg is excluded from the analysis here in that this compact country continued registering so sizable current account surpluses of 5.4% to 13.2 % of GDP during this period that it is apprehended to disturb the figures in this table.
10. In *Eurostat*, the PPP is called PPS (the Purchasing Power Standard), which is used as currency conversion rates to convert expenditures expressed in national currencies into an artificial common currency (PPS), eliminating the effect of price level differences across countries.
11. The HICPs, calculated according to a harmonized approach and a single set of definitions, give comparable measures of inflation in the euro-zone, the EU, the European Economic Area (EEA) and for other countries including accession and candidate countries. They provide the official measure of consumer price inflation in the euro-zone for the purposes of monetary policy in the euro area and assessing inflation convergence as required under the Maastricht criteria. The HICPs in the latest data series are calculated with 2005 = 100.
12. It is assumed that there is no labor.
13. A minimum amount of investment in the traded goods sector needed to satisfy the intertemporal budget constraint is obtained from (4.11) as

$$K^* = \frac{1+r}{\left[ q^* A^* - (1+r) \right]} \left( C_t^* - Y_t^* + \frac{C_{int}^*}{q^* A^*} \right) + C_{int}^*$$

14. Similar regressions to discover determinants of current account balances are attempted in Jaumotte and Sodsriwiboon (2010), and Eichengreen (2010).
15. Gross savings are calculated as gross national income less total consumption but plus net transfers.
16. Several smaller economies such as Iceland, Luxembourg, Lichtenstein and former Yugoslavian countries other than Slovenia are excluded mainly from data availability problems.
17. A tentative regression using unit labor costs with a limited number of sample countries fails to provide a satisfactory result. Contrary to our expectation, the computed coefficient is positive, although it remains significant at the 5% level.

Labor productivity cannot substitute for labor cost, as its calculated coefficient has the opposite sign to our expectation and is not significant at least at the 10% level.

## References

- Blanchard, Olivier, and Francesco Giavazzi (2002), "Current Account Deficits in the Euro Area. The End of the Feldstein Horioka Puzzle?" *Brookings Papers on Economic Activity*, Vol. 2002, No. 2, pp. 147–209.
- Caballero, Ricardo J., Emmanuel Fahri, and Pierre-Olivier Gourinchas (2008a), "An Equilibrium Model of 'Global Imbalances' and Low Interest Rates," *American Economic Review*, Vol.98, No. 1, pp. 358–93.
- Chen, Ruo, Gian Maria Milesi-Ferretti, and Thierry Tresselt (2012), "External Imbalances in the Euro Area," IMF Working Paper WP/12/236.
- Eichengreen, Barry (2010), "Imbalances in the Euro Area," [http://emlab.berkeley.edu/~eichengr/Imbalances\\_Euro\\_Area\\_5-23-11.pdf](http://emlab.berkeley.edu/~eichengr/Imbalances_Euro_Area_5-23-11.pdf).
- Feldstein, Martin, and Charles Horioka (1980), "Domestic Savings and International Capital Flows," *Economic Journal* 90 (June), pp. 314–29.
- Giavazzi, Francesco, and Luigi Spaventa (2011), "Why the Current Account Matters in a Monetary Union," in Miroslav Beblavy, David Coblant, and L'udovit Odor (eds.), *The Euro Area and The Financial Crisis*, Cambridge University Press, pp. 59–80.
- Jaumotte, Florence, and Piyaporn Sodsriwiboon (2010), "Current Account Imbalances in the Southern Euro Area," IMF Working Paper WP/10/139.
- Lane, Philip R. (2012), "The European Sovereign Debt Crisis," *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 26, No. 3 (Summer), pp. 49–68.
- Lane, Philip R., and Gian Maria Milesi-Ferretti (2006), "Europe and Global Imbalances," Paper at 7th Jacques Polak Annual Research Conference, Nov. 9–10, 2006 at International Monetary Fund.
- Lane, Philip R., and Gian Maria Milesi-Ferretti (2011), "External Adjustment and the Global Crisis," NBER Working Paper 17352.
- Obstfeld, Maurice (2012), "Does the Current Account Still Matter?" NBER Working Paper 17877.
- Obstfeld, Maurice, and Kenneth Rogoff (1996), *Foundations of International Macroeconomics*, The MIT Press: Cambridge, Mass.
- Orii, Keisuke (2010), "The U.S. Economy under Global Imbalances," *The Keiai Journal of International Studies*, No. 23, December, pp. 53–76.
- Taylor, Alan. M. (2012), "External Imbalances and Financial Crises," NBER Working Paper 18606.

〔研究ノート〕

# 小学校外国語活動の現状と今後の課題

イングランドの外国語教育政策との比較から

佐藤 佳子

## A Study of Teaching English as a Foreign Language at Japanese Elementary Schools

Keiko SATO

There are several issues regarding the teaching of foreign languages to children. Through the influence of globalization in non-English speaking countries, the teaching of English at elementary schools has become increasingly common, and English is considered to be one of the most important languages to be taught during the early stages of school education. Japan has also been confronting this matter, having recently introduced English as a subject to be taught at elementary schools. Official government guidelines demonstrate correct practice for English teaching at elementary level, although schools continue to experience difficulties and concerns as to how to implement English in the curriculum. In my article, I aim to analyze these problems in comparison to the experience of countries in the European Union, especially strategies in British primary schools for teaching foreign languages.

## 1. はじめに

2011（平成23）年度より全国の公立小学校の科目に「外国語活動」が正式に導入され、小学校5・6年生を対象とした英語の授業が本格的に始動した。「外国語活動」という名称ではあるが、文部科学省（以下、文科省）が定めるように、この科目で扱う言語は原則「英語」とされている。2008（平成20）年度の学習指導要領改訂にともない、ようやく正式に必修としての新設が決まったのである。ただ、日本における英語教育の歴史は古く、長い年月をかけて検討を重ねてきた。1992（平成4）年に文部省（現文部科学省）が英語の授業を実施するための研究開発学校を各都道府県に指定し、これにより英語教育への実質的な取り組みが始まる。1998（平成10）年度に行われた学習指導要領の改訂では、2002（平成14）年度からの「総合的な学習の時間」の設置が決まり、この授業の中では国際理解教育の一環としての英語会話を実施するなど、英語活動というかたちでの授業が可能となった。順調に英語活動が始動したように見えたが、実際問題として、時間数や授業内容等、具体的なカリキュラムに関する学校・地域間の差は大きかったといわれている。こうした教育内容等のばらつきは、次第には義務教育としての条件整備や教育の機会均等の確保の必要性が生じた。今回の外国語活動の導入の主たる目的は、こうした学校・地域間における教育内容の格差を解決するための方策であった。一方で、グローバル化への対応策が大いに関係していることが挙げられる。世界中でグローバル化に早急に対応すべく、小学校段階における外国語教育の導入がさかんに推し進められている。日本もこうした世界情勢への対応に迫られ、英語教育の推進体制をより強化していくことが不可欠となったからである。

学習指導要領には外国語活動の目的や内容に関して基本的な方針が示されているにもかかわらず、いまだ課題は多く残されている。各学校での授業内容や教材の使用、指導者、研修制度など、十分に整備が行われ

ていないのが現状である。早くから言語教育への積極的な取り組みを行っている EU（欧州連合）諸国では「複言語主義政策」を実施している。EU 諸国の中でも特にイングランドの外国語教育政策について取り上げ、日本の英語教育の今後の可能性について考察する。

## 2. 外国語活動の現状

### 2.1 外国語活動の目的

2008（平成20）年度の学習指導要領の改訂にともない、2011（平成23）年度からの「外国語活動」の新設が正式に決定された、という点についてはすでに記述したとおりである。ここでは外国語活動が目指す内容について、文科省が示している理念や目標から考えていくこととする。外国語活動の新設に対する答申に相当する、2008（平成20）年度中央教育審議会の「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の資料の中では、外国語活動の目的とは「小学校段階にふさわしい国際理解やコミュニケーションなどの活動を通じて、コミュニケーションへの積極的な態度を育成するとともに、言葉への自覚を促し、幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培うこと」と示されている。新設以前より、各学校では既に国際理解教育の一貫としての英語活動にある程度の時間をかけて取り組んでいたことは、1998（平成10）年度の学習指導要領改訂時の「総合的な学習の時間」の設置内容からもわかる。この段階では、あくまでも「総合的な学習の時間」という枠組みの中で実施された英語活動とはいえ、全国の小学校ではこれを機に英語の授業が積極的に行われるようになったといえる。

小学校5・6年生の授業に外国語活動を導入する理由として、文科省は以下3点の基本理念を挙げている<sup>(1)</sup>。

#### （1）小学生の柔軟な適応力を生かすこと

現代の子どもたちは、テレビなどを通じて外国人や異文化と接する機

会をかなりの程度持っており、外国語活動（英語活動）への抵抗感は少ないと思われる。また、現在は中学校において、あいさつ、自己紹介などの英語に初めて接することとなるが、こうした活動はむしろ小学校段階になじむものと考えられる。さらに、小学生の柔軟な適応力は、コミュニケーションへの積極的な態度の育成や、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことに適しており、コミュニケーション能力を育成する上で重要なものと考えられる。

## （２） グローバル化の進展への対応

小学校での外国語教育は、グローバル化が進展する中でその必要性が高まっており、国際的にも急速に導入が進められている。また、保護者や行政関係者からも必修とすることについて積極的な回答が多数寄せられており、一方で研究開発学校等の仕組みを活用して教科としての英語の在り方を研究している学校もある。今後は、小学校での外国語教育を充実することにより、次世代を担う子どもたちに国際的な視野を持ったコミュニケーション能力を育成する必要があると考える。

## （３） 教育の機会均等の確保

現在でも、97%を超える小学校において、主に総合的な学習の時間などで英語活動が行われているが、活動の内容や授業時間数には相当のばらつきがある。一方で、教科として英語を実施する学校が増加していることを考慮すると、教育の機会均等を確保するという観点、特に中学校教育との円滑な接続を図るという観点から、中学校に入学したときに共通の基盤が持てるよう、小学校段階で必要な指導内容を提供することが求められる。

こうした理念に基づき、文科省は学習指導要領における外国語活動の「目標」に関して次のように定め、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」と記している。英語の教育として小学校の段階でとりわけ大切にすべき内容は何よりも「体験的に理解

を深め]、「外国語の音声や基本的な表現」、「コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。文科省が示す方針とは「コミュニケーション能力の素地」を育成するために子どもたちには「コミュニケーション能力」を養うために必要とされる積極的な態度を身につけさせることを重視する。すなわち、具体的には「日本語とは異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えることの難しさや大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度」の育成を目指している。また、小学校段階には「音声」や「基本的な表現」に慣れることを重視する点に関しては、言語教育に関してスキル面を強化するような教育方針・内容ではなく、最終的に意図することは「異なる言語や文化を理解したり、他者と積極的にコミュニケーションを図ったりすることは、これからの社会に生きる子どもたちにとっては、重要なこと」だという見方にある。

外国語活動とは、「中学校における外国語科では英語を履修することが原則とされているのと同様、英語を取り扱うことを原則」という指摘からは、小学校と中学校との連携を意識した内容になっている。また、外国語活動は、現行では「教科」ではなく「領域」という扱いである。このように、日本の小学校外国語活動には、教育方針や内容があらかじめ明確にされており、ある一定の共通理解を求めるような方向性をもっていることがわかる。さらに、こうした文科省が定める教育理念は、共通教材にも影響し、つながりが保たれている。「幅広い言語に関する能力や国際感覚の基盤を培う」と答申の内容にある点においては、文科省が作成してきた共通教材『英語ノート』、“Hi, friends!” に反映されている。さらに学習指導要領では、外国語活動の指導計画の作成や授業の実施については、「学級担任の教師又は外国語活動を担当する教師が行う」よう定めているという指摘についても、ここで強調しておきたい。

## 2.2 外国語活動とグローバル化への対応

先に述べたように、文科省は小学校の外国語活動を必修化にし、その目的を示すことにより、一定の方針を明確にすることができたといえる。ここでは、外国語活動の理念にもあったように、「グローバル化の進展への対応」に関係する背景やその考え方についての概略を取り上げる。アジア諸国は日本よりも早く英語の必修化に取り組んでいる点も影響として欠かせない。

2003（平成15）年度に『英語が使える日本人』の育成のための行動計画が策定され、この中で、「英語は、母語の異なる人々の間をつなぐ国際的共通語として最も中心的な役割を果たし、「子どもたちが21世紀を生き抜くためには、国際的共通語としての英語のコミュニケーション能力を身につけることが不可欠」であるという計画が打ち出された。これにより、国民全体の英語に対する意識の変化、英語力の必要性を認識するきっかけとなる。さらに、2011（平成23）年にはグローバル人材育成推進会議が発足され、2012（平成24）年6月には「グローバル人材育成戦略」が発表される。今後ますますグローバル化が進む中で「豊かな語学力・コミュニケーション能力や異文化体験を身につけ、国際的に活躍できる『グローバル人材』を我が国で継続的に育てていかなければならない」という提言を明確に示した。ここでいう「グローバル人材」の概念にはさまざまな要素が関連してくるが、特に言語教育との関係では、「語学力・コミュニケーション能力」「異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー」であり、今後の重要な検討課題である。グローバル化への早急な対応手段として主に英語とコミュニケーション能力の向上がより明確に浮上してきたわけである。

英語教育の見直しが行われる過程で、「国際理解」「コミュニケーション」「グローバル化の進展」という概念が合わさって、次第に外国語活動の新設というかたちで本格的に始動したという見方がある。英語教育の目的に「コミュニケーション能力の育成」、「国際理解」が結びつくかたちで外国

語活動が目的とするところと結びついてくるが、実際のところ条件整備が整ったと十分にいけない。こうした点について、木塚（2009）は次のように分析する「日本においては、1970年代に英語教育変革への潮流が捉えられ、その後行政主導による『国際化』に押されながら、英語教育の『実用性』をコミュニケーションというキーワードに置き換えながら、英語教育の『早期化』を進め、結果として2008年版『小学校学習指導要領』において、公共性とニーズを確立する意味から、『外国語活動』を導入するという全体構造が捉えられるのである」（60）。

さらに、木塚（2009）の指摘によると、「1970年代のイギリスに遡及する『コミュニケーション重視の外国語教育』の考え方は、外国語教育理論のパラダイム転換をもたらし、『コミュニケーション』（『実用性』）を前面に出した外国語教育が世界に波及し、また1980年代後半には、ヨーロッパやアジア各国を中心として、英語教育『早期化』の動きが活発化した。これらの潮流は、日本の英語教育に対しても影響を与えることとなり、1980年代末の『学習指導要領』改訂以降に見られる『コミュニケーション重視の英語教育』の導入や1990年代に試行的に始められる小学校の英語教育と密接に結びつくこととなった」（65）というひとつの経緯がある。

ここから示唆されることは、日本の小学校での英語教育の導入の背景として、今回の外国語活動の始動にともない、一見明確にされている目的だけでは、十分に条件が整備されたとは言えないことである。また、「英語」と「異文化理解」という2つの領域が混同されている面も指摘されている。「導入の初期から英語を使う体験的な授業ではあっても、『外国語』活動という観点が重視され、活動の内容に国際理解の要素を入れることが求められてきた。『英語を使って異文化を理解させる』と言われてきたが、どこまで深く外国の生活や文化を理解させることが可能であるのか」（『語研ブックレット3 小学校英語』）（2）。ここでも疑問視されているように、また、『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』の発表内容から考えさせられるのが、平尾（2004）も言及している「外国語教育が『英語』主導であり、外国語教育全体としての理念、内容が乏しい。グローバル・トレ

ンドである言語教育の多様化への配慮が欠けている」(59-60)という点は否めない。重点的な課題は、単に学習・指導内容に留まらず、そもそも「英語」という観点に固執している点にも問題あるように思われることも視野に入れて考える必要がある。

### 2.3 外国語活動の現状と今後の課題

文科省が発表している外国語活動の理念や指導内容・目標には、基本的な共通方針が示されており、各学校では、こうした指導方針に基づいて授業を進めている。文科省は教育の統一性を図るためにも、共通教材を作成している。ただし、この共通教材は強制的なものではない。学校の裁量で使用する方向性を現状ではとっている。一つ明らかにされていることは学習指導要領に定められている目標や理念からは共通の認識としてとらえ、そして、岡・金森(2009)が外国語活動の指導のあり方としてまとめて述べているように、『『英語』を単なる『スキルや知識の習得』『英会話の勉強』としてではなく、『ことばの教育・コミュニケーション教育』の一環としてとらえ直すことが不可欠』(86)であるというように、全体的な共通理解は図られている。

このような全体的な見通しに基づき実施されているのだが、では各学校の教師たちはどのように考えているのであろうか。教師たちの見解に関して、次のような報告書が出ている<sup>(2)</sup>。まずは、英語活動に対する肯定的な評価から次のとおりである：

- ・英語学習に対する抵抗感が小さく、興味、関心が高い。
- ・外国や外国文化に対する興味、関心が高い。
- ・コミュニケーションに対する積極的な態度が形成されている。
- ・英語を聞いたり、話したりする初歩的な能力が養成されている。

このように、早期の段階から試みることのメリットは十分に感じられている。文科省が発表している理念にもあったように、「小学生の柔軟な適応力を生かす」という点が大いに発揮されている。こうした肯定的な成果が出ている一方で、当然戸惑いや不安も出てくる。教師自身の考えや感想を

中心に以下のような報告が出されている<sup>(3)</sup>：

- ・英語活動の指導経験が乏しく、何を、どのように指導したらよいのかわからない。
- ・英語の発音に自信がないし、英語力、英語の運用力もなく、担任単独で授業を行うのは不安である。
- ・5、6年生の担任は非常に多忙であり、新たに「英語活動」が増えると担任の負担は大きくなりすぎる。

教師、特に担任の教師が抱える問題は多い。共通の理念は存在するものの、実際の授業は各学校の裁量に任されている。担任の教師による英語の授業には、日頃から子どもたちの様子をよく把握している教師ならではの良さには十分に感じる。ただし、教師の英語に対する力には差があり、教師の負担にはなっている。また、これに対応するための研修制度に関して措置が行われておらず、今後の方針が明確になされていない点にも問題がある。この点に関しては、旺文社英語教育研究室が2009年に行ったアンケート調査報告<sup>(4)</sup>からも問題が見えてくる。教員自身の不安のほか、英語活動の環境や条件整備に関する問題は次のとおりである：

- ・校内に、校内研修会を企画、運営できる教員、年間指導計画を作成できる教員、英語活動の指導法や英語の発音、文法について相談できる教員、英語活動の指導経験が豊かな教員が少ない。
- ・英語活動の教材や教具を購入する費用、ALTや地域人材等、指導者を雇用する費用など、十分な予算措置が講じられていない。
- ・校外の研修会や勉強会等への出張に対するサポート体制が不十分である。
- ・卒業生の進学先の中学校および近隣の小学校との情報交換や協力体制が整っていない。

指導上の体制、そして予算措置の不十分さ、さらには、中学校との連携に関する体制にも今後かなりの時間を要して、早急に対応していくことが必要である。

## 3. イングランドの外国語教育政策

### 3.1 EU諸国における外国語教育について

現在EU加盟国は27カ国であり、23の公用語があるといわれている。体系的な言語政策を導入している。平尾（2004）が指摘するように「EU（ヨーロッパ連合）では、多言語・多文化・多民族の共存と発展、平和と協調をめざすという理念のもとに、言語と文化の多様性を尊重する言語教育政策を早期学習から、生涯学習まで推進している」（38）。

英語に関しては、世界中の多くの国や地域で共通語としての認識が高く、第二外国語として学ばれているという現状がある。EU諸国では、外国語教育の必要性を前向きにとらえ、複言語主義政策を推進している。その理由として、外国語教育が母国語の習得に非常によい影響を与えるという見方をしているためである。このことはEU閣僚理事会で確認されている事項であり、母国語のほかに2つの外国語を早期段階からの学習を奨めることにした。Multilingualism（多言語主義）とも言われているように、2つ以上の言語を母国語と同等のレベルにまで上げることを目標としたのである。そのため、EUでは言語政策のための指針を設ける。2001年には「ヨーロッパ共通参照枠」（CEFR: Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching and assessment）が確立された。これはカリキュラム、教材等の作成や評価に関する共通の基準を示したものである。

こうしたEUの言語政策の動きとは対照的に、EU加盟国であるイギリスは、EUの言語政策に積極的に介入しようとしなかった。したがって、公立の小学校での外国語教育を必修化にしようとする働きかけには時間を要した。ようやくCEFRとEU共通の基準に基づいた教育の見直しを行うようになる。その理由として巽（2010）はロンドン市内の人口との関連を挙げ「ロンドンで使用されている言語が300を上回ると言われているように（DfES, 2002）イングランドでは地域社会の多言語化が進行し、外

国語学習の必然性が高まっている」(63) という。

### 3.2 イングランドの教育制度と外国語科への取り組み

イングランドの教育制度について、まずはその背景について概観する。1870年初等教育法 (Elementary Education Act) が成立し、1918年には、教育法 (Education Act) という法律上、公教育が国家組織としてはじめて設立される。サッチャー政権時の1988年には教育改革法 (Education Reform Act) が創設され、ナショナル・カリキュラム (National Curriculum) や統一学力テスト (National test) が導入される。この導入により、統一されたカリキュラムのもと教育が行われることになる。これまでは教育の内容に学校や地域間でばらつきがあった。また、この改革の新しい試みとして、義務教育期間をKS1～KS4という4段階 (キー・ステージ) に分けることにした。KS1 = 5～7歳、KS2 = 7～11歳、KS3 = 11～14歳、KS4 = 14～16歳という区分で、KS1、KS2の5歳～11歳までは小学校、KS3～KSの11歳～16歳までは中等学校である。各段階で学ぶ内容、教科が決められている。

外国語 (Modern Foreign Languages) の教育に関しては、1991年のナショナル・カリキュラムで動きが見えてくる。ここで、公立学校ではKS3 (11歳)、KS4の段階で外国語の授業を行うことが提案され、実際にKS3 (11歳) から外国語の授業を実施することになった。2002年にイギリス教育技能省<sup>⑤</sup>は、国家言語戦略 (The National Languages Strategy for England “Languages for All: Languages for Life”) を発表し、今後10年を目標に、外国語教育改革の推進を目指すことを明らかにした。各学校はKS2 (3学年：7歳) 段階で1つの外国語の授業が導入されるよう条件を整理し、教育の機会均等が保障されるようにカリキュラムを整えていく方向性を強化する内容の言語教育政策である。こうした外国語に対する制度改革に強硬的姿勢をとった背景としては、2001年に行われた初等カリキュラムの調査が関係している。資格・カリキュラム担当局とウォリック大学が共同で行った調査と、そして、2003年に実施された外国語に関するパイロットプログラムに基づいて、KS2段階の子どもたちの外国語教育が再検討された。これまでに外国語の

義務化の対象とされてきたKS4について疑問視されるようになり、各学校の授業で提供されるべき科目ではあるが、義務の必要性はないとの見方が強まった。また、外国語教育の早期導入のメリットとして、社会やグローバル経済においてこれまで以上に必要性が増すと同時に、個人的な利益になることを挙げている。

従来KS4の段階で外国語教育の義務化が適応されていたが、今回の試みでは、KS2段階における外国語教育の重要視し優先事項として、方針を変える方策をとるようになった。結果、この段階で早期教育への取り組みが一層強化されることとなる。KS2を義務化にする一方で、KS4の義務化を適応外になった。したがって、早期化を強化し、後期段階の学生に対する教育は、外国語に関しては学生の必要性、ニーズに合った対応策をとるといふ緩和的な案が提示されたのである。小学校教育課程に関する審議会の最終答申であるDCSF（2009）“Independent Review of the Primary Curriculum: Final Report”によれば、「2011年からは小学3年生から順次必修科目（statutory）となり、……（中略）……2014年には、小学3年生から6年生まで（Key Stage 2）の全員に必修化が完了する計画である」<sup>6)</sup>。

2004年に行われたナショナル・カリキュラムの改定では、これまでのキーステージにおける外国語の取り扱いについて見直しがされた。特にKS4段階における外国語教育のためのガイドラインがここに示されており、4技能（①listening and responding、②speaking、③reading and responding、④writing）に関する到達目標が提示されている。「それぞれ4レベルが設定されている。もっとも高いレベル4では、①ほぼ普通のスピードで話される既習事項からなる簡単な文章を聞いて、要点やある程度の詳細を理解することができる。②3～4往復のやり取りからなる簡単な会話を行い、語句の置き換えによって既習の文法事項を活用することができるとともに、概して正確に発音でき、イントネーションもある程度の一貫性を保つことができる。③短い文章を読んで、要点やある程度の詳細を理解することができるとともに、辞書などを活用したり、文脈から推測することによって自分で読むことができる。④3～4文からなるパラグラフを書き、語句の置

き換えによって既習の文法事項を活用することができるとともに、辞書を使って単語を調べることができる」<sup>7)</sup>。配慮事項はあるが、指導の具体についてははっきり明示されていない。ただし、指導者の養成・研修についての今後については一定の方向性がうかがえる。

このように、イングランドの教育制度の流れ・内容からもわかるように、外国語科<sup>8)</sup>の積極的な導入を検討している。政府の教育に関する審議会の報告書 The Nuffield Languages Inquiry (2000) では、『『国際語』である英語を話す国民であることを『幸運なこと』としながらも、『英語だけでは不十分 (English is not enough)』であり、英語の上にあぐらをかいていたのでは国際社会をリードしていくことはできないと述べている。……(中略)……英語話者は外国語学習が不要であるという思い上がりを排し、ヨーロッパの言語に限らず広く外国語を学ぶべきであるとして外国語習得の重要性を強調している。外国語の習得によりその文化や言語の理解が豊かになるばかりでなく、社会や商業、国際貿易などにおいても利益があると主張している。多くの言語が飛び交い、さまざまな文化が共存する地域社会の連帯を維持するためにも、外国語学習と外国語学習を通した異なる文化の理解が不可欠である」としている<sup>9)</sup>。

### 3.3 外国語活動の今後の課題

#### ——イングランドの外国語教育との比較から

イングランドの教育制度における大改革となった「ナショナル・カリキュラム」は、システム上、日本の「学習指導要領」と類似するといえる。しかし、学習指導要領の内容とは明らかに異なる点がある。日本では、授業時間数の規定、検定教科書の使用により学習指導要領に沿った教育内容が義務付けられていることに対して、イングランドの場合は、共通カリキュラムが規定されているにもかかわらず、日本の学校のように、授業時間数の設定や検定教科書はない。さらに、指導方法やカリキュラムの内容までの関与はない。したがって、教師は児童・生徒の状況に応じて、授業を行うことが可能である。ただ、整っている点は学習の到達目標があるこ

とである。また、評価に関しても、到達目標を確認するための評価テストの実施は設けられている。外国語活動の評価方法については、現段階では、教科ではないため、評価の仕方についてもあいまいな点がある。

指導者に関しては、学級担任あるいは専門教科教員が教えているのが現状である。具体的なガイドラインにより、教員への研究制度や教員養成の方針が徹底して行われているのではない。一方、巽（2010）が指摘するように、イングランドも今後ますますの条件整備が必要とする中で、日本と明らかに異なる点は、担任教師の育成に対する見方にあると思われる。つまり、教師の養成・研修のあり方の違いが指摘できると言える：「日本では現職の担任教師を外国語指導ができるように短期間の内に再教育することを主な指導者養成の手段としているのに対して、イングランドでは、将来的には担任教師が中心的指導者となる見通しをもちながらも、現在のところは、あらゆる可能な手段（mixed approach）を講じて当面の指導者を賄い、比較的長い期間をかけて担任教師中心の指導に移行しようとしていることがわかった。特に『外国語科を専門とする小学校教員』の養成を外国語科必修化に先駆けて開始しており、その養成課程が定着しつつある」（74）。イングランドの小学校学校教員養成のあり方は、目先の課題に対して集中的に対応しようとする日本の教育のあり方を見直す良い契機となるに違いなく、妥当な方法がとられているように見受けられる。

#### 4. まとめ

グローバル化が急速に進む中、言語教育政策の重要性がより一層増している。EU 諸国では外国語の必修化に早い段階から取り組み、開始年齢についても早期化の傾向が顕著である。EU の中でも、特にイングランドについては、母語の「英語」が世界的に優位な言語であることを長年信じ込み、外国語の習得の必要性を感じてこなかった。サッチャー政権時のナショナル・カリキュラムの導入により、イギリスは教育における大改革という転換をはかった。しかし、EU 諸国の中でも外国語教育の早期

化に関しては緩和的な見解であった。そのようなイングランドも2012年の必修化を目指して今動き出している。グローバル化のために必要だとようやく感じたからである。

日本は英語教育に早い段階から熱心に取り組み、国民の早期英語教育への関心も非常に高い。言語教育政策に早くから取り組んでいるEUの言語政策からも、言語教育の重要性と今後の可能性が十分示唆されている。イングランドの外国語教育は、これまでの緩和的な態度と比べれば昨今関心が非常に高まり、早急な対応に追われている。日本も今後「世界の中の日本」として活躍するための人材育成を行うために、そして、言語教育の充実化を図るためにも、イングランドの政策に目を向けていく必要があると考える。

現行の外国語活動は「教科」ではなく、「領域」の段階である。これまで担任中心で行われてきた英語学習、「総合的な学習の時間」からは切り離されたかたちをとってのスタートであった。しかし、現状としてはさまざまな課題が孕んでいる。そのうちのひとつとして懸念されるのが、指導者の役割、そして指導者の育成である。イングランドの長年に行われてきた教育政策に目を向け、教員育成に関しても積極的に取り組むべき課題として、今後の方向性を検討していきたい。

(注)

- (1) 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』、旺文社、2009年、8ページ。
- (2) 調査報告は次の資料による:樋口忠彦・大城賢・國方太司・高橋一幸編「第11章 これからの小学校英語活動の展望」『小学校英語教育の展開——よりよい英語活動への提言』、研究社、2010年、278ページ。
- (3) 前掲(2)、279ページ。
- (4) 同上。
- (5) 教育省 (Department for Education: DfE) が2001年には教育技能省 (Department for Education and Skills: DfES) となる。
- (6) 巽徹 (2010)、「イングランドにおける小学校外国語教育の現状と課題——教員養成と教員研修を中心に」『JASTEC研究紀要』第29号、日本児童英語教育学会、64ページ。
- (7) 前掲(2)、261ページ。
- (8) 前掲(6)、76ページ。「イングランドの小学校で学習されている『外国語』とは、主にフランス語、スペイン語、ドイツ語、イタリア語である。また、中国語、日本語、ウルドゥ語、ヘブライ語などのcommunity languagesと呼ばれるその他の外国語にもその対象を広げようという動きがある」という点について巽氏は指摘している。

(9) 前掲(6)、64ページ。

(引用文献)

- 岡秀夫・金森強編著『小学校英語教育の進め方——「ことばの教育」として [改訂版]』、成美堂、2009年。
- 木塚雅貴「小学校における『外国語活動』導入から見たニーズと公共性確立の構図」『北海道教育大学紀要(教育科学編)』第60巻・第1号、2009年。
- グローバル人材育成推進会議『グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議審議まとめ)』、2012年。〈<http://www.npu.go.jp/policy/policy04/pdf/20120604/shiryo2.pdf>〉
- 財団法人語学教育研究所『語研ブックレット3 小学校英語』、2010年。
- 巽徹「イングランドにおける小学校外国語教育の現状と課題——教員養成と教員研修を中心に」『JASTEC研究紀要』第29号、日本児童英語教育学会、2010年。
- 樋口忠彦・大城賢・國方太司・高橋一幸編『小学校英語教育の展開——よりよい英語活動への提言』、研究社、2010年。
- 平尾節子「イングランドの外国語教育・国家戦略——“The National Languages Strategy for England”の視点から」『言語と文化』No. 10、愛知大学、2004年。
- 文部科学省『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』、2003年。〈[http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286794/www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/15/03/03033102.pdf](http://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/286794/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033102.pdf)〉
- 文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」、2008年。〈[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf)〉
- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』、東洋館出版社、2008年。
- 文部科学省『小学校外国語活動研修ガイドブック』、旺文社、2009年。

(参考文献)

- 大谷泰照・杉谷眞佐子・脇田博文・橋内武・林桂子・三好康子編『EUの言語教育政策——日本の外国語教育への示唆』、くろしお出版、2010年。

[研究ノート]

# 2011年度宮城ボランティア活動と その教育的意義

敬愛大学国際学部の場合

櫛田 久代

## Educational Achievements of the First Volunteer Trip Supported by Keiai University after the 2011 East Japan Earthquake

Hisayo KUSHIDA

After the gigantic East Japan Earthquake of 11 March 2011, a number of extremely destructive tsunamis and a consequent nuclear accident struck East Japan. The tsunamis took many lives and destroyed houses, schools, and other buildings in the Pacific region from Iwate Prefecture to Chiba Prefecture. Thousands of volunteers including many from corporations, local governments, and internal and international non-governmental organizations (NGOs) rushed to the Tohoku area to help provide psychological and material support to disaster victims. Although the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology had promoted volunteer programs in educational institutions from primary school to the university, the Ministry officially announced on 1 April 2011 that universities should make arrangements in their regular classes to encourage student volunteer efforts in the Tohoku area. This official notice encouraged university volunteer activities in the area. Efforts not only from students but also from volunteer trips organized by universities provided disaster relief, includ-

ing such activities as cleanup, debris removal, and providing food, during the spring term.

Keiai University in Chiba Prefecture also embarked on volunteer activities after the East Japan earthquake and organized a volunteer trip of 3 days and 2 nights from September 21 to 23 in Miyagi Prefecture. This was the first Miyagi volunteer trip organized by the university. Twenty-eight students and three staff members joined the trip and were engaged on September 22 and 23 in building flower beds, removing dead morning glories, and holding a tea party for the inhabitants (disaster victims) in temporary housing. This paper examines the activities of the volunteer trip organized by the university and student feedback after the program from an educational point of view, making it clear that the volunteer trip functioned as an excellent service program for students.

【A research project supported by Keiai University in the year 2012】

## はじめに

平成7（1995）年1月17日の阪神・淡路大震災は、しばしば日本におけるボランティア元年と称されている。地震発生から4月中旬までの災害ボランティアの延べ人数は115万人と推定され、その半数が若者であり、若者の主力として活躍したのが大学生であったことが注目された<sup>①</sup>。その後、中越地震等大規模災害のたびに、日本全国からボランティアが駆けつける現象が当たり前に見られるようになった。平成23（2011）年3月11日に起こった東日本大震災においても、地方自治体および企業やNGOを含め全国から多数のボランティアが現地に駆けつけ災害救援にあたったことは記憶に新しい。

さて、東日本大震災の災害ボランティア活動において大学教育現場との関連で特筆すべきことのひとつは、平成23（2011）年4月1日文科科学副大臣名で出された「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について」の通知ではなかっただろうか。大学生のボランティア活動は、近年、文科科学省が「時代の変化や社会の要請に適切に対応した、

教育研究活動」の一環として推奨しており、全国の大学においても、ボランティア活動を取り入れた授業や講義科目が年を追うごとに増加していたが<sup>②</sup>、今回の通知は、「学生が、大学等の内外において、学修成果等を活かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の円滑な社会への移行促進の観点から意義がある」との大義名分を掲げ、通常授業期間中の学生の災害ボランティア活動を推進することを謳っていた。被災学生への配慮は当然のこととしてあったが、ある意味で、授業形態の柔軟な運用を通して、比較的時間に余裕のある学生を長期にわたる被災地の救援活動の核として活用する社会的仕組みを確保するものともいえた。大学におけるボランティア活動は、その単位化を巡って、ボランティア活動がそもそも主体的で自立的な無償の奉仕活動であるという原義から、今なお賛否両論ある。ましてや災害ボランティアは、学生が怪我をするリスクも抱えることから、学生の健康や安全の問題が取りざたされた。物議を醸し出した文部科学省の通知であったが、災害ボランティアの担い手として大学生が大いに期待されたということは間違いない。

実際、大震災の被災地では、望むと望まざるとにかかわらず、大学が地域の拠点としてボランティアの中心的役割を果たした。また、被災地の学生達も避難所における支援活動や後片付け等のボランティア活動に従事しており、学生にとってボランティア活動と大学教育との両立は現実問題としてあった。一方、被災地以外の大学においても、大学の社会貢献の観点から災害ボランティア活動の機運が高まり、大学ボランティアセンターを拠点に独自のボランティア・ツアーを主催して、被災地支援に積極的に乗り出した大学も多数に上った。本学においても紆余曲折はあったものの、同年9月21日から2泊3日、大学バスを利用した大学主催の第1回宮城ボランティア・ツアーが学外授業として実施された。

翌年の平成24(2012)年8月には大学主催として第2回となる宮城ボランティア・ツアーが行われた。第2回目実施の際には、東日本大震災から1年半が経ち、被災者の自立に向けた職業訓練や起業家支援といった

就職支援や、地域の再生を目指す長期的かつ専門的な復興支援活動が始まっていた。千葉県にある小規模私立大学である本学の被災地ボランティア活動のあり方も、2011年と2012年とでは必ずとその内容は変わってこざるを得ない。そこで、2012年の宮城ボランティア活動は、昨年度の活動を受け継ぎつつ、平成24(2012)年度敬愛大学研究プロジェクト「大学における震災ボランティア教育の実践研究」の一環として実施された。大震災を契機に起こった大学の被災地ボランティア活動を、大学および学生にとって一過性のものにさせないようにすることが、プロジェクト立ち上げの根底にあった。今後とも本大学が何らかの形で継続的に被災地と関わっていくことは、本学の社会貢献のひとつとしてのボランティア活動のあり方を含めた課題であるが、本学の被災地ボランティア活動のあり方を検討するのが本プロジェクト研究の目的ではない。本研究の目的は、東日本大震災を契機に始められた、本学の被災地ボランティア活動の実践とその教育上の成果について検討することにある。2度実施された宮城ボランティア活動が学生にもたらした教育的効果を検討するにあたり、本稿では、さしあたり、昨年の第1回宮城ボランティア活動とその後の活動を取り上げる。学生達が記した「2011年度敬愛大学学外授業活動報告集」を基に、一引率教員の立場から、ボランティア活動に参加した学生達の現地における活動やその後の行動を振り返り、彼らの学びを整理することを通して、本学における被災地ボランティア活動の教育的意義を明らかにしたい。

## 1. 第1回学外授業（宮城ボランティア・ツアー）の概要

自発性、無償性、公共性を旨とするボランティア活動に対する単位付与については、通常の講義科目の単位修得と比較して安易であるとみられがちであるがゆえに、少なからず反発もある。しかし、ボランティア活動の単位化に関して異論があったとしても、ボランティア活動が学生の社会体験および成長につながり、通常の講義にはない貴重な学びとな

ることに異論の声はない。

本学国際学部の場合、実践的なボランティア活動の単位化に関しては、従来はいくつかの条件を付していた。まず、講義科目である「ボランティア活動Ⅰ」修得のうえでの活動実践として、「ボランティア活動Ⅱ」の単位を付与する。また、ボランティア活動の実践に関しては、授業の中で、ボランティア活動実施の企画力を学んだ後に、おおむね3日以上<sup>1</sup>の活動に従事し、活動日誌と実際の活動風景を撮影した写真の提出を義務づけ単位を認定するというものであった。

しかしながら、東日本大震災後、文部科学省がボランティア活動を推奨したことで、本学においても授業外の被災地ボランティア活動を単位認定する動きが出てきた。実際、学生の中には、自発的に被災地におけるボランティア活動に従事する者もあり、これまでの単位認定とは異なるボランティア活動の単位化が認められるようになった。また、国内のあちこちの大学が積極的に災害ボランティア活動に乗り出す中、本学においても大学主催の被災地ボランティア活動実施の機運が高まってもいた。実現したのは学内の諸事情もあり震災から半年後の9月となったが、国際学部水口章教授が企画主導し、宮城県名取市にある尚綱学院大学との協力の下、28名の学生の参加と3名の教職員の引率<sup>2</sup>で大学主催の災害ボランティア活動が学外授業として実施された。この学外授業は、これまでのボランティア活動とはいくつかの点で異なるものとなった。

第1に、大学主催災害ボランティア活動ツアーであり、教職員が引率したことである。第2に、仙台空港の位置する名取市において被災者救援の中心として活躍する尚綱学院大学の協力を得て進められたことである。実施時期の9月末には、被災者達は避難所から仮設住宅に居を移しており、よく知られている避難所での活動、屋内外の片付けや瓦礫処理、泥かきといった活動ではなく、仮設住宅に住む被災者のためのボランティア活動を行った。第3に、経済学部と国際学部の両学部の学生が参加する学外授業として行われたことである。第4に、参加した学生には、国際学部の場合、従来の「ボランティア活動」だけでなく、「国内スクー

リング」「総合講座」科目として単位認定されることになり、災害ボランティア活動に参加しやすいように履修上柔軟に対応する措置がとられたことである。ちなみに、経済学部では、学生による自発的活動を主とする「敬愛プログラム」における単位認定となった。そして第5に、交通手段として大学バスを活用するとともに長戸路政行学園長からの寄付によって費用負担の面で、学生が参加しやすい環境が整えられたことである。また、仮設住宅の方々への菓子等の提供品に関して、千葉県下の複数の企業から協賛を得ることができた。さらに県下の高校から自主制作の音楽DVDの提供を受ける等、ボランティア活動実施のために各方面から支援を受けられたのは、当時の被災地支援の機運の表われでもあった。いずれにせよ、第1回宮城ボランティア・ツアーは、未曾有の大災害に対して、被災地のために何かできることをしたい、役立ちたいという当時の風潮や学内外の支援に支えられたものであった。

実施が夏休み末期の9月21～23日であったため、夏休み期間中に行われた事前学習への学生の集まりは思わしくなかったが、千葉県のマスコット「チーバ君」を被災地に連れていくことになったのは、参加学生達の事前の提案からであった。

このツアーに参加したのは28名で、その参加学生の内訳は、下記表1のようなものであった。いくつか特徴がある。まず、学年的に見れば、かなりばらつきがある。1・2年生の参加者が少なく、3年生の参加者が多かった。また、男女比率もかなり不均衡だった。女子学生の参加者が

表1 平成23(2011)年度の参加学生の内訳 ( )は女子の内訳

学部	国際学部		経済学部
	国際学科	こども学科	経済学科
1年生	1	4	2(1)
2年生	0	2	0
3年生	8	5(4)	0
4年生	4(1)	1	1
計	13	12	3

(注) こども学科の中には地域こども専攻を含む。  
備考：28名の参加者のうち、留学生8名。出身国の内訳は、ネパール3名、中国2名、バングラデシュ1名、ベトナム1名、モンゴル1名。

28名のうち6名で、男子学生の参加が圧倒的に多かった。さらに、国際学部と経済学部の両学部で参加者を募集したが、元々ボランティア活動がカリキュラムの中にある国際学部の参加者のほうが圧倒的に多かった。最後に、留学生の参加者も多く、全体比率で見れば、約28%に上った。多国籍の留学生の参加は、この第1回学外授業の特徴といえる。ちなみに、3年生以上の参加者が多かった理由について、若干の説明を加えたい。実施時期が9月末であったこと、また、従来のボランティア活動と異なり、参加費用がかかるため、東北の被災地のために何かをしたいという動機をもった参加者がいる一方で、ゼミとしての参加義務付けや、卒業に必要な単位獲得のために参加した学生達も少なからずいた。正直なところ、半数近くが積極的なボランティア活動志願者ではなかったのではなかろうか。その彼らの態度が宮城ボランティア活動を通してどのように変化していったのかについては後述するが、非常に興味深いものとなつた。

さて、現地における2泊3日のボランティア・ツアーは下記表2のようなスケジュールであった。

2泊3日の日程のため、バスによる移動が大半の時間を占めはしたが、現地では、名取市<sup>ゆりあげ</sup>関上地区の住民が移り住んだ<sup>めでしま</sup>愛島東部仮設住宅における屋内外のボランティア活動に従事した。また、この学外授業は台風15号の仙台北上と重なったため、予想外の悪天候で千葉―宮城間往復の移動が困難を極めたことは、今となっては良い思い出である。

2日目、大津波で甚大な被害を受けた被災地の関上地区を視察した後、ボランティア活動を行うスケジュールとなったのは、「学生達に被災地の現状を知ってもらいたい、また、現状を知ってこそ、被災者の気持ちに寄り添える」との尚絅学院大学エクステンションセンター庄司則雄氏の

表2 9月21日～23日実施の学外授業

1日目	千葉市稲毛区出発 → 現地着 → ホテル泊
2日目	名取市関上地区視察 → 活動 → ホテル泊
3日目	活動 → 現地発 → 敬愛大学稲毛キャンパス着 → 解散

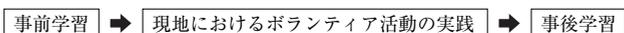
備考：参加費用15,000円（ホテル宿泊、現地における食事付き）。

助言からであった。関東地区では900人を超える方々が、津波によって亡くなっている。当時あちこちに漁船が打ち上げられたまま、家々の土台をわずかに残して更地になった沿岸部の光景を目の当たりにしたことで、学生達のボランティア活動への気持ちが高まったことは疑問の余地がない。津波の被災地視察後沿岸部を離れ内陸部にある愛島に移動し、悪天候の中、本学学生によるボランティア活動が始まった。2011年に愛島東部仮設住宅において本学が取り組んだボランティア活動は、①花のある暮らしを提供するために仮設住宅における花壇の設置（3箇所）、②心をつなぐ語らいの時間として仮設住宅集会所における茶話会の主催、③各戸への花の苗配り、④各戸の朝顔の蔓の撤去作業、⑤「チーバ君」と遊ぼうの5つの活動である。仮設住宅においてスムーズに活動ができたのは、コーディネーターとして仮設住宅で被災者の支援にあたっている尚綱学院大学の教職員の方々ならびに学生達の存在が大きかった<sup>3)</sup>。

## 2. 宮城ボランティア活動ツアーの学習プロセス

### 1 第1回学外授業後の事後学習

本学の学外授業は、実のところ、被災地の現状を知るスタディ・ツアーとボランティア活動の2つを柱としていたといえる。現地を知り、実際にボランティア活動に従事することは、それだけで大きな学びである。しかしながら、現地で何を学び、それをいかに個々の学生が自分自身の成長の糧として活かしていくのかは、結局のところ、学生個人の問題である。とはいえ、大学の教育プログラムの観点からみたととき、少なくとも学んだことを自身の中で定着させるための手助けとなるプロセスが求められる。それが、事後学習の役割である。今回の教育プログラムの流れを図式化すると以下のような図となろう。



この学外授業の場合、事後学習は、大学所定のA4一枚の「ボランティア活動参加報告書」だけでなく、課題レポートの提出を求め、自らの体験をより深く考え直すことを期待した。レポートの課題は以下である。

1. 今回、現地に行き活動したことで印象に残っていることを3つ挙げ、印象に残っていることの中でひとつを取り上げ、あなたが感じたこと、そして、考えたことをまとめてください。
2. さらに今回の学外授業で学んだことを、今後どのように活かしていきたいと思っているのかについて、述べてください。800～1000字。

これらの課題に取り組んだ学生達のボランティア活動報告書は、報告書集として刊行し、参加者全員に配付した。後日、冊子としてまとめ、全員に配ったことで、個々の体験を共有する機会を参加者に提供できたのではないだろうか。

学外授業後、10月25日の昼休みを利用して国際学部教務委員会主催で学内において宮城ボランティア活動に関する報告会を開催した。報告会では、学外授業中に学生達が撮影したビデオを編集して上映し、学生に体験談を報告してもらった。時間の都合上報告者を学生1名に限ったため、参加学生全員が関わるものとはならなかったものの、報告会は参加者にとって1ヵ月前の自分達のボランティア活動を振り返る、良い機会となったのではないかと思われる。

## 2 学生の体験記

### ①名取市の被災状況

本学がボランティア活動の拠点とした名取市は、表3のような被災状況であった。

死者の大半が大津波の犠牲による。東日本大地震による大津波で大きな被害を受けた名取市閑上地区の視察は、前述尚綱学院大学庄司氏の案内で特別に視察許可を得て実現した。その頃はまだ車両が自由に入出りできる場所ではなかったからである。現地では、日和山ひよりやまの頂上に登り、亡くなった方々に黙祷を捧げた。現地視察の様子について、当時次のよ

表3 東日本大震災における被害等状況

---

直接死：911人
災害関連死：32人
死者数の合計：943人
行方不明者数：52人
避難者数：0人
避難所数：0
住宅、建物被害(全壊数+半壊数)：3930棟
仮設住宅建設完成戸数：910戸(完成度100%)
仮設住宅建設箇所(団地数)：8

---

(出所) 宮城県HPより(2012年7月31日時点)。

うに書き記している。

現地に入ると、目の当たりにする光景に学生一同言葉を失っていました。今も回収されず放置されている漁船やボートがちらほら残るとともに、あちこちで瓦礫の山が連なり、地区一番の小高い丘日和山よりも大きくそびえ立っていました。地区の鎮守の神社閑上湊神社がある日和山から辺り一面を見渡しましたが、かつて涼やかな松原が広がり、家並みが美しかった風光明媚な地域は、海岸線まで家一軒残らず真っ平らで、松原は見る影もありませんでした。3階建ての建物を呑み込む津波は、神社の社殿をも押し流しており、現在そこには鎮魂の卒塔婆が祀られていました。(敬愛大学HP内「国際学部だより」「学外授業@宮城県(2011年9月21～23日)」より)

尚綱学院大学庄司氏による、3・11前の閑上地区の穏やかな暮らし、3・11当日のこと、そして震災から半年後の現状と復興に向けての人々の思いについての話は、津波の爪痕が生々しく残る光景を前に、すべての学生達の胸を打った。

## ②学生達にとっての閑上地区視察

閑上地区視察は、学生達にも非常に強い印象を与えるものとなった。それは、学生達が提出した報告書においても顕著であった。課題の中で、学生達が印象に残ったことを列挙してもらったのであるが、ボランティア活動と同数、彼らが目にした閑上地区の光景が挙げられていた。学生

の報告書からいくつかその文章を拾ってみよう。

- 日本のことわざ『百聞一見にしかず』は本当だった。テレビや新聞などを見るより、実際、現場を見たら本当にびっくりした。(1年・男子留学生)
- 大地震から訪問当日までに、散々テレビのニュースで見てきた被災地。それは、津波が町に押し寄せてくる瞬間や、その津波から必死に逃げようとする人々、そして津波にのまれ跡形もなくなった多くの町の映像だった。テレビの画面を通して幾度となく見てきた悲惨な光景だが、それでも実際に自分の目で見た衝撃と映像とはほど遠いものだった。いつ回収されるかもわからない漁船やボートが、田んぼに突きささっている。撤去するのに20年はかかるといわれているがれきが山のようにそびえたっている。津波の直前まで立派に建てられてあったであろう家の一軒一軒が、基礎だけを残して消えている。あまりにも悲惨すぎる光景を目の当たりにした私は、言葉を失うどころか写真を撮る事さえ恐ろしくなってしまった。この学外授業に参加する前から、私は被災地の様子のある程度は理解しているつもりだったが、知らないことの方が多く、実は全然わかっていなかったと、今回のボランティアでつくづく実感させられた。(3年・男子学生)
- 9月22日宮城県名取市の津波被災現場を見たことです。テレビで見るとてもひどい状態で、普通の道に船などが未だにありました。津波は建物の高さ3階くらいまでの大きなものだったと聞きとても驚きました。瓦礫の山を見ると津波の恐ろしさが伝わってきました。現地の方々に話を聞いてみると、元通りに復興するまでに20年くらいはかかるそうです。(3年・男子学生)
- 台風の影響で道路が所々冠水していましたが、テレビで見たとおり、漁船が田んぼの中で横転しており、津波で被害を受けた民家はブルーシートで覆ってありました。他にも電柱が傾いており、道路が未だに通行禁止になっているところも何ヵ所もありました。漁船は業

者に多額の料金を払わないと撤去して港に戻すことができないそうです。大きな船会社の漁船はすぐに撤去できたそうですが、一般の漁船は震災の影響で漁師の仕事がなくなり苦しい状態で料金を払うことができないそうです。また、民家や他の建物の高さよりもがれきの山の方が高いことに私は目を疑いました。その時、私は「震災は人の命だけでなく、仕事や大切なものまで奪ってしまうのか」と自然に対してやるせない気持ちと改めて震災の恐怖を感じました。

(3年・男子学生)

いみじくも学生が「百聞は一見に如かず」ということわざを挙げて自らの衝撃を表現しているが、東日本大震災後6ヶ月後の被災地の光景に動揺しない者はいなかった。学生達が指摘するように、テレビやインターネットの映像を通して接している事実であったとはいえ、直接目にするという体験は非常に重いものであったからである。東日本大震災は語り継がれていく世紀の災害である。この大震災を同時代にもつ私達は、自然との共生、災害と暮らし、命の重さについて考えていかざるをえない。被災地視察を通して、学生達が何よりも現場を知ることの大切さを学んだことは何ものにも代えがたい経験となった。

### ③ボランティア活動

閑上地区視察後、かつてその地に居住していた方々が現在住む愛島東部仮設住宅に移動した。仮設住宅の屋内外において実施したボランティア活動は、それぞれの学生にとって充実したものとなっただけでなく、そこで体験した現地の方々とのふれあいは、心の温まるものとなった。それでは、仮設住宅におけるボランティア活動で学生達はどのような学びを得たのだろうか。

学生達の報告書を読むと、冷たい雨の中で踏み固められた地面に花壇を造るという最も過酷な活動に従事した学生達の達成感が際立っていた。愛島を後にする前、学生達が集会所前に造った花壇（「敬天愛人花壇」と命名）にはピンク色の花を咲かせるバラが植えられた。バラを見て住人の

方々が嬉しそうな表情を浮かべながら、感謝の言葉を掛けてくれた体験は、学生達にとっても大きな喜びとなった。

花壇造りと並んで学生達の印象に残ったことは、現地の方々との交流であった。仮設住宅に暮らす人々だけでなく熱心にボランティア活動に取り組む尚絅学院大学の学生達と膝を付き合わせて話す時間をもてたことで、学生達はそれまで自分達が抱いていた被災者に対する固定観念を打ち破られる体験をしている。特に、交流会で学生達と同世代の尚絅学院大学の男子学生が語った彼自身の被災時の体験談は、すべての学生の心に強く響いた。学生達の報告書は、こうした現地の人々との交流が自分達の言動や考え方を見つめ直す機会となったことを明確に記している。これは多くの学生の報告書からうかがえる変化である。先ほどと同様に学生達の報告書から、言葉を拾ってみよう。

○雨の中、私達は花壇を造り始めました。地面を掘り返して、肥料や土を敷いてから、水仙やチューリップの球根を植えました。雨の影響で掘った穴に水がたまってしまいうまくいかない時もありましたが、無事に花壇を造ることができました。この植えた球根は来年の春になるときれいな花を咲かせてくれると思います。仮設住宅の人達がこの花を見て、すこしでも心が癒されてもらえたらなと思います。私にとってこんなに必死になにかに取り組むというのは、とてもひさしぶりの事でした。みんなで協力して誰かのためにできることはとてもいい経験でした。(3年・男子学生)

○初めて集会所に行った時の高齢者の方達の笑顔が忘れられない。受け入れてもらえるか不安だったことと閑上地区の視察後だったこともあり、被災地の方々のつらさを量り知れずにいたので、皆さんの心の強さや温かさに涙が出そうになった。皆さんはお話をしていくうちに、折り紙の折り方から今のご家族の様子までお話ししてください、そしてお菓子や外に植えられた花々を見て何度も感謝の言葉を言ってくださった。愛島の方々は、仮設住宅での生活で不便なことやつらいことが多々あるはずなのに、今いる場所を自分達で楽し

くし、どんな小さなことにも感謝の心を忘れないで暮らしているのだと感じた。それは皆さんが時々言っていた「生きていることに感謝」という言葉からもうかがえた。また周りの人との繋がりも元気の源のようで、本当に皆さん仲が良かったように思う。震災から半年以上がたった今、被災地の方々は現状を受け入れるということは難しくとも、生きていることを大切に力強く前向きな生活をしようとしている気持ちをその姿から感じさせていただいた。(3年・女子学生)

○彼の話の中で一番心が痛んだのは、「頑張れ」という言葉の意味でした。被災地の人に簡単に頑張れなどと口では言えるが彼らにとっては、とても辛い言葉だと聞かされて、たしかに自分も同じ状況だったら嫌な言葉だと思いました。よく「頑張れ日本」という言葉があるけれども、この言葉は頑張っている人達には場合によっては言われたくない言葉なのかもしれません。(3年・男子学生)

○今回のボランティア活動で学んだことは、被災者(相手)の気持ちになることの大切さです。地震が発生して以来、テレビやラジオ・新聞や広告で「がんばれ日本」や「がんばれ東北」の言葉をよく見聞きしており、私には被災地を励ます良いエールだと考えていました。しかし、最終日の交流会の時に尚綱学院大学の学生の方が「有名人や政治家は私達にがんばれというけれど、何をがんばればいいんだ。もっと私達の現状を考えてほしい」と涙交じりに話していて、私はたった一言の言葉でも被災者の方々は荷が重くなってしまったり、先の見えない不安に駆られてしまうことに気がきました。ボランティア活動では相手の立場に立って、慎重に言葉を選ぶべきだと学びました。(3年・男子学生)

鬱病患者に対して「がんばれ」といった励ましの言葉が禁句であることは知られているが、日本社会では、相手を思いやり応援しているという意味を込めて、頻繁に「がんばって」という言葉がけは行われがちである。東日本大震災後、テレビや新聞等のマスメディアにおいて、盛ん

に「がんばれ日本」「がんばれ東北」といった応援メッセージが流れており、おそらく多くの学生達が、被災者に向けて「がんばれ」という言葉を違和感なく使っていたものと思われる。しかし、よい言葉であっても、時と場所を違えれば逆効果にもなりうる。言葉は自分の思いや考えを他者に伝える道具であるが、一方通行であれば意味がない。学生達は、自分が相手の立場に立って考え、言葉を発することが出来ていたのか、集会所における交流会は自省を促す機会となったようである。

### 3 学生達の学び

ボランティア活動の教育効果は、短期的には学習態度、行動原理や考え方の変化、長期的には生き方や職業選択の変化として表れうる。学生達の場合、短期的にどのような学びを得たのかについて、直接彼らの言葉を紹介したい。

- 現在、私は小学校教員を目指している。そして、将来、被災地のアルバムを道徳の授業の中に取り入れ、子ども達に見せ、東日本大震災の被災地の現状と、ボランティア活動の大切さを彼らにわかしてもらいたいと考えている。(2年・男子学生)
- 今回のボランティアでは震災の大きさや、これからどのように復興していけばいいのかなどさまざま考えさせられた。しかし一番学んだことは考えるだけではなくて実際に行動を起こさなければならないこと。実際に見たり聞いたりすることが大事だということだった。被災者の方々の思いや、自分の感じたことを忘れないようにしたい。またこの体験を語り継いでいくことがこれからは、必要であると感じた。(3年・女子学生)
- 正直、帰ってきた今の方が「もっとやれることがあった」と後悔する事の方が多いが、被災地へ行き貴重な話が聞けた事で自分の災害時の行動を見直し考える機会にもなった。また「頑張って」と応援するのではなく、「助け合おう」とする気持ちが一番大切なのだと知った。大金をもっていない学生の私でも、携帯やパソコン、新聞等

の被災地を知る情報源はたくさんある。それらをこまめにチェックする事で直接行く事はできなくても、被災地の方々のためにできる限りの支援をし続けていきたい。(3年・女子学生)

○「被災地の様子を伝えることも立派なボランティアだ」と被災者の方々がおっしゃっていた。この言葉の通り、私達にはこれを伝える義務があると思う。「自分は被害にあっていないから関係ない」ではなく、みんなでこの事実を受け止めていく必要がある。「たかがそんなことで」、と思うような事でも、それが被災者のためになるなら、その「たかが」をこれからも続けていきたい。そして機会があればまた被災地に行き、もっとたくさんボランティアをしたいと思っている。(3年・男子学生)

○今回の学外授業では、まず人との接し方や傾聴の仕方、コミュニケーションの取り方を肌身で学び、さらに今回の大震災の被害を実際に目で見て現地の方のお話を聞くことができた。今後は仕事に就いた時などさまざまな人に出会う時に、この学びを思い出して初対面の人と接していきたい、また、良好な人間関係を築いていきたい。さらに、実際に見た被災地の様子を多くの人に伝えていきたいと思う。(3年・女子学生)

○私達は被災者に対する言葉使いには気をつけなければならないと思いました。そして、自分にはこれから被災者のために何かできるか？ と真剣に考えました。答えはまだ見つけれられません。しかし、今の自分がどのぐらい恵まれているのかは気付きました、そして自分が勉強や仕事に対してもっと頑張らないといけないと気付きました。有意義な3日間を過ごしました。本当に参加して良かったと思います。(4年・男子学生)

○私はこのボランティア活動で人と人との助け合いや励まし合いがいかに大切かを学びました。というのも、初めは無理だと思うようなことでもみんなが声を掛け合い協力し合えば目標が達成できるということを経験することができたからです。今回の学外授業で学んだ

ことは、これからの日常生活においても仕事においても常に活かせるものです。特に仕事においては助け合う事がとても重要となってくると思います。私はこのボランティア活動で学んだことを常に頭に入れ、最後の学生生活を送りたいと思います。そして卒業後もこのボランティア活動のことを思い出し仕事にも活かしていきたいと思います。(4年・男子学生)

小学校教員を目指している学生の場合、自分自身のボランティア体験を教育の現場に活かしていきたいとの明確な意思を表明している。教育現場では、教える側も教えられる側もボランティア体験が貴重な学習機会となっていることを図らずも示している。実際、ボランティア・ツアーを引率した筆者自身、被災地において被災した方々との交流の中で改めて「生きる」ことについて学ぶことが多かった。そして、人のもつ強さ、人と人との交流や協力が生み出すものの大きさ、互いに思いやることの大切さ、感謝の輪に対して、大きな感慨を覚えた。その一方で、善意がともすれば自己満足に陥りがちなボランティア活動の中で、悔いの残ることも多々あった。短い活動時間とはいえ、現地でもっと色々やれることがあったのではないか、という自責の念は強かった。引率者が感じた複雑な思いは、多くの学生達にも見受けられた。それはこの3日間の体験を通して、彼ら一人一人がどれほど多くのことを感じ考えたのかをつづった報告書にも表われていた。

### 3. 事後学習後

報告書の提出をもって学外授業の事後学習は無事終了したのであるが、その後国際学部の参加学生達が協力して、大学祭(敬愛フェスティバル、11月12日・13日開催)においてボランティア活動写真展を実現させた<sup>(4)</sup>。写真展では、現地で撮影したビデオ上映会も並行して行い、10月の短い学内報告会では伝えきれなかった被災地の今、仮設住宅に暮らす人々の笑顔や、尚綱学院大学学生と本学学生とのあいだの交流会の様子を学生達

の手で伝えるものとなった。準備段階において、主に8名の学生達が役割を分担し互いに協力しながら、上映ビデオの編集、写真展の企画や写真の選定、写真の説明文作成、ポスターの制作を行った。写真展前日の展示作業および大学祭当日の会場案内や上映ビデオの解説には、それ以外の学生達も加わった。結果的に、宮城ボランティア活動に参加した国際学部生の14名が、何らかの形で大学祭の展示に関わったことになる。

そもそもこの大学祭において写真展を行うきっかけは、2005年アメリカを襲ったハリケーン・カトリナ災害についてのルイジアナ州立博物館の企画展および災害時の記録写真を取り上げた3年ゼミナールにおける何気ない会話からだった<sup>(5)</sup>。ボランティアに参加したゼミ生と、私達が見て聞いた東日本大震災の被災地の現状を大学祭のような場所で伝えられたら、という話をしていたところ、賛同する学生達が集まって大学祭の企画展として結実したのである。数人で始まった企画であったが、日を追うごとに友が友を呼ぶ形で、参加学生が増えていき、当初考えていたものよりも本格的な写真展へと発展した。大規模な写真展が実現できたのは、宮城ボランティア活動の引率にもあたった大学運営室の職員、八代潔紀氏が中心となって大がかりな展示スペースを組み立ててくれたからこそであった。

展示内容は「被災地は今」「花のある暮らし」「心をつなぐ語らいの時間」「尚絅学院大学の協力」「『がんばれ』という言葉の重み」「チーバくんと遊ぼう」「ボランティアに行っただこと」という7つのテーマからなり、セクションごとにキャプションボードを付け、随所で学生達のメッセージボードがちりばめられた。さらに、ビデオは、巨大津波の被害を受けた名取市閑上地区視察を中心に編集した「Ⅰ.被災地編」と学生達のボランティア活動の様子をまとめた「Ⅱ.ボランティア活動編」の2本を上映した。ビデオ上映は、学生達の体験談や解説を交え、写真だけでは伝えきれない現地の活動を動画で振り返るものとなった。

写真展では、多数の方々が押し寄せるほどの人出ではなかったものの、会場に備え付けたノートには、来場者から次のようなメッセージが書き

記されていた。「こういった活動をこれからも続けてほしいです」(会社員)、「被災地のことを伝えてくれてありがとう」(70歳代宮城県被災者)、「被災者の笑顔を見られてよかったです。交流会、現地の方が喜んでたと思います」(専門学校生)、「大変感動しました。宮城の方々も喜んだと思います」(専門学校教師)。また、学生達は来場者の方々との対話を通して自らの体験を振り返り、今後自分達に何ができるのかについて、それぞれ考えさせられることにもなった。

ところで、ボランティア活動に参加した際にはそれほど積極的ではなかった一部の学生達も巻き込んで実現した企画展を作りあげる原動力になったのは、「被災地の様子を伝えることも立派なボランティアだ」という被災者からの言葉だった。当時、全国的に東北への災害ボランティア活動が華々しく行われている中で、現地に行って何かをしなくてはいけないのに、していないという焦りや後ろめたさを学生達は抱いていたように思われる。しかし、実際に現地に行ったことで、被災地における活動だけがボランティア活動ではないということを学生達は学んだ。しかも、被災者の方々から、私達のことを忘れないでほしい、私達や現地のことを千葉に帰ったら周囲の人達に「伝えてほしい」との思いを託されたのである。現地情報は常にテレビやラジオ、新聞・雑誌、インターネットで伝えられる。しかし、個々の立場で現地を見て感じ考えたことを、それぞれの学生がひとつのメディアとなって自分の周囲に伝えることも、現地に行った者としての使命だということを学生達は学んできた。ささやかなことかもしれないが、被災者の方々との出会いを通して彼らは自分達にできる社会との関わり方を学ぶとともに、学外授業後、自分達にできることから始める、をまさに実践したのである。

## おわりに

平成23(2011)年度の学外授業、宮城ボランティア・ツアーは、自分一人の力では無力でも仲間と協力すれば何かができるという実感を得て予

想外に大きな学びを学生達にもたらした。事後学習後の学生達の情報発信活動は、主体的な地域との交流や学生の社会参加を実践するものとなった。大学が主催するボランティア・ツアーは、大学側が事前に行き先や活動を含め、現地との間で活動内容を調整している。参加に至る学生の自発的行動は、応募にとどまるだろう。第1回の学外授業の場合、授業後、授業単位とは関わりなく、参加した学生達が協力して大学祭における企画展示を成功させるという、新しい活動のフェイズが生まれた。それだけの教育的効果が被災地におけるボランティア・ツアーにはあった。大学の社会貢献、被災地支援という観点から見れば、本学のような単発的な被災地ボランティア・ツアーは高く評価されるものではない。しかしながら、ボランティア活動の授業への取り組みとその教育効果という観点で見たとき、その成果は極めて大きい。近年日本においても、ボランティア活動を構造的な学習枠組みの中で捉え直す「サービス・ラーニング」という教育プログラムが注目されている<sup>(6)</sup>。被災地における学外授業とその後の学生達の活動を振り返ってみたとき、意図したわけではなかったが、大学主催の被災地ボランティア活動は、サービス・ラーニングのひとつのプログラムとして優れていたのではないかと考えている。また、利他的で公共精神を涵養するボランティア活動は、本学の建学の精神である「敬天愛人」を実践するもので、この精神を被災地ボランティア活動は体現するものであったということも指摘できよう。初年次の経験をふまえ、平成24(2012)年度の第2回目では、ボランティア活動の動機付けおよび学習目的を明確にさせる事前学習、被災地におけるボランティア活動の実践、活動内容の振り返りとなる事後学習に関して、より体系的な学習の枠組みで、宮城ボランティア・ツアーを捉え直したいと考えている。この第2回大学主催宮城ボランティア活動に関しては、別稿<sup>(7)</sup>にて改めて検討する。

機会があれば東北へ行き、再びボランティア活動に参加したい、あるいは、何らかの形でこれからも被災者の方々と関わっていきたいという言葉を、第1回学外授業に参加した学生達は口にしていった。ボランティ

ア活動は一過性ではなく継続してこそ意味がある。それは個々の学生にとってだけでなく、大学にとっても同様であろう。

〔付記〕

本研究ノートは、平成24年度敬愛大学研究プロジェクト「大学における震災ボランティア教育の実践研究」の成果の一部である。

(注)

- (1) 朝日新聞大阪本社「阪神・淡路大震災誌」編集委員会編『阪神・淡路大震災誌——1995兵庫県南部地震』、朝日新聞社、1996年、403ページ。
- (2) 文部科学省ウェブサイト「大学における教育内容・方法の改善等について」、「大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（平成23年8月24日）〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2011/08/25/1310269_1.pdf)〉。
- (3) なお、宮城での活動を終えた後に、尚絅学院大学人間心理学科太田健児教授および同大学庄司則雄氏を招いて、2012年2月23日日本学主催のシンポジウムが開催された。詳しくは、敬愛大学HP「国際学部だより」内の記事「シンポジウム 『東日本大震災1年を前にして』」（2012年2月23日）、参照。
- (4) 詳しくは、敬愛大学HP「国際学部だより」内の記事「宮城ボランティア活動写真展を終えて」（2011年11月18日）、参照。
- (5) ルイジアナ州ニュー・オリンズにある州立博物館（Louisiana State Museum）では、2010年10月23日より特別展「ハリケーンと共に生きる——ハリケーン・カトリーナとその後」（“Living With Hurricanes: Katrina and Beyond”）を開催し、ハリケーン・カトリーナ災害を多角的に検証するとともに、復興に向けての取り組みを紹介し、全米でも高い評価を受けている。*Hurricane KATRINA: 5 Years and beyond*, Harahan, LA: Express Publishing, 2010.
- (6) サービス・ラーニングに関しては、さしあたり、次の文献が参考になる。桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』、ミネルヴァ書房、2009年。
- (7) 榑田久代・池谷美佐子・庄司真理子「研究ノート：大学主催ボランティア・ツアーと教育プログラムの課題——敬愛大学国際学部の場合」『敬愛大学総合地域研究』第3号、2013年所収。

(参考文献)

桜井政成・津止正敏編著『ボランティア教育の新地平』、ミネルヴァ書房、2009年。  
朝日新聞大阪本社「阪神・淡路大震災誌」編集委員会編『阪神・淡路大震災誌——1995兵庫県南部地震』、朝日新聞、1996年。

*Hurricane KATRINA: 5 Years and beyond*, Harahan, LA: Express Publishing, 2010.

杉岡秀紀・久保友美「〈研究ノート〉関西を中心とした大学ボランティアセンターの現状・課題、展望——サービス・ラーニングという新潮流を踏まえて」同志社大学『社会科学』、2007年、129-158ページ。

上畑良信「大学の教育課程と学生のボランティア活動：その教育的意義と若干の具体化方策」長崎県立大学論集 40(1)、2006年、57-80ページ。

文部科学省ウェブサイト「大学における教育内容・方法の改善等について」、「大学における教育内容等の改革状況について（概要）」（平成23年8月24日）〈[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/04052801/\\_icsFiles/afieldfile/](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/)〉

2011/08/25/1310269\_1.pdf)。

宮城県庁 HP 震災被害情報「地震被害等状況及び避難状況」2012年8月8日公表。  
〈<http://www.pref.miyagi.jp/kikitaisaku/higasinihondaisinsai/higaizyoukyou.htm>〉。

敬愛大学「2011年度敬愛大学学外授業活動報告集」。

敬愛大学 HP 内「国際学部だより」内「学外授業@宮城県(2011年9月21～23日)  
〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20110924173427/index.html>〉。

同「宮城県ボランティア活動報告会」(2011年10月25日)〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20111026084752/index.html>〉。

同「宮城ボランティア活動写真展を終えて」(2011年11月18日)〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20111119173640/index.html>〉。

同「シンポジウム『東日本大震災1年を前にして』」(2012年2月23日)〈<http://www.u-keiai.ac.jp/international/20100720162948/20110727135132/20120229090516/index.html>〉。

[史料]

# 近世アウクスブルクの医師の日記の邦訳 (3・完)

「医師フィリップ・ヘーヒシュテッターの日記」(1597-1635年)

山本 健

Translation of a German Doctor's Diary  
in Early Modern Augsburg (3)  
— *Das Tagebuch des Augsburger Arztes und  
Stadtphysicus Dr. Philipp Hoehstetter, 1579-1635* —

Takeshi YAMAMOTO

〈医師フィリップ・ヘーヒシュテッターの日記〉  
(1597 - 1635年)

## 目次

- |     |                           |
|-----|---------------------------|
| I   | はじめに——ヘーヒシュテッター家について      |
| II  | 史料について (編者の序言より)          |
| III | 医師の日記                     |
|     | 『医師フィリップ・ヘーヒシュテッターの日記』の邦訳 |
|     | 第1章 ヘーヒシュテッター家の家譜         |
|     | 第2章 フィリップ2世の青少年期          |
|     | (A) 身内の不幸に関する出来事          |
|     | (B) 教育・就職関係の履歴            |

第3章 フィリップ2世の結婚および家族（子ども）について

- (A) 婚約と結婚
- (B) 15人の子どもの誕生

〈以上、第24号（2011年2月）掲載〉

- (C) 住居に関する覚書

第4章 フィリップ2世時代のアウクスブルク市の諸物価の変動について

- (A) 穀物価格
- (B) 暖房用の木材価格
- (C) 食料品価格
- (D) 30年戦争期（特に、1622年）の価格変動

第5章 医師フィリップ2世の収入について

- (A) 聖カタリーナ修道院での医療勤務
- (B) 施療院での医療勤務と解雇通告そして復職
- (C) 著作物の収入
- (D) 主治医としての収入
- (E) 孤児院での医療勤務
- (F) カトリック教徒の支配下（1635年以降）での収入

第6章 アウクスブルク市内外での政治経済状況

- (A) 慈善活動の制度的な確立過程と新・旧教徒の対立
- (B) アウクスブルク市内外での皇帝承認問題と30年戦争
- (C) 30年戦争下のアウクスブルク市についての筆者の感慨
- (D) 筆者の息子の筆による30年戦争下のアウクスブルク市の状況

〈以上、第25号（2012年2月）掲載〉

第7章 フィリップ2世の妻の親族の誕生年と死亡年について

- (A) 私の舅クリストフ・シュミットの家族
- (B) 義兄弟ハイラート
- (C) 私の姑、および妻方の祖父母

第8章 フィリップ2世の子どもたちへの教育について

## 第9章 長男の手による補遺（1535 - 1661年）

(A) 両親および姉妹の死去について

(B) 兄弟姉妹たちのその後の消息について

注記

索引

〈以上、本号〉

- (注記) ①訳文の〔 〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したものであり、( ) は原語である。
- ②各章やその小見出しも、同様な趣旨から訳者が書き加えたものである。
- ③本文の(注)は一括して末尾に、各章ごとにまとめて記した。
- ④原文にない索引(人名、事項そして地名・国名)を本邦訳の9章の末尾に、独立した形式で新たに作成・付記し、掲載分冊番号とページ数を記した。

## 第7章 フィリップ2世の妻の親族の誕生年と死亡年について

### (A) 私の舅クリストフ・シュミットの家族

#### ◆1553年

この年の6月14日に、私の舅クリストフ・シュミット(Christoph Schmid)が生まれた。彼の父親は老シックス・シュミット(Six Schmid der altest)であり、〔彼の母親は〕カタリーネン・マイリン(Catharinen Mayrin)であった。彼女は1526年2月の謝肉祭の前の月曜日に、16歳で結婚した〔したがって、彼女は1510年生まれである〕。彼女は夫、老シックス・シュミットと46年間の結婚生活を共にした。その間に、15人の子どもを授かり、そのうちの10人を失った。それ故に彼らの死後、3人の息子と2人の娘だけが残った。すなわち、〔シュミット家の息子たちとは〕シックス、アブラハム(Abraham)そしてクリストフ〔私の妻の父親：舅〕であり、そして〔娘たちとは〕エリザベート(Elisabeth)とカタリーナ(Katharina)であった。父親は73歳に、母親は62歳に、すなわち老クリストフ・シュミットは1572年7月9日〔享年73歳：1499 - 1572年〕に、その妻カタリーネンも同年11月25日〔享年62歳：1510 - 1572年〕に、死亡した。

## (B) 義兄弟ハイラート

### ◆1578年

この年の8月8日に、私の義兄弟のハイラート (Heyrat) はヴェルシュラント〔スイスのフランス語地方 (Welschland)〕で、未婚の若い女性、アンナ・ゲーベレーリン (Anna Gaebelerin) — 〈彼女はハンス・ゲーベリン (Herr Hans Gaebelin) 氏の娘で、21歳であった。それは、彼女は1557年7月10日 (日曜日) の夜9時半に誕生していたからである。星座は山羊座〉 — と〔結婚の〕話し合いを取り決めた。

彼女の婚約は同年11月6日に商人の寄合い部屋〔会館〕 (Kauffleutstuben) で行われ、そして結婚式は11月17日に、上記の商人の寄合い部屋で挙行された。彼らの結婚生活は32年と9週間続いた。何故なら、私の義兄弟ハイラートは1611年1月24日 (月曜日) の夕方6時に死亡し、そして聖シュテファン教会の墓地に埋葬されたからである。彼への弔辞として、教区牧師のM・ヤーコプ・リューリヒ (M. Jacob Ruelich) が聖ウルリヒ教会近くで、讚美歌 (psalm) 25番を読み上げた。

彼らは〔以下のような〕11人の子どもを授かった。

第1子は息子〔長男〕で、ハンス・クリストフ (Hans Cristoff) 〔と命名された〕。彼は1579年8月28日 (金曜日) の10時頃に誕生し、そして同年の11月15日 (金曜日) に、僅か3ヵ月で夭折した。

第2子も息子〔二男〕で、〔長男と同名の〕ハンス・クリストフ 〔と命名された〕。彼は1580年8月5日 (金曜日) の朝8時半に誕生した。星座は双子座。この子は1611年2月7日 (月曜日) の夕方8時に死亡〔享年、31歳〕した。彼の遺体は聖シュテファン教会の墓地に埋葬された。

第3子も息子〔三男〕で、マルクス (Marx) と命名された。彼は1581年8月10日 (木曜日) の早朝3時15分に誕生した。そして彼は1611年9月28日にスイスで死亡〔享年22歳〕した。彼には4人の子どもがおり、まだ妊娠能力のある妻を残しての死亡であった。

第4子は娘〔長女〕で、アンナ・マリア (Anna Maria) 〔と命名された〕。彼女は1582年9月25日の昼2時に誕生した。

第5子は息子〔四男〕で、マテウス (Mattheus) 〔と命名された〕。彼は1584年5月23日 (土曜日) の朝9時に誕生した。星座は魚座。

第6子は息子〔五男〕で、ハンス・ジョルク (Hans Jerg) 〔と命名された〕。彼は1586年2月12日の昼12時半に誕生した。星座は射手座。彼は1590年3月に4歳で夭折した。

第7子は息子〔六男〕で、トビアス (Tobias) 〔と命名された〕。彼は1586年4月15日に誕生したものの、1590年3月17日に、僅か2歳11ヵ月で夭折した。

第8子は娘〔二女〕でスザンナ (Susanna) 〔と命名された〕。彼女は1588年8月9日の朝6時半に誕生した。そして、1611年1月21日の6時頃に死亡〔享年22歳〕した。彼女の夫は〔前記の〕教区牧師、M・ヤーコブ・リューリヒであり、彼が聖ウルリヒ教会で賛美歌73番を弔辞として読み上げた。

第9子は娘〔三女〕で、美しいイエレミアス (Jeremias) である。彼女は1590年6月8日の夕方9時半に誕生した。また1630年11月30日に死亡〔享年40歳〕した。

第10子は娘〔四女〕で、ヨーハン・バプティスタ (Johann Babtista) 〔と命名された〕。

彼女は1591年6月25日の朝6時半に誕生したものの、同年7月1日に僅か6日で夭折した。

第11子は息子〔七男〕で、マールクアルト (Marquart) 〔と命名された〕。彼は1602年7月6日の午後2時45分に誕生し、1611年11月1日の夜7時に麻疹 (Kindsblatter) が原因で死亡〔享年9歳〕した。

## (C) 私の姑、および妻方の祖父母

### ◆1618年

この年の11月3日の夜9時45分に、私の姑が神の許に召された。11月6日に彼女の〔遺体〕は聖シュテファン教会の墓地に埋葬された。〔牧師〕エーインガー (Herr Ehinger) 氏<sup>(67)</sup>が賛美歌25番を彼女の弔辞として読み

上げた。

◆ 1585年

この年の5月12日（土曜日）の朝方4時に、私の妻方の祖父ハンス・ゲーベリン（Hans Gaebelin）が死亡した。

◆ 1588年

この年の8月14日（日曜日）の朝9時に、私の妻方の祖母カタリーナ（Catharina）が死亡した。

## 第8章 フィリップ2世の子どもたちへの教育<sup>(68)</sup> について

◆ 1612年——筆者：33歳、妻：30歳、長男：5歳、長女：4歳

この年の6月26日に、私は〔長男の〕ハンス・マテウスを、アーダム・グムペルスハイマー（Herr Adam Gumpelsheimer）氏<sup>(69)</sup>が〔教師として〕指導するラテン語学校（Lateinische Schuel）〔の1年生〕に入学させた。神が息子に聖なる精神〔魂〕をお与えになったためであろうか、息子は敬虔な子どもに成長し、何が正義（Recht）で、何が公正（Redlich）なのかを学んだ。〔当時の〕息子はまだ5歳に10日届かない年齢であり、若い徒弟（Jung Gesell）同然の年端の行かない幼児であった。

◆ 1614年——筆者：35歳、妻：32歳、長男：7歳、長女：6歳

この年の5月27日に、長男マテウスはマルティン・グムペルスハイマー（Herr Martin Gumpelsheimer）氏が〔教師として〕指導する第2学年（die andere Schuel）に進級した。神が息子にさらなる素晴らしい能力をお与えになったためであろうか、息子は勤勉で、かつ神を敬う子どもに成長した。

同年の6月1日に、私は長男のために1人の個人的な家庭教師（ein privat paedagogus）を、時給払いを条件に雇用した。〔事実〕私はこの家庭教師に四半期毎に1½グルデンを支払っていた。

同年の5月26日に、私は長女のアンナ・マリアを、N・ハインツェルマン（N. Heintzelman）が指導する〔ドイツ語〕学校に預けた〔入学させた〕（in die Schuel einstellen）。神が長女に素晴らしい能力をお与えになったため

であろうか、長女は勤勉、かつ神を敬い、また如才のない子どもに成長した。そして長女は知識を我が物にした。

◆1615年——筆者：36歳、妻：33歳、長男：8歳、長女：7歳

この年の7月に、長男マテウスは第3学年に進級した (in die Schuel kommen)。

◆1616年——筆者：37歳、妻：34歳、長男：9歳、長女：8歳

この年の8月19日に、長男はダニエル・ブラッシュ (Herr Daniel Brasch) 氏が指導する第4学年に進級した (in die vierte Schuel transferiert)。勉学する上で、彼に神の恩恵と素晴らしい能力が与えらんことを。

◆1617年——筆者：38歳、妻：35歳、長男：10歳、長女：9歳、  
三女：5歳

この年に、長男マテウスは第5学年に (in die 5 Clas) 進級した。彼に神のさらなる恩恵があらんことを。また同年の復活祭の間に、三女スザンナは〔長女と同じ〕N・ハインツェルマンが指導する〔ドイツ語〕学校に入学した。彼女に神の恩恵と聖なる魂〔精神〕が授かったためであろうか、三女は敬虔な子どもに成長した。

この年の5月22日に、私は幼い長女マリアをブッヘリン婦人 (Frau Bucherin) に預けた。長女は〔彼女から〕針仕事〔裁縫仕事 (die Nehet)] を教えてもらった。彼女に神の恩恵があらんことを。

◆1618年 (30年戦争の開始年)——筆者：39歳、妻：36歳、

長男：11歳、長女：10歳、三女：6歳、三男：5歳

この年の四旬節の季節に、長女マリアは〔再び〕ブッヘリン婦人の許に預けられ、針仕事〔裁縫〕を学んだ。

また同年の復活祭の季節に、私は長男マテウスを〔上記のダニエル・〕ブラッシュ氏の許に行かせて、反復練習〔補修教育 (in die repetition)] と書き方 (Schreiben) を勉強させた。そして自宅では、1人の家庭教師 (praceptor) を雇って、長男と長女の2人に書き方を教えさせた。

同年の7月3日に、三男のハンス・フィリップが学校に入学した。それは、三男の短気な性格 (Gasen) を治すために、預けられたのである。

同年の9月に、長男はモイゼス・ヘルマン (Herr Moyses Hermann) 氏が指導する第6学年 (die 6 Schuel) に進級した。

◆ 1620年——筆者：41歳、妻：38歳、長男：13歳、長女：12歳、  
三女：8歳、三男：7歳

この年に、長男マテウスは第7学年 (in die 7 Schuel) に進級した。また三男フィリップは第2学年 (die andere Schuel) に進級した。彼らの教師 (praeceptor) はそれぞれ、〔前記の〕マルティン・グムベルスハイマー氏とイエーネス・ジェロニムス・バイール (Jenes Jeronymus Bayr.) 氏であった。三男は反復練習〔補修教育〕のために後者〔の教師〕の許に通っていた。

◆ 1621年——筆者：42歳、妻：38歳、長男：14歳、長女：13歳、  
三女：9歳、三男：8歳

この年の秋期に、私はヨハネス・ベルンハルト・グラス (Johannes Bernhart Grass) を長女マリア、三女スザンナそして三男フィリップの個人的な家庭教師に雇った。また私は長男マテウスに書き方を学ばせるべくレオンハルト・シュスター (Leonhart Schuster) の許に通わせた。

同年の秋期に、三女スザンナはブッヘリン婦人の許に預けられ、〔彼女から〕針仕事〔裁縫仕事 (die Nehet)〕を教えてもらった。

同年の11月29日に、私の妻は長女をフィリピーナ・ヴィンターリン (Philippina Winterin) の許に、針仕事〔裁縫〕をするために預けた。

◆ 1622年——筆者：43歳、妻：40歳、長男：15歳、長女：14歳、  
三女：10歳、三男：9歳

この年の2月22日に、三男フィリップはN・ハイポルト (N.Heippolt) が指導する第3学年 (die dritte Class) に進級した。彼は、神の御慈悲により、勉学に勤しむことができた。

同年の10月に、長男マテウスは講堂〔講義室 (das Auditorium) で聴講する〕すなわち第8学年 (die achate Schuel) に進級した。教師たちはダニエル・ヘーシェル (Daniel Herschel) とM・エリアス・エーインガー (M. Elias Ehinger) である。後者〔の教師〕はアウクスブルク市の公僕 (publicus)<sup>(70)</sup>でもあった。

この〔秋の〕時期に、私は三男に書き方を学ばせるべく、レオンハルト・シュスターの許に、時間外〔放課後 (nach der Stundt)〕に、通わせた。

◆1623年——筆者：44歳、妻：41歳、長男：16歳、長女：15歳、  
三女：11歳、三男：10歳

この年の10月7日に、私は三男フィリップをアーノルド・ペリケオ (Herr Arnold Pelliceo) 氏が指導する第4学年 (die vierte Class) に進級させた。私はこの息子に反復練習〔補修教育〕をさせるために、10時から11時の1時間、ペリケオ氏の許に通わせた。

同年の秋期には、三女スザンナが再び〔ブッヘリン婦人の許での〕針仕事〔裁縫仕事〕を辞して、家に戻った。彼女は家で働き、かつ針仕事をした。

◆1624年——筆者：45歳、妻：42歳、長男：17歳、長女：16歳  
三女：12歳、三男：11歳

この年の3月4日に、三女スザンナが針仕事に雇用された。

また4月には、長女マリアがフィリピーナ・ヴィンターリンの許での針仕事を辞して、家に戻った。〔2年5ヵ月働いた〕彼女には13グルデン20クロイツが支払われた。

同年の3月4日に、三男フィリップはアブラハム・ニッゲル (Abraham Niggel) の許に、書き方を学ぶために預けられた。〔そのためか〕同年の9月28日に、三男はダニエル・ブラッシュ (Daniel Brasch) が指導する第5学年 (die finfte Class) に進級した。

同年の10月1日に、私は長男マテウスに算数 (Rechnen) を学ばせるべく、彼を〔上記の〕アブラハム・ニッゲルの許に預けた。同10月31日に、私は長男を聖アンナ教会の〔ラテン語〕学校から、ヨハン・ザーラー (Herr Johann Saler) 氏が指導する私塾〔個人経営の〈ドイツ語〉学校 (eine private Schuel)〕に入学させた。ここで、長男に表現方法〔言葉遣い (stylus)〕や討論〔対話〕術 (dialectica) を学ばせた。このザーラーなる教師は、D・レーメン (Herr D. Remen) 氏の許で勉学に励んだ人物であった。長男に神の恩恵があらんことを。

◆1625年——筆者：46歳、妻：43歳、長男：18歳、長女：17歳、  
三女：13歳、三男：12歳、八男：6歳

この年の2月25日に、三女スザンナにリュウマチ痛 (zum Reissen) が発病した。この少し前の2月21日に、彼女は〔約1年間にわたって働いていた〕針仕事を辞めていた。彼女には四半期ごとに、2グルデンが支払われていた。それは、彼女がレースの服〔レース編み (spitz)〕や同様な模様の〔服を〕縫っていた〔報酬である〕からである。

同年の5月5日に、長男マテウスはヴェネツィアの〔都市貴族〕マテオ・シュミット (Mattheo Schmidt) の許に遣わされる。それは、彼が〔以後〕2年間、親の金でヴェネツィアで暮らし〔商業をはじめ、幅広く世間を学び〕、その後、ある貴族に仕えることが予定されているからだ。神が彼に幸運、健康、繁栄、恩恵そして分別をお与えになったためであろうか、彼は誤った方向へ惑わされることはなかった。

同年の5月7日に、彼は上級学校 (eine hohe Schuel) に入学した。つまり、書き方〔の勉強〕は終了したのであった。

同年の6月2日に、八男カールが第1学年 (die erste Schuel) に入学した。彼に神の恩恵と助力があらんことを。

同年の9月27日に、三男フィリップはフリードリヒ氏 (Herr Friderich) が指導する第6学年 (die 6 Class) に進級した。彼に神の恩恵があらんことを。この三男も反復練習〔補習教育〕のために、〔前記の〕ザーラー氏の許に通った。また、彼は、書き方ために聖アンナ教会近くのヨハン・ハインツェルマン (Johan. Heintelmann) の許に通った。

◆1626年——筆者：47歳、妻：44歳、長男：19歳、長女：18歳、  
三女：14歳、三男：13歳、八男：7歳、四女：5歳

この年の1月7日に、私は、八男カールと四女ヘレーナのために、バルヘルム・エックハルト (Barhelme Ekhart) を個人的な家庭教師に雇い入れ、〔毎日〕1時間 (pro 1 Stundt) 勉強させようと努めた。この家庭教師には、四半期ごとに2グルデンを支払った。〔そのおかげでか〕八男は9月26日に第2学年に進級できた。

同年の10月6日に、私は三男フィリップのために、〔前記の〕ヨハン・ザーラー氏を家庭教師 (zum praecceptor domestic) に雇い入れ、〔毎日〕2時間 (pro 2 Stundt) 勉強させた。ローレンツェン家の (die Lorentzen) 2人〔の子どもたち〕もこの勉強に加わっていた。

◆1627年——筆者：48歳、妻：45歳、長男：20歳、長女：19歳、  
三女：15歳、三男：14歳、八男：8歳、四女：6歳

この年の6月7日に、私は幼い四女ヘレーナをN・ハインツェルマン (N. Heintzelman) が指導するドイツ語学校 (in die teutschen Schuel) に預けた〔入学させた〕。神の恩恵があらんことを。

同年の7月3日に、〔ヴェネツィア在住の〕マテオ・シュミットに、長男の〔教育費の〕最後の残金100ライヒス・ターラー (Reichsthaler) が支払われた。長男にさらなる神の助力が与えられんことを。したがって、〔長男マテオスのヴェネツィアでの教育費は、最終的に〕200ライヒス・ターラーに上った。

同年の10月25日に、三男フィリップが第7学年に (in die 7 Class) 進級し、また同日、八男カールは第3学年に (in die 3 Class) 進級した。この2人に神の恩恵と祝福があらんことを。

◆1628年——筆者：49歳、妻：46歳、長男：21歳、長女：20歳、  
三女：16歳、三男：15歳、八男：9歳、四女：7歳

この年の10月16日に、八男カールは書き方を学ぶべく預けられた。何故なら、ペストという疫病 (contagium pestis) がひどく蔓延したためである。つまり、私は同年の終期に、すべてのわが子を家に引き留め〔て、外出させなかつ〕た。バルトロメウス・エックハルト (Bartholmeus Eghart) が上級学校を訪れ、〔前記の〕ザーラー氏に、ペストが終息するまで、〔学生に〕外出を控えるように指導するよう要請したからであった。

なんと、学校〔教育〕にとってひどい時代であることよ！

◆1629年——筆者：50歳、妻：47歳、長男：22歳、長女：21歳、  
三女：17歳、三男：16歳、八男：10歳、四女：8歳

この年の1月1日に、私は三男フィリップを勉学のため福音学校 (das

Collegium Evangelicum) へ通わせた。同年の3月8日に、八男カールが第4学年に進級した。この2人の子らに神の聖なる魂と正義があらんことを。

同年の5月1日に、長男マテウスが領主ハンス・ゲオルク (Herr Hans Georg) と領主ダビット・ヴォルフエン・ツウ・アイスネン (Herr David Wolfen zu Eisnen) の館に住み込み、6年間の従者に (ein Diener pro 6 Jahre) 取り立てられた。そして、彼は主人たちの野営地からフィレンツェに派遣された。それゆえに、彼は〔現実〕に領主の従者になったのであった。〔事実〕5月26日に彼はヴェネツィアを出立し、5月30日に〔フィレンツェ〕に到着した。それゆえ、彼は〔その旅の間〕神から幸運と平常心、祝福と身体的な健全さを頂いたにちがいない。

同年の6月9日には、私は長男について、〔敵方に捕らえられ〕1500グルデンと引き換え〔に解放されるという身柄引き渡し〕事件が生じたのかと心配したが、神のご加護で、その必要がないことが判明した。

同年の9月22日に〔皇帝フェルディナント2世がローマ教会財産回復勅令 (restitutionsedikt) を発布し<sup>(71)</sup>、プロテスタント系の諸々の〕学校が閉鎖されたので、私は三男フィリップをヨハン・ザーラー氏の許に通わせ、1時間、対話術を教えてもらう。それから9月24日に、クリストフ・ヴィースト (Christoph Wiest) — 〈彼はかつて、ドイツ語学校の教師 (ein Tuetscher Schuelmeister)〉 — に頼んで、八男カールと四女ヘレーナに1時間、書き方を教えてもらった。これらの報酬は時給2グルデンであった。また、私は三男フィリップを〔前記の〕ザーラー氏の許で、1時間、対話術の知識 (dialecticae cognitionem) をより詳しく学ばせた<sup>(72)</sup>。

◆1630年——筆者：51歳、妻：48歳、長男：23歳、長女：22歳、  
三女：18歳、三男：17歳、八男：11歳、四女：9歳

この年、長男マテウスは主人に付き従って、ヴェネツィアに赴いた。それゆえ、彼はヴェネツィアである程度の時を過ごす〔=滞在する〕羽目になった。それは、ペストに襲われ、さらにペストに包囲されてしまったからである。このために、彼は同地で、1年と1日〔丸1年〕留まらざるを得なかった。彼が私たちの家〔=アウクスブルク市〕に戻って来たのは、

翌〔1631〕年の10月25日であった。

◆1631年——筆者：52歳、妻：49歳、長男：24歳、長女：23歳、  
三女：19歳、三男：18歳、八男：12歳、四女：10歳

この年の6月11日に、ヨハン・ザーラー氏は教師の用事で（ad functionem scholasticam）リンダウ市（Lindau）に旅立った。彼は同市の教師団体〔の館〕（rectoratus）を訪れた。

私は八男カールを、かつて〔前記の〕ザーラー氏の指導の許で学んだように、ダニエル・ヘーシェル（Herr Daniel Heschel）氏とアントーニオ・シュテンゲルン（Herr Anthonio Stengel）氏の指導の許で学ばせた。また、私は彼にも書き方を教えてくれる帳簿係り〔ないし書記〕（Schreiber）を〔家庭教師として〕雇い入れた。彼への報酬は時給3グルデンであった。やがて〔この教え方の下手な〕無能者（der Wiesten）を解雇した——〈この者の名前は忘れたが、カトリック教徒（Ketterlin）であったことは覚えている〉——。

同年の10月25日に、長男マテウスは偉大なる神の恩恵によって、ヴェネツィアから撤退し、アウクスブルク市に戻ってきた。——〈この当時、大規模な疫病〔ペスト〕がイタリア全土を、特にヴェネツィアを席卷し、何千人もの命を奪っていたからである〉——長男は12月7日まで〔アウクスブルク市の〕我が家に滞在していた。その後イスネン（Isnen）に出発し、12月10日に同地に到着した。神は長男に恩恵を施し、無事に到着させたのであった。

◆1632年——筆者：53歳、妻：50歳、長男：25歳、長女：24歳、  
三女：20歳、三男：19歳、八男：13歳、四女：11歳

この年の4月20日に、スウェーデン国王アドルフ・グスタフ<sup>(73)</sup>がアウクスブルク市を降伏させ、そして占領した。その後、同国王は聖アンナ教会の傍にある諸学校の封鎖を解除した。

同年の6月7日に、八男カールはガイガー（Geiger）が指導する第6学年に進級した。

無頼漢〔カトリック教徒（Ketterlin）〕たちが書記局（die Cantzlei）に乗り込んで来て、そして私に抗議をした。

同年の1月に、長男マテウスがフィレンツェに到着した。

同年の7月2日の午後、三男フィリップはストラスブル（Strasburg）にある上級学校へ入学すべく、ここアウクスブルクを出発した。そして7月7日に、神の護衛の下、もちろん、〔この当時は、30年〕戦争という状況下であり、危険が無いわけではなかった（non periculo belli causa）が、〔ともかくも〕ストラスブルに〔無事〕到着した。三男に神の聖なる魂が授かり、そして彼が満足のいくまで勉学に勤しむことができますように。

同年の9月22日に、私はフィリップ・アイゼリン（Philipp Eiselin）を書き方の教師（Schreiber）として雇い入れた。彼には四半期ごとに3グルデンを支払った。〔しかし〕この者は〔とんだ食わせ者であり〕まったくの不真面目な人物であった。私は〔しかたなく〕八男カールを聖アンナ教会に通わせ、書き方と算数を学ばせた。

◆1635年——筆者：56歳、妻：53歳、長男：28歳、長女：27歳、  
三女：23歳、三男：22歳、八男：16歳、四女：14歳

この年の9月10日に、三男フィリップがストラスブルから、大きな危険にさらされながらも、バーゼル市、チューリッヒ市、ザンクト・ガレン市そしてリングダウ市などを經由してアウクスブルク市に帰還した。この〔帰国した〕三男のことを、私は〔ここに〕報告したいのである。

——〈ここで、医師フィリップ2世・ヘーヒシュテッターの筆による記録は終わっている。以下のさらなる記録は、彼の長男ハンス・マテウスの筆によって記録されたものである〉——

## 第9章 長男の手による補遺（1535 - 1661年）

### （A）両親および姉妹の死去について

#### （a）父の死亡（1635年）

◆1635年——母：53歳、私（長男）：28歳、長女：27歳、  
三女：23歳、三男：22歳、八男：16歳、四女：14歳

この年の11月19日に、私の愛しい父親にして医師フィリップ・ヘーヒシュテッターが当地アウクスブルク市で神の御許に召された〔享年56歳〕。

神は父に対して神の永遠なる力〔復活〕を授け、そして私たち〔残された者〕には父の靈魂の消滅を宣告なされた。

残された者たちとは、〔以下のごとし。〕

・夫を亡くしたアンナ・マリア・ヘーヒシュテッター：彼女はシュミット家の出身者であり、父の愛する妻である。53歳。彼女〔寡婦〕は〔現在〕以下の子どもたちと共に暮らしている。

・長男：ハンス・マテウス……………28歳

・長女：アンナ・マリア……………27歳

・三女：スザンナ……………23歳

・三男：ハンス・フィリップ………22歳

・八男：ハンス・カール……………16歳

・四女：ヘレーナ……………14歳

(b) 姉妹（長女と三女）の死亡（1635年）

この年の11月20日に、三女スザンナが厄介で、悪質な疫病〔ペスト〕で死亡した〔享年23歳〕。彼女に神の喜ばしき復活があらんことを。

また〔2日後の〕22日には、長女アンナも〔スザンナの後を追うように〕死亡し、永眠した〔享年27歳〕。この長女にも神の大なる平穩があらんことを。

(c) 母親の死亡（1636年）

この年の2月7日の午後3時頃に、私の愛しい母親アンナ・マリアは安らかに神の御許で永眠した〔享年56年〕。母に全能なる神の喜ばしい復活があらんことを。また神は私たち〔残された者たち〕に〔母の〕靈魂の消滅を宣告なされた。

残された者たちとは、〔以下の〕4人の子どもたちである。

・長男マテウス〔商人で〕既婚者………31歳

・三男フィリップ〔医学生〕……………25歳

・八男カール……………19歳

・四女ヘレーナ……………17歳

(B) 兄弟姉妹たちのその後の消息について

◆1636年——母：54歳、私：29歳、三男：23歳、八男：17歳、  
四女：15歳

この年の12月19日に、私マテウスはフィレンツェから、立派なシルクハット (Esse) をかぶってアウクスブルクの家に戻ってきた。それは、私の主人〔領主〕との奉公〔契約が失効し、その〕義務から解放されたからである。

◆1637年——母：55歳、私：30歳、三男：24歳、八男：18歳、  
四女：16歳

この年の3月19日に、三男フィリップがイタリアのパドヴァ (Padpva) 大学〔医学部〕で学位を取得した。

同年の4月14日に、三男はパドヴァの、彩色された井戸の近くに住む都市貴族マテオ・モリナーリ・ベデッロー殿 (Signore Mateo Molinari Bedello) の許に、賃貸部屋 (camera locante) を借りた。

同年の6月22日に、私は貴族の名誉をもち〔名望家で〕、徳の篤い娘たるエリザベート・シュタムレーリン (Elisabeth Stamlerin) ——〈彼女は〔今では〕故人たる貴族 (der Edel) ジークムント・シュタムラー (Sigmundt Stamler) の正当な〔嫡出の〕一人娘〉——と結婚した。そして、福音主義者たちの〔聖アンナ教会の〕講堂で (im collegio) 〔皆に祝福されて〕結婚式を挙げた。

◆1638年——私：31歳、三男：25歳、八男：19歳、四女：17歳

この年の6月9日に、八男カールは彼の後見人によってイタリアのパドヴァ市へ、すなわち、彼の兄〔三男フィリップ〕の許に遣わされた。彼は、神の恩恵によって、兄の許に無事に到着した。彼の目的に良き結果が伴いますように。

同年の12月13日に、門閥酒房寄合い選挙 (Stubenwahl) が都市貴族 (Herr Patricis) たちによって行われた。そして私は都市貴族寄合いの中で (in deren sodalitas)、私が敬愛する〔故人になった〕父親の〔かつての〕地位に〔就任することを〕宣誓させられた。私とはハンス・マテウス・ヘー

ヒシュテッターである。

◆1639年——私：31歳、三男：25歳、八男：19歳、四女：17歳

この年の2月22日に、八男カールがパドヴァから〔西に約70kmに位置する〕ヴェローナ (Verona) へ赴き、都市貴族レアンドロ・ジオ・バティスタ・オリヴィエ殿 (Signor Leandro Gio Batista Olivieri) と都市貴族ビージュ・ボスケッティ殿 (Signor Biagio Boscheti) の書記 (Scriptor) の許に滞在することになった。その際〔上記の〕オリヴィエ殿は100ターラーという大金〔の支払い〕を条件に、カールの〔1年間の〕滞在を認めたのであった。神の恩恵で、彼〔八男〕が時間とお金を有効に使わんことを。

同年の7月28日に、26歳に1ヵ月足りない年齢になっていた三男フィリップがパドヴァで一人前の医師 (medicus) になった。やがて、彼は〔医師としての腕前〈技能〉について〕公〔世間〕で最高の信用と賞賛 (gratus publicae summa cum laude) 得て、今や故人となってしまった父親の〔医師としての〕立場にまで上り詰めた。彼に神のさらなる恩恵と祝福があらんことを。そして彼が自立した生計が可能になりますように。

同年の9月4日に、私の愛しい弟〔三男のフィリップ〕がアウクスブルク市に運良く、しかも無事な姿で帰ってきた。そして私の家に居候を決め込んだ。今や、彼に全能なる神のさらなる繁栄があらんことを。

◆1640年——私：33歳、三男：27歳、八男：21歳、四女：19歳

この年の3月23日に、八男カールは〔ヴェネツィア市の前記の〕都市貴族マテオ・シュミット殿の従者 (Diener) になるべく、彼の許を訪れた。シュミット殿は〔カールを従者として採用し、諸々の〕便宜を与えた。すなわち、6年間、従者に必要な食料と衣服〔の提供〕を約束したのであった。

同年の7月12日に、私の弟〔三男で、医師の〕フィリップが、貴族 (Edlen) の名誉をもち、徳の篤い娘アンナ・オイフロジーナ (Anna Euphrosina) ——〈彼女は今は亡き貴族で、博学な医師ルーカエ・マツシュペルガー殿 (Lucae Matsperger) の一人娘〔したがって、唯一の相続人〕——と〔アウクスブルク市の北、65kmに位置する〕ネルトリンゲン市で婚約し、そして

ゲオルク・ハウフ (Georg Hauf) という聖なる教区牧師 (H. Pfahern) を介して、同市の教会で結婚の誓約を交わした。彼ら〔若き〕2人に神の祝福と幸福そして永久の命があらんことを。

同年の8月4日/14日に、私の愛しい弟で医師である三男フィリップがネルトリンゲン市で〔改めて〕上記のマツシュペルガー一家の娘と結婚式 (Hochzeit) を挙げ、さらに質素な教会で〔神の〕祝福を受けた。またN・コベルト (Kobelt) が経営する雄牛亭 (bei Ochsenwirth) で、披露宴が催された。彼ら〔若き〕2人が共に末永く、しかも愛情に満ちた平和な生涯を送り、さらにすべての財産を入手できますように。

同年の8月21日に、妹〔四女の〕ヘレーナが、〔ネルトリンゲン市に新居を構えた〕医師である三男フィリップの許に滞在した。妹は、それ以前は、私の許〔アウクスブルク市〕に2年と2週間、滞在していた。

◆1641年——私：34歳、三男：28歳、八男：22歳、四女：20歳

この年の3月25日に、私の最愛の妻エリザベートが夕方7時15分前〔6時45分〕に第一子たる娘を出産した。この娘は弱々しく、〔それゆえに〕急いでその場で洗礼〔私洗礼〕が行われ (notgetauft)、アンナ・マリアと命名された。〔同席していた〕医師のポール・イエニシュ氏 (Herr Doctor Paul Jenisch) が〔この娘に〕白粉などを顔に塗った。翌26日に〔残念ながら〕娘は神の御許に召され、3月28日に私の両親が眠っている聖シュテファン教会の墓地の中に埋葬された。〔こうすることで〕私たちがこの〔亡くなって〕天使〔になった娘〕に〔いつでも〕直ちに (ehest) 会えることができますように。また〔娘が〕神と共にキリストの御許で永遠にあらんことを。

◆1643年——私：36歳、三男：30歳、八男：24歳、四女：22歳

この年の10月28日 (水曜日) —— 〈この日は聖シモニスとユダの祭日〉——の昼1時半頃に、私の最愛の妻が第二子たる息子を出産した。星座は牡牛座 (Zeichen des Stier)。

この息子は夕べの説教の後、私たちの福音教会〔聖アンナ教会 (Evangelischen Colegio)〕の講堂で行われた聖なる洗礼〔の際の命名〕式に

参加して、フィリップ・ジークムント (Phlipp Sigmundt) と命名された。彼の代父は〔上記の医師〕ポール・イエニシュ医学博士 (M.D.) と私の最も親しい人物であるミヒヤエル・ミュラー (Herr Michael Miller) 氏、代母はアンナ・マリア・ジークムント・ナターニン婦人 (Frau Anna Maria Sigmundt Natanin) である。私たちに神の聖なる魂、恩恵そして祝福が授かりますように。アーメン (Amen)。

◆1644年——私：37歳、三男：31歳、八男：25歳、四女：23歳

この年の2月12日 (金曜日) の午後6時半に、私の愛しい幼い息子〔長男〕フィリップ・ジークムントが再び神の御許に召された。そして2月15日に、彼の姉〔長女のアンナ・マリア〕そして私の両親が埋葬されている聖シュテファン教会の墓地に埋葬された。息子の魂は確実に神の御手の中にあり。〔まだ生きている〕私たちも将来〔息子が生きている〕神の世界 (Zeit) へ受け入れられんことを。アーメン。

同年の3月20日に、八男カールが、彼の後見人 (Padron) たる〔前記のヴェネツィアの都市貴族〕マテオ・シュミットが破産し、さらにカール自身も他に奉公先をもっていなかったために、再びヴェネツィアからアウクスブルク市に戻り、そして彼が別な領主を探すまでの間、私の家に居候していた。〔7年後の〕1651年に彼は再び、以前の奉公先のマテオ・シュミット家に奉公することになった。

同年の5月28日/6月7日に、〔1640年から三男フィリップの新居に居候していた〕私の妹〔四女〕ヘレーナがヨハン・ジークムント・ヴェクセラ (Johann Sigmundt Wechseler) ——〈彼の職業 (Kunst) は薬剤師 (Apotecker) で、25歳〉——と、ネルトリンゲン市の教会で婚約をした (copulirt)。また同市の主要な〔聖ゲオルク (St. Georg)〕教会で祝福を受け、さらにN・コベルト氏が経営する雄牛亭で結婚式を挙げた。この〔若き〕2人に神の祝福と恩恵があらんことを。アーメン。

◆1647年——私：40歳、三男：34歳、八男：28歳、四女：26歳

この年、私マテウスは1640年から6年間にわたりH・メルキオール氏 (Melchior) との〔インスブルク市から南に、90kmに位置する北イタリ

アの〕ボルツァーノ (Botzen) への芳香ブドウ酒交易<sup>(74)</sup> (lidel Handtlung) を再度中止し、その旨を彼に伝えた。これに対して、彼は契約証書に従い、1647年11月27日に私の申し出を受け入れた。私たち〔の商会〕は30年戦争と大規模な〔商会の〕破産のために、多額の損失を被った。しかし、誰もが、私たちと同様に、〔相手に〕自らの救済〔損害賠償〕を求める (zu adossirn) ことはしなかった。双方に、神の救済によって、名誉を保ち、他の方法で日々の糧にありつけますように。

◆1648 - 49年——私：41～42歳、三男：35～36歳、

八男：29～30歳、四女：27～28歳

1648 - 49年〔の2年間〕、〔前年度に多額の損失を被った〕私は、商人フリードリヒ・ヴァルター (Herr Friedrich Walther) 殿の事業〔=商業 (negotio)〕で助手 (Assistente) とし働いた。そこでは、過酷な商旅を命じられ、少なからざる生命の危険やその他の嫌悪するような事に直面しながらも、それをこなしていた。そして、この〔過酷な〕商旅に対して、ヴァルター殿からは光栄にも〔それなりの報酬が支払われたので〕、私は報われた。そして、1649年12月31日までという債務証書〔Rever〕に従って、私はヴァルター商会を〔無事〕退職したのであった。

◆1650/51年——私：43/44歳、三男：37/38歳、八男：31/32歳、

四女：29/30歳

この年に、私は私の貴重品を含む財産と引き換えに〔自ら商会を立ち上げ〕、再びある取引を企画した。そして、私はハンス・バプティスタ・シオーラー (Hanns Babtista Schorer)、ゲオルク・ツェラー (Georg Zeller) そしてアレクシウス・エッガー (Alexius Egger) から〔漂白していない〕粗製の亜麻 (roche Leinbat) を購入することに成功した。

◆1652年——私：45歳、三男：39歳、八男：33歳、四女：31歳

この年の5月8日に、私はアウクスブルク市の福音主義派の市参事会 (Magistrat) から、〔ルター派が支配的な〕マイセン地方、ザクセン地方そしてチューリンゲン地方〔へ派遣された。この派遣の目的は、これらの地方〕で、アウクスブルク市内にある我々〔福音主義派〕の聖十字架教会の

再建のために寄付金 (Beysteur) を調達する (prochurirn)<sup>(75)</sup> ことであった。満足のいく成果を上げたこともあり、ありがたい事に6月20日にアウクスブルク市に無事に戻ることができた。

以下は〔三男で医師の〕フィリップ・ヘーヒシュテッターが彼の正妻 (Ehefrau) オイフロジーナ・マツシュペルガーとの間に授かった〔9人の〕子どもたち〔の名前と生年月日〕である。

- ・長男：フィリップ・ルーカス……1642年11月15/29日
- ・長女：マリア・エリザベート……44年 3月 8/18日
- ・二女：アンナ・オイフロジーナ……45年 9月 2/12日
- ・二男：ヨハネス・フィリップ……48年 4月 1/11日
- ・三男：ゲオルク・フリードリヒ……50年 4月 2日
- ・三女：アンナ・マリア……51年 9月 3/13日
- ・四女：マリア・ザローメ……53年 3月 31日
- ・四男：ヨハン・マテウス……55年 7月 6日
- ・五女：アンナ・オイフロジーナ……57年11月11日

◆1658年——私：51歳、三男：45歳、八男：39歳、四女：37歳

この年の8月11日に、私の妹〔=四女〕ヘレーナが死亡した〔享年37歳〕。彼女はネルトリンゲン市の〔薬剤師〕ハンス・ジークムント・ヴェクセラーの正妻であった〔彼女は23歳で結婚したので、結婚生活は14年間であった〕。

彼女は、すでに、1人の幼い娘〔=長女〕——〈洗礼の際に、オイフロジーナ・ヘレーナと命名された〉——を出産していた。しかし、彼女のお腹の中にはもう1人がおり、この子どもが原因で、彼女は体力を失い、死亡した。彼女の魂は神に捧げられた。

上記の子どもの他に、以下の3人の子どもたちが、彼女の死後に、残された。

- ・長 男：ヨハン・ジークムント
- ・幼い娘：アンナ・ドロテーア
- ・幼い息子：ステファヌス

同年に、八男カールは領主ヨハン・アンドレアス・リヒター (Herr Johann Andreas Richter) への奉公〔助勢／合力〕のため、ウィーンへ赴く。この奉公こそが、神が彼に使命として与えたものであった (erküset)<sup>(76)</sup>。

◆ 1659年——私：52歳、三男：46歳、八男：40歳、義兄弟：40歳

この年の1月11/21日に、義兄弟のヨハン・ジークムント・ヴェクセラ―〔40歳〕がバーバラ婦人 (Frau Barbara) ——〈彼女は、この時、すでに故人で、元市長であったヨハン・クリストフ・マルティヌス (Joh. Christoph Martinus) の未亡人であった。また彼女の実家の姓 (eine gebirne) は、プフィスター・ツウ・ポプフィンゲン (Pfisster zu Popfingen) であった。彼女の年齢は36歳前後であった〉——と2度目の結婚、すなわち、再婚をした。この2人に神の祝福があらんことを。

◆ 1661年——私：54歳、三男：48歳、八男：42歳、義兄弟：42歳

この年の10月6/16日に、義兄弟ヴェクセラ―の妻バーバラが第一子たる息子を出産した。そして聖なる洗礼で、ハンス・ヤーコプ (Hans Jacob) と命名された。この嬰兒に神の聖なる魂、恩恵そして祝福があらんことを。

——以下、日記の182～198ページには、記載されていない。——

——日記の終了——

## 注 記

——Ⅱ. 史料について (編者の序言より)——

- (1) グリンメルハウゼンの代表的な作品としては『阿呆物語』がある。この訳書 (全3巻) として岩波文庫版 (望月市恵訳、2010年) と東西出版社版 (関口存男訳、1948 - 49年) の2種類がある。
- (2) この一文は第3巻の結語からの引用である。〔原注5〕(S.182)。
- (3) これらの著作が出版されたのは1674年である。Gabriele von Trauchburg, on der ökonomischen zur intellektuellen elite-akademiker in der oberdeutschen familie hoehstetter, in; *Zeitschrift des Historischen Verreins fur Schwaben* (以下、ZHV.S.と略記する), 90.Bd., 1997, S.115.

——Ⅲ. 近世アウクスブルクの医師の日記——

### 第1章 「ヘーヒシュテッター家の家譜」

- (4) ヨアヒム・ヘーヒシュテッター1世は1522年当時、アントウィルペン支店の支配人であり、1522年にランゲンマンテル家のアイテルハンス (Eitel Hans) の娘アンナと結婚していた (ASL., S.504)。なお、このアイテルハンスは1528年5月に再洗礼派として、アイセンホ

- ルン市（フッガーの都市）で処刑される。O. Nübel, *Das Augsburger Kaufherrenengeschlecht Hoehstetter und die Restitution König Christians II. von Danemark*, in: *ZHVS*, 73.Bd., 1973, S.145.
- (5) ヨアヒム・ヘーヒシュテッター1世と北欧（デンマーク王家）との経済関係がニibelによって指摘されている。その契機は、当時のデンマーク国王クリスチャンセン2世の国外追放であった。すなわち、当時、都市や市民に好意的な政策を取っていた国王クリスチャンセン2世が、これに反発した貴族たちによって1523年に追放され、姻戚関係にある皇帝カール5世の低地地方に逃亡を強いられた。皇帝は同国王を支持し、軍隊を派遣して、国王の復権を目指す。この実行に不利な要素が判明する。その一つが同国王側の資金不足である。この点で、1525年以降、ヨアヒムは同国王と資金面で支援する。これがもつて、同国王の復権後、同国の鉱山業の経営を支配する (*Ibid.*, S.126-129)。
- (6) ヨアヒム・ヘーヒシュテッター2世は1572年に、フィリップ・ケーニツヒとその親族たちと商会を新たに起業した。このフィリップとは1581年までパートナーであった。また1581年以降は、フリードリヒ・レンツを共同経営者とした。M. Häberlein, *Hatt das glücklich wunderbarlich mit uns spilt*. Joachim Hoehstetter d.j. (1523-1597) in der Geschäftswelt des 16. Jahrhunderts, in: *ZHVS*, Bd.95., 2002, S.61-63.
- (7) このルーカスはもともとニュルンベルク市出身者である。彼は1519年にライプツヒ市の市民権を取得し、1527年以降はザクセン地方の銅取り引きに従事していた。したがって、ヨアヒム2世はドロテアとの結婚によって、中部ドイツの最も有力な鉱山業者と親族的関係を結ぶことになった (*Ibid.*, S.57)。
- (8) 夫のカスパールは結婚2年後に、彼の実父の奉公人を、夜、公道で殴りつけたために拘束された。この背景には、父親と息子との間に深い対立が存在していた。このため、ヨアヒム2世はエッティンガー家の内紛に巻き込まれてしまう (*Ibid.*, S.67-68)。
- (9) このトビアス・ハーマンは、五女フィリピーナの夫となるイェレミアス・ハーマンと兄弟である。ハーマン家は1590年代初期の頃からアウクスブルク市で羊毛商人として活動し、同家の財産は増加した（1604年と1614年の徴税簿から）。しかし、30年戦争発生後は、経営的に苦しくなり1621年に破産した。このため、同家は商人寄合いから排除された (*Ibid.*, S.71)。
- (10) 日記執筆者のフィリップ2世は十二宮による表記を好んで利用しているが、驚くべきことに、しばしば今日の占星術とは大きく異なる。たとえば、このアリアの場合、乙女座（8月24日～9月23日）と思われるのだが、彼はさそり座（10月24日～11月22日）と記している〔原注14〕(S.184)。
- (11) 注(9)を参照。
- (12) Wolfgang Reinhard (Hg.), *Augsburger Eliten des 16. Jahrhunderts*, Berlin 1996, S.121によると、結婚した年は1588年と1年ずれて記されている。
- (13) 彼女が再婚した年も1604年とこれまた1年ずれて記されている (*Ibid.*, S.121)。
- (14) M. Häberlein, *op. cit.*, S.71.
- (15) 彼は1538年にアウクスブルク市の都市貴族に列せられた。彼は、自らは商業活動に従事せず、同市のさまざまな商会に投資する投資家であった。同家とヘーヒシュテッター家は1570年から共同経営の形をとる (*Ibid.*, S.60-61)。
- (16) 彼は1603年にアウクスブルク市の商人寄合いのメンバーに加わったものの、1628年に破産の憂き目にあう (*Ibid.*, S.71)。
- (17) 原注17 (S.185)を参照。

## 第2章 「フィリップ2世の青春期」

- (18) 彼の実名はM.ダービッド・ビストリウスである。また彼は1606年から聖十字架教会の牧師になり、1619年に死亡した〔原注18〕(S.186)。
- (19) フィリップ2世の学位取得に尽力した人物は、彼の2人の甥（Paul u.Hans Ludwig）の友人で医師でもあったフェリックス・プレッター（Felix Pletter）であった（Gabriele von

Trauchburg, *op. cit.*, S.114)。

- (20) 彼は5回、同大学医学部の学部長職を5回歴任し、1622年に死去した〔原注19〕(S.186)。

### 第3章 「フィリップ2世の結婚および家族について」

- (21) この Hinschweren なる語彙は婚約 (Verlobung) の意味である。〔原注20〕(S.186)。  
(22) グリム (Grimm) に従えば、満月を意味する。またバラケルスス (Paracelsus) に従えば、新月を意味する。〔原注23〕(S.188)。

### 第4章 「フィリップ2世時代のアウクスブルク市の諸物価の変動について」

- (23) H・ミッタイス (世良晃志郎・広中俊雄共訳) 『ドイツ私法概説』創文社、1961年、127-131ページ。夫婦の財産は所有権の点ではまだ分離されていたが、管理・運用の点では夫の手中にあり、1つの管理統一体と認識されていた。  
(24) Bortzen とは、現代語の Reisig [柴の束] の意味である。今日でもシュワーベン地方では使用されている〔原注32〕(S.194)。  
(25) アウクスブルク市の市場で売られていた穀物の多くが隣国バイエルンから、特に国境都市フリートベルク (Friedberg) の市場から流入していた。その理由はアウクスブルク市の多くの聖界施設や市民たちがバイエルン大公国に所領を所持していたからであると、1638年に、フリートベルク市参事会が主張していた。この点から、アウクスブルク市の生活必需品 (食料) はバイエルン大公国に依存しており、バイエルン国境の閉鎖という措置は、アウクスブルク市の死活問題であった (Bernd Roeck, *Buäcker, Brot und Getreide in Augsburg*, Sigmaringen 1987, S.86-90)。  
(26) ドイツ語では「viele gulden, wenig zechinen」を意味する〔原注39〕(S.195)。  
(27) この鉱脈は1521年に発見された。瀬原義生「中世末期・近世初頭のドイツ鉱山業と領邦国家」(『立命館文学』第585号、2004年)、136ページ。  
(28) *ASL*, S.967。  
(29) B. Roeck, *op. cit.*, S.121-122。  
(30) 当時はパンの販売行為についても差別化が図られていた。たとえば、アウクスブルク市の住民は夏季では朝6時から、また冬季では7時から、そして祝祭日には10時からパンが買えたが、外国人は8時からであった。さらに凶作の年には同市住民に有利になるようにさまざまな制限が設けられた (B. Roeck, *op. cit.*, S.154-155)。  
(31) 1622年の物価高騰期にアウクスブルク市へ穀物を供給した地域については、B・レックの図1 (B. Roeck, *op. cit.*, S.85のKarte1) の網掛け部分を参照。

### 第5章 「医師フィリップ2世の収入について」

- (32) 彼は1570年に生まれ、1635年に死亡した (*ASL*, S.888)。  
(33) 彼は1611年に弟のサミュエルと共同で、アウクスブルク最大のジェノア向け亚麻布輸出商会を創設した。その後、彼らの他の兄弟イエレミアスとダニエルも商会に参加し、少なくとも1630年代まで商会は存続した (*ASL*, S.518)。  
(34) 彼は1632-33年までアウクスブルク市の市長 (都市行政官) を勤め、1633年に死亡した (*ASL*, S.967)。  
(35) この年の市長はベルンハルト・レーリンガー (Bernhart Rehlinger) である。彼の在任期間は、1624-32年そして1635-45年であった (*ASL*, S.967)。  
(36) 彼は同『日記』の第6章「アウクスブルク市内外での政治経済状況」の中で、施療院ないし「巡礼者のための宿」の施工主として、その建設経費4,627グルデンを出資した人物は、同名の彼の父親 [1530-1584年(†)] である。また父親は1580年に聖アンナ教会講堂の創設にも参加した。マルティン2世は1566年に誕生し、イタリアのルッカで商人としての教育を受けた。彼は1625年に死亡した (*ASL*, S.947)。

- (37) 同家は30年戦争の初期に急激に財産を減少させた。またスウェーデン軍がアウクスブルク市を占領した1632年に都市貴族に叙せられたが、1635年に皇帝フェルディナント2世の命によって、その叙任は取り消された (ASL., S.694)。
- (38) 注 (33) を参照。
- (39) curia という語句は本『日記』には3回出てくる。筆者はそれぞれ異なる意味で使用していた。まず「司教の館」の意味で、次に「スウェーデン軍の支配の下で機能していたカトリック系の都市政府」、最後に「都市参事会」の意味である。〔原注 66〕 (S.201)。

#### 第6章 「アウクスブルク市内外での政治経済状況」

- (40) アウクスブルク市では1451年ないし1491年に布告した街路での乞食行為を禁止する法規が目に見える成果を上げなかったため、市参事会は金の分配をめぐる制度を確立する必要に迫られていた (ASL., S.230)。
- (41) これは新約聖書のマタイ伝25章「すべての民族を裁く」の一節である。たとえば、『新約聖書 共同良訳』（講談社学術文庫、1981年）、86ページを参照。
- (42) アウクスブルク市では1541年に乞食行為は禁止された。新たに設置された施物担当者が同市の1/3の地区で食料を配っていた。さらに凶作の年には、施物は個人的な給金 (Spende) で賄われた (ASL., S.230)。
- (43) 建築費の他に、その維持費としては、B・レックによると、同年4月8日の約200人の孤児に対する年間予算額は3237グルデンであった (B. Roeck, *op. cit.*, S.24)。
- (44) 注 (36) を参照。
- (45) 本文第5章「医師フィリップ2世の医師としての収入」の (B) 「施療院での医療勤務と解雇通告そして復職」の1616年の項 (『本誌』第25号176ページ) を参照。
- (46) 本文第5章「医師フィリップ2世の医師としての収入」の (B) 「施療院での医療勤務と解雇通告そして復職」の1630年の項 (『本誌』第25号176-177ページ) を参照。
- (47) 本文第5章「医師フィリップ2世の医師としての収入」の (B) 「施療院での医療勤務と解雇通告そして復職」の1632年の項 (『本誌』第25号177ページ) を参照。なお、施物を取得できる条件は、1541年の「施物規定 (Almosenordnung)」によると、その対象者に少なくとも2人の子どもがいることである (B. Roeck, *op. cit.*, S.104)。
- (48) 古典として、C・V・ウェッジウッド著、瀬原義生訳『ドイツ三十年戦争』（刀水書房、2003年）を、また M. Häberlein, Augsburg im Dreißigjährigen, in; ASL., S.83-88 の2冊を挙げておく。
- (49) 30年戦争期におけるフェルディナント2世の対応については、成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界歴史大系—ドイツ史1』山川出版社、1997年、第11章 (469-507ページ) を参照。
- (50) M・ヘーバーラインによると、1619年末に、歩兵1,131人を、また騎兵110人を募集していた (ASL., S.83)。
- (51) 彼は1592年11月12日に生まれ、1644年10月12日に死亡した。彼はインゴルシュタット市とペルギア市 (Perugia) で勉強し、1617年のスペイン軍役に参加、1618年以降はカトリック連合 (リーグ: Liga) のために、皇帝軍の将軍として戦う。スウェーデン軍が退却した後、彼はアウクスブルク市の市長 (都市行政官) となるが、厳格な統治を強いたために、皇帝軍の間でも不満や反発が生じた。そのため皇帝は1636年4月30日に、彼をアウクスブルク市の司令官に降格させた (ASL., S.422)。
- (52) この記載はエズラ記にはなく、旧約聖書のヘブライ人の大預言者たるエゼキエル (Hesekiel) からのものである。鷲 (Adler) と獅子 (Lawe) はおそらく皇帝と北欧の獅子グスタフ2世・アドルフの暗示である。〔原注 74〕 (S.205)。
- (53) 押し寄せるスウェーデン軍からアウクスブルク市をどのようにして防衛するかが問題になった時、フィリップ2世〔日記の執筆者〕は、カトリック派で占める市参事会との協力関

- 係を拒否するなど、プロテスタント派の中でも、急進的な集団の指導者的存在であった。〔原注75〕(S.206)。
- (54) ここに記されているB・アルトリンガーなる人物は、前掲書(ウエッジウッド著)の中に描かれているJ・アルトリンガーと状況的に極めて類似した立場にいる(たとえば、前掲書の376-377ページなど)また1年のズレはあるものの、アルザス地方の状況なども356-357ページと類似している。
- (55) 彼はホーエンローエランゲンブルク(Hohenlohe-Langenburg)伯フリードリヒ・ゲオルク(1569-1645年)である。彼は1631年以降、スウェーデン軍に従軍し、シュワーベン管区の総名代(Generalstatthalter)であった。なお、顧問官にして主馬頭は、スウェーデンの宰相アレックス・オクセンシエルナ(Aex Oxenstirn)の息子ベネデクト・オクセンシエルナであった。〔原注76〕(S.206)。
- (56) 彼は皇帝フェルディナント2世の息子で、後の皇帝フェルディナント3世である。彼は1621年からハンガリー国王であった〔原注77〕(S.206)。
- (57) M・ヘーバーラインによると、1634年9月のネルトリンゲンの戦いでスウェーデン軍が敗北すると、皇帝軍はアウクスブルク市を攻囲した。これに対してプロテスタント派が多数を占める市参事会は包囲攻撃〔特に、兵糧攻め〕にできるだけ長く抵抗することを決定した。このために、アウクスブルク住民にとって30年戦争期の中で最悪の時期が始まる。すなわち、1634年から35年の冬にかけて、飢えに苦しめられた住民は犬、猫、鼠そして動物の皮や死体の一部ささ食べたと言われていた(ASL, S.86)。
- (58) 戦争勃発前に4万5,000人を数えた住民数は、今や1万6,432人にまで激減した。実に $\frac{1}{3}$ の人口がベストや飢えや戦争で消滅した。ただし、この現象が市内のすべての街区で等しく生じたのではなく、「貧しい」外郭市区で、たとえば、ヤーコフ外郭市区(Jakobenvorstadt)やフラウエン外郭市区(Frauenvorstadt)で著しかった。しかし、1635年から1648年までの市参事会はカトリック派が独占し、戦争以前とは異なり、夥しい数の、しかも貧しい移民をも市民として受け入れた。その多くはアウクスブルク市周辺の農村出身の独身女性であった。この時期に3,500人増加した結果、住民数は約2万人にまで回復した。この場合、市参事会が改めてカトリック政策を遂し、またアウクスブルク市周辺部は著しくカトリック教が浸透していたために、1645年までに住民総数に占めるカトリック教徒の割合は30%以上も増加した。そして1635年から45年までの10年間で、カトリック教徒は $\frac{1}{3}$ を占めたのに対して、プロテスタントは僅かに15%を占めたにすぎなかった(ASL, S.87)。
- (59) レーハーベアムの答えとは「私の父親はあなた方に負担(Joch)を重く課した。私もあなた方に負担をさらに多く課そうと思う。私の父親はあなた方を鞭で懲罰した。私もあなた方を棘のある鞭で懲罰しようと思う」というものである〔原注84〕(S.207)。
- (60) D・ヴェーバーとはM・フィリップ(Philipp)・ヴェーバーのことである。彼は1634年以降フランチェスコ会派の牧師であった。またイエニシュとはM・パウロ(Paulus)・イエニシュのことである。彼は1633年以降同会派の副牧師であった。この2人はアウクスブルク市の唯一の福音主義派の聖職者であった。彼らはさしあたり聖アンナ神学校の庭の広場での礼拝と福音主義派の住民のお世話だけが許されていた。このような状態は1649年まで続いた。1649年の聖霊降臨祭に、福音主義派の各団体(Gemeinde)は、聖十字架教会を除いて、彼らの従来教会で自由に礼拝を行うことが許された〔原注84〕(S.207-208)。
- (61) 本文第5章「医師フィリップ2世の医師としての収入」の(F)「カトリック教徒の支配下での収入」の1635年の項(『本誌』第25号179-180ページ)を参照。
- (62) たとえば、パンに対する消費税については、B. Roeck, *op. cit.*, S.124-127を参照。
- (63) 同家は16世紀後半から17世紀初期まで遠隔地商業(香辛料、木綿、絹、砂糖)と都市政策の分野で大きな役割を果たした。同家はアウクスブルク市のプロテスタントの指導的な代表者で、スウェーデン軍の別働隊として活躍する。その功に報いる形で、スウェーデン軍

の占領期(1632 - 35年)に都市貴族に叙され、またヤーコブは市長(都市行政官)になると共に、スウェーデン国王からはバイエルン官房の所領〔ランツベルク近郊のドンネルスベルク(Donnnersberg bei Landsberg)に存在〕を与えられた。ただし、1635年以降に市の役職と所領が取り上げられ、彼の商会は破産し、彼自身も逮捕され、貧困状態の中で死亡した(ASL, S.849-850)。

(64) 同家は16世紀から17世紀かけて、政治的にもまた経済的にも卓越した大商人であった。オットー3世は1618年にクラフター一家出身の彼の妻の遺産のおかげで、アウクスブルク市で一番裕福な市民となった。ラウギンガー家は30年戦争後、かつての経済的な立場を失う(ASL, S.601-602)。

(65) 注(58)を参照。

(66) 中部ヨーロッパの大部分が危機に陥り、魔女狩りの大きなうねりに見舞われた1620年代に、ここアウクスブルク市ではただ1例の処刑が行われたにすぎない。それは、1625年フッケライに住んでいたドロテア・ブラウン(Dorothea Baum)が自分の娘によって訴えられ、斬首の刑に処せられた事例である。17世紀の後半、魔女を口実に逮捕や処刑が多発したにもかかわらず、ここ帝国都市は司教領とは幾分異なり、魔女狩りが激しく求められた地域ではなかった(ASL, S.84)。

#### 第7章 「フィリップ2世の妻の親族の誕生年と死亡年について」

(67) このエーインガーなる人物はM. Christoph Ehingerであり、1617年から聖ウルリッヒ教会の牧師である〔原注103〕(S.212)。

#### 第8章 「フィリップ2世の子どもたちへの教育について」

(68) ドイツ中近世の教育については、浅野啓子・佐久間弘展編著『教育の社会史—ヨーロッパ中・近世』(知泉書館、2006年)を、特に佐久間弘展「14～16世紀ドイツ市民の初等教育」(101-124ページ)を、またNotker Hammerstein (Hg.): Handbuch der deutschen Bildungsgeschichte, Bd. I 15. bis 17. Jahrhundert (Von der Renaissance und der Reformation bis zum End der Glaubenskämpfe), München 1996.を参照。

(69) 彼は1559年トロストベルク(Trostberg)で生まれ、1590年にアウクスブルクの市民権を獲得する。さらに1625年11月3日にアウクスブルク市で死亡する。彼は教会合唱隊の指揮者にして作曲家そして音楽教師であった(ASL, S.458)。

(70) 彼はアウクスブルク市の司書(Bibliothecarius)であり、また1617年からは聖アンナ教会の指導者(Rector)でもあった〔原注105〕(S.213)。

(71) 〔原注107〕(S.215)を参照。なお、成瀬治氏はこの勅令は、カトリック教会組織の立て直しというよりも、ハプスブルク家門勢力の拡張を意図したものであり、さらには「皇帝絶対主義」への傾向を示すものであった、と記している(成瀬治・山田欣吾・木村靖二編『世界歴史大系—ドイツ史1』山川出版社、1997年、488ページおよび注16(505-506ページ)。

(72) 〔原注108〕(S.215)を参照。

(73) 同国王がアウクスブルク市に滞在したのは同年の4月24～26日と5月27日～6月2日の2回である。同国王はアウクスブルク市に忠誠を宣誓させ、同時にカトリック派の市参事会員と市当局の役人をプロテスタント派のそれに入れ替えさせた。そのため、新たに18家族を都市貴族に叙した(ASL, S.459)。

#### 第9章 長男の手による補遺(1535 - 1661年)

(74) lidelなる語彙は果酒(Obstwein)、芳香ブドウ酒(Gewärzwein)を意味するlit(des)である(Matthias Lexers, Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch, Stuttgart 1979, S.128)。

(75) procurirenは現代ドイツ語ではverschaffenである〔原注115〕(S.219)。

(76) erkusetなる語彙は「神による人間に使命/運命などを与えるための神の選抜」を意味す

る erkesen [erwählen] である (August Lubben, Mittelniederdeutsches Handwörterbuch, Darmstadt 1979, S.103)。

## 索引

\*索引中の①～③は、本訳の本誌掲載分冊番号—①—第24号(1)、②—第25号(2)、③—本号(3・完)を、後ろの数字はページ数を表す。

\*各索引とも50音順。

## 人名索引

\*索引項目は、家族名で引けるようにし、家族ごとにまとめた。また出身都市のうち、アウクスブルク市はA市、ネルトリンゲン市はN市と略記した。

### ◆ア行

- アイゼリン、フィリップ (Eiselin, Philipp) [書き方の教師] ③96  
アイフラー、アンドレアス (Eyfler, Andreas) [父親の初婚の子、ヤコビーナの  
後夫] ①123  
アドルフ、グスタフ2世 (Adolf, Gustav II.) [スウェーデン国王] ②189、  
③95  
アプフェルフエルダー、フィリップ (Apfelvelder, Philipp) [A市の公証人、妹  
の後夫] ①125  
アルトリンガー、ベルンハルト (Altringer, Bernhart) [皇帝軍の将校]  
②190  
イエニシユ、M・P・(Jenisch) [A市のフランチェスコ会派の副牧師] ②192  
イエニシユ、ポール (Jenisch, Paul) [N市の医師] ③100 - 101  
イルスング (Ilsung) [A市の枢密顧問官] ②171  
ヴァイス、ヨハネス (Weiss, Johanenes) [父親の初婚の子、ヤコビーナの  
前夫] ①123  
ヴァルター、フリードリヒ (Walter, Friedrich) [商人] ③102  
ヴィースト、クリストフ (Wiest, Christoph) [ドイツ語学校の教師] ③94  
ヴィルヘルム・フォン・ノイブルク、ヴォルフ (Willhelm von Neuburg, Wolf)  
[皇帝派、宮廷伯] ②183  
ヴィンターリン、フィリピーナ (Winterin, Philippina) [針仕事の指導者]  
③90 - 91  
ヴェクセラー、ヨハン・ジークムント (Wechseler, Johann Sigmundt) [N市の  
薬剤師、義兄弟] ③101、103 - 104  
その子ども  
—ハンス・ヤーコブ (Hans Jacob) ③104

- ウーバー、D・(Weber) [A市のフランチェスコ会派の牧師] ② 192
- ヴェルザー、バーバラ (Welser, Barbara) [A市のカタリーナ女子修道院長]  
② 175
- ヴェルザー、フリーデリヒ (Welser, Friderich) [A市の歩兵部隊長] ② 184
- ヴォルフエン・ツウ・アイスネン、ダビット (Wolfen zu Eisnen, David) [ヴェ  
ネツィア市の領主] ③ 94
- ウルシュテット、ハンス (Ulstett, Hans) [A市の施療院の役職者] ② 176
- エーインガー、M・エリアス (Ehinger, M. Elias) [A市の教師兼司書] ③ 90
- エーインガー、M・クリストフ (Ehinger, M. Christoph) [聖ウルリヒ教会の牧  
師] ③ 87
- エスターライヒャー、ダニエル (Osterreicher, Daniel) [施療院の古参役職者]  
② 179
- エッガー、アレクシウス (Egger, Alexius) [商人] ③ 102
- エックハルト、バルヘルム (Ekhart, Barhelm) [個人的な家庭教師] ③ 92
- エッティンガー2世、カスパール (Oettinger der Jung, Caspar) [父親の初婚の  
子、アンナの前夫] ① 121
- エブリング、C・シビッラ (Ebling, C. Sybilla) [私の子どもたちの洗礼立会人  
(代母)] ① 130 - 139
- オクセンシエルナ、アレックス (Oxxenstirun, Alex) [スウェーデンの宰相]  
② 190
- オリヴィエ、レアンドロ・ジオ・バティスタ (Olivieri, Leandro Gio Batista)  
[ヴェローナ市の都市貴族] ③ 99

#### ◆カ行

- ガイガー (Geiger) [第6学年担当教師] ③ 95
- カッツェンシュタイナー、エリザベート (Katzensteinerin, Elizabet) [聖カタリ  
ーナ女子修道院尼僧] ② 175
- ガルトナー、オイフロジーナ (Gartner, Eufrosina) [父親の後妻] ① 123
- カルトシュミット2世、ジェロニムス (Kaltschmid der Jung, Jeronymus) [父親  
の初婚の子ども、レギーナの夫] ① 122
- グムペルスハイマー、アーダム (Gumpelsheimer, Adam) [ラテン語学校の音楽  
教師] ③ 88
- グムペルスハイマー、マルティン (Gumpelsheimer, Martin) [ラテン語学校の  
第2学年、第7学年担当教員、音楽教師] ③ 88、90
- グラス、ヨハネス・ベルンハルト (Grass, Johannes Bernhart) [個人的な家庭教  
師] ③ 90
- グリンメルスハウゼン (Grimmelshausen) ① 117
- ゲオルク、ハンス (Georg, Hans) [ヴェネツィア都市貴族] ③ 94
- ゲーベリン家 (die Gaebelin) [義兄弟ハイラートの妻の実家] ③ 86、88
- コベルト、N (Kobelt) [N市の雄牛亭の経営者] ③ 100 - 101

◆サ 行

- ザーラー、ヨハン (Saler, Johann) [個人経営の私塾教師、家庭教師]  
③ 91 - 95
- ショーラー、ハンス・バプティスタ (Schorer, Hans Babtista) [商人]  
③ 102
- ジークハルト、ハンス・ゲオルク (Sighart, Hans Georg) [A市の都市貴族、家主] ② 163
- ジッテハオザー、N (Sittihauer, N.) [A市の歩兵部隊長] ② 184
- シュスター、レオンハルト (Schuster, Leonhart) [書き方の教師] ③ 91
- シュタムラー (Stamler) [A市の都市貴族、投資家、1570年以降ヘーヒシュテッター家と共同経営]  
—レオンハルト (Leonhart) [私の母方の祖父] ① 124  
その子ども  
—ヘレーナ (Helena) [私の母、私の妻の洗礼立会人 (代母)]  
① 124、126、128、134  
—ジークムント (Sigmundt) [長男の嫁の父親] ③ 98  
その子ども  
—エリザベート (Elisabethe) [長男の嫁] ③ 98
- シュティーレン、ブレイガー (Stielen, Breuger) [バプテスマ聖歌隊の指揮者]  
① 126
- シュテングリン、ヤーコブ (Stenglin, Jacob) [A市の商人、破産者] ② 193
- シュテングェルン、アントーニオ (Stengeln, Anthonio) [教師] ③ 95
- シュトラオベ・フォン・ライプツヒ (Straube von Leipiz) [父親の妻 (初婚)の実家]  
—ルーカス (Lucas) [父親の舅、ニュルンベルク市民] ① 121  
—ドロテア (Dorothea) [父親の初婚の妻：8人の子どもを儲ける]  
① 121
- シュミット (Schmidt) [私の妻の実家]  
—老シックス (Six der altest) [妻方の曾祖父] ③ 85  
その子どもたち [舅の兄弟姉妹]  
—シックス (Six) [伯父] ③ 85  
—アブラハム (Abraham) [伯父] ③ 85  
—クリストフ (Christoff) [私の舅] ① 125、128、② 164、③ 85  
その子ども  
—アンナ・マリア (Anna Maria) [私の妻] ① 128 - 137、  
② 164  
—エリザベート (Elisabethe) [叔母] ③ 85  
—カタリーナ (Katharina) [叔母] ③ 85  
—マリア・イエラミアス (Maria Jeramias) [私の九男の洗礼立会人] ① 136

- シュミット、マテオ (Schmidt, Mattheo) [ヴェネツィア都市貴族] ③92 - 93、99、101
- シュメルツァー、カタリーナ (Schmeltzer, Katarina) [私の長男の洗礼立会人 (代母)] ①129
- シュルツァー、ヴォルフガング (Sultzer, Wolfgang) [A市都市貴族、私の長男の洗礼立会人 (代父)] ①129
- ゾーベル、マルティン (Zobel, Martin) [A市都市貴族、私の患者] ②178、181

#### ◆タ行

- ツィークラー、アンナ (Ziegler, Anna) [聖カタリーナ女子修道院長] ②175
- ツェラー、ゲオルク (Zeller, Georg) [商人] ③102
- ティリー将軍 (Tilly) [皇帝軍の将軍] ②189

#### ◆ナ行

- ナターニン、アンナ・マリア・ジークムント (Natanin, Frau Anna Maria Sigmundt) [ジークムントの代母] ③101
- ニッゲル、アブラハム (Niggel, Abraham) [書き方と算数の教師] ③91

#### ◆ハ行

- バイエルン大公 (Fürst Bayern) [皇帝軍] ②170
- アルベルト (Albert) [カトリック陣営] ②183
- マクシミリアン1世 (Maximilian I) [カトリック陣営の指導者] ②183
- ハイポルト、N (Heippolt) [第3学年担当教師] ③90
- ハイラート (Heyrat) [義兄弟]
- アンナ・ゲーベレーリン [ハイラートの妻] ③86
- その子ども [甥、姪]
- アンナ・マリア (Anna Maria) [長女] ③86
- スザンナ (Susanna) [二女] ③87
- イエレミアス (Jeremias) [三女] ③87
- トビアス (Tobias) [六男] ③87
- ハンス・クリストフ (Hans Cristoff) [長男／二男] ③86
- ハンス・ジョルク (Hans Jerg) [五男] ③87
- マテウス (Mattheus) [四男] ③87
- マールクアルト (Marquart) [七男] ③87
- マルクス (Marx) [三男] ③86
- その子ども (4人)
- ヨーハン・バプティスタ (Johann Babtista) [四女] ③87

- バイール、イエーネス・ジェロニムス (Bayr. Jenes Jeronymus) [第2学年担当教師] ③90
- ハインツェルマン、N. (Heintzelmann) [ドイツ語学校の教師] ③88 - 89、93
- ハインツェルマン、ヨハン (Johann) [書き方の教師] ③92
- ハウフ、ゲオルク (Hauf, Georg) [教区牧師] ③100
- ハーゲル、H. (Haggel) [A市の薬剤師、家主] ②163
- バーバラ (Frau Barbara) [元A市長の未亡人] ③104
- ハプスブルク家 (Die Habsburg) [皇帝] ②172
- ーレオポルト大公 (Herzog Leopold) [オーストリア大公] ②184
- バーレル (Baler) [A市の都市貴族]
- ー老バーレル (der Alter) [私の在宅患者] ②178
- その子ども
- ーレオンハルト (Leonhart) [老バーレルの息子] ②178
- ハンガリー国王フェルデナント3世 (König von Ungarn) ②190
- ビーラー (Bihler) [A市の書記、法学博士] ②171
- ビーラー、ハンス・ジヨルク (Biler, Hans Jerg) [施療院の役職者] ②176
- フェルデナント2世 (Ferdinand II) [皇帝] ②183 - 184、③94
- フェルデナント、ギュンター (Ferdinandt, Guenter) [A市の騎兵隊長]
- ②184
- フッガー (Fugger) [A市の都市貴族、伯爵]
- ーオットハイน์リヒ (Ottheinrih) [皇帝軍の将校、A市の都市行政官]
- ②184
- ー老ハンス (der alter Hans) [都市行政官 (市長)、私の在宅患者]
- ②171、178 - 179、183
- ーヒエロニムス (Hieronymus) [伯爵、私の在宅患者] ②179
- ーマクシミリアン (Maximilian) [伯爵、私の在宅患者] ②179
- ブッヘリン婦人 (Frau Bucherin) [針仕事の指導者] ③89 - 91
- プフィスター、M・ダーヴィド (Pfister, M. David) [A市の聖十字架教区の牧師]
- ①127
- プフリーガー、ハンス (Pflieger, Hans) [私の妻の洗礼立会人 (代母)]
- ①128
- ブラッシュ、ダニエル (Brasch, Daniel) [第4、5学年担当教師] ③89、91
- フリードリヒ (Friderich) [第6学年担当教師] ③92
- ベイル、ジヨルク・ヤーコプ (Beirl, Jeorg Jacob) [A市の都市貴族、薬局の所有者 (家主)] ②164
- ヘーシェル、ダーヴィト (Heschel, David) [A市の都市貴族、教師] ①127
- ヘーシェル、ダニエル (Heschel, Daniel) [第8学年担当教師] ③90、95
- ベデッロー、マテオ・モリナーリ (Bedello, Mateo Molinari) [パドヴァ市の都市貴族] ③98

ヘーヒシュテッター (Hoechstetter) [A市の商人および医師]

—アンブोजウス1世 (Ambrosius I.) [同家の中興の祖、私の曾祖父]

① 108 - 111、120 - 121

その子ども

—アンブोजウス2世 (Ambrosius II.) [同家を破産させ、逮捕]

① 111

—ヨーゼフ (Joseph) [同家を破産させ、逮捕] ① 111

—ヨアヒム1世 (Joachim I.) [私の祖父、新たな独立家系の創設者]

① 112 - 113、120 - 121、126

その子ども

—アンブロジーナ (Ambrosina) [私の叔母 (二女)] ① 120

—イエレミアス (Jeremias) [私の叔母 (長女)] ① 120

—ダニエル (Daniel) [私の叔父] ① 120

—ヨアヒム2世 (Joachim II.) [私の父親] ① 120 - 125、128、

その子ども

— [初婚の子ども] その妻：ドロテア ① 121

・アンナ (Anna) [長女] ① 121 - 122

・フィリピーナ (Philippina) [五女] ① 122

・マグダレーナ (Magdalena) [三女] ① 122

・マリア (Maria) [二女] ① 122

・レギーナ (Regina) [四女] ① 122

・ヨアヒム3世 (Joachim III.) [長男] ① 122

・ヤコビーナ (Jacobina) [六女] ① 123

— [再婚の子ども] その妻：オイフロジーナ ① 123

・スザンナ (Susanna) [長女] ① 124

・ダーヴィト (David) [長男] ① 124

— [再々婚の子ども] その妻：ヘレーナ ① 124

・オイフロジーナ (Eufrosina) [長女] ① 124、126 - 127

・パウロ (Paulus) [二男] ① 125

・フィリップ (Philipp) [長男] ① 124 - 125

・フィリップ2世 (Philipp II.) [三男・本人：1579 - 1635] ① 125 - 137、② 163 - 164、175 - 182、189、191 - 192、③ 88 - 97

その子ども—妻：アンナ・マリア ① 128、③ 97

・アンナ・マリア (Anna Maria) [長女] ① 129、③ 88 - 91、97

・イエレミアス (Jeremiasu) [七男] ① 133

・オイフロジーナ (Euphrosina) [五女] ① 135

・ジヨルク・ウルリッヒ (Jerg Ulrich) [五男]

- ① 132
- ・スザンナ (Susana) [三女]
  - ① 130 - 131, ③ 89 - 92, 97
- ・トビアス (Tobias) [四男] ① 131 - 132
- ・ハンス・カール (Hans Carl) [八男]
  - ① 133 - 134, ③ 92 - 99, 101, 104
- ・ハンス・ヨアヒム (Hans Joahim) [二男]
  - ① 130
- ・フィリピーナ (Philippina) [二女] ① 130
- ・ヘレーナ (Helena) [四女]
  - ① 134, ③ 92 - 94, 97, 101, 103
  - その子ども—その夫：ヨハン・ジークムント
    - ③ 101, 103 - 4人 ③ 103
  - オイフロジーナ・ヘレーナ (Euph. Helena)
  - ヨハン・ジークムント (Joh. Sigmundt)
  - アンナ・ドロテーア (Anna Dorothea)
  - ステファヌス (Stephanus)
- ・ヨハネス・クリストフォルス
  - (Johannes Christophorus) [九男] ① 136
- ・ヨハネス・バプティスタ (Johannes Baptista)
  - [十男] ① 137
- ・ヨハネス・マテウス (Johannes (=Hans) Mattheus)
  - [長男] ① 129, ③ 88 - 101
  - その子ども—妻：エリザベート ③ 100
  - アンナ・マリア (Anna Maria) ③ 100 - 101
  - フィリップ・ジークムント (Philipp Sigmundt) ③ 101
- ・ヨハン・バピスト (Johann Bapista) [六男]
  - ① 132 - 133
- ・ヨハン・フィリップ (Johann Philipp) [三男]
  - ① 131, ③ 89 - 101, 103
  - その子ども—妻：アンナ・オイフロジーナ (Anna Euphrosina) ③ 99, 103
  - 9人 ③ 103
  - アンナ・オイフロジーナ (Anna Euphrosina)
  - アンナ・オイフロジーナ (Anna Euphrosina)
  - アンナ・マリア (Anna Maria)
  - ゲオルク・フリードリヒ (Georg Friderich)
  - フィリップ・ルーカス (Philip Lucass)

- マリア・エリザベート (Maria Elisabeth)
- マリア・ザローメ (Maria Salome)
- ヨハネス・フィリップ (Johannes Philipp)
- ヨハン・マテウス (Johann Mattheus)
- ・マリア (Maria) [二女] ① 125
- ヨハン・フィリップ2世 (Johann Philipp II.) [甥、ローテンブルク市の  
医師] ① 119
- ハンス・バティスタ (Hans Battista) [私の洗礼立会人] ① 125
- ベラー、フリードリヒ (Behler, Fridrich) [施療院の役職者、教皇主義者]  
② 176、182
- ペリケオ、アーノルド (Pelliceo, Arnold) [第4学年担当教師] ③ 91
- ベルクミュラー、ヤーコブ (Bergmuller, Jacob) [巡礼の宿の新任医師]  
② 182
- ヘルマン、モイゼス (Herman, Moyses) [第6学年担当教師] ③ 90
- ホーザー (Hoser) [A市の都市貴族、プロテスタント]
- サミュエル (Samuel) [施療院の古参役職者] ② 179
- ヤーコブ (Jacob) [施療院の役職者] ② 176、182
- ヨハネス・ヤーコブ (Johanes, Jacob) [A市の都市貴族] ② 177
- ボスケッティ、ピアージュ (Boscheti, Biagio) [ヴェローナ市の都市貴族]  
③ 99

#### ◆マ 行

- マイスター (Mayster) [聖カタリーナ女子修道院尼僧] ② 175
- マイリン、カタリーネン (Mayrin, Catharinen) [舅の母親] ③ 85
- マツシュペルガー (Matsperger) [N市の都市貴族、医師] ③ 100
- アンナ・オイフロジーナ (Anna Euphrosina) [私の三男の妻] ③ 99、  
103
- ルーカエ (Lucae) [三男の妻の父親] ③ 99
- マヨリ (Mayori, M. Jos.) [聖アンナ教会のラテン語学校の教師] ① 127
- ミュラー、レオンハルト (Miller, Leonhart) [父親の洗礼立会人 (代父)]  
① 120
- ミュラー、ミヒヤエル (Miller, Michahel) [ジークムントの代父] ③ 101
- ミンデラー、ライムンド (Minderer, Raimund) [私の友人、A市の医師]  
① 119
- ムスウィクス・アウス・デム・ヴァインケル (Mussuicus aus dem Winkel) [A市  
の統治者] ② 190
- メルキオール、H. (Melchior) [商人] ③ 101

#### ◆ラ 行

- ランゲルマンテル、アンナ (Langenmantel, Anna) [私の祖母] ① 120、

- 126、132  
 リヒター、ヨハン・アンドレアス (Richter, Johann Andreas) [ウィーン市の都市貴族] ③ 104  
 リューリヒ、M・ヤーコプ (Ruelich, M. Jacob) [A市の教区牧師] ③ 86 - 87  
 レーハベアム (Rhehabeam) [カトリック派の指導者] ② 192  
 レーメン、D. (Remen) [教師] ③ 91  
 レーム (Rhem)  
 ールードヴィヒ (Luodvocus) [A市の市参事会員 (?)] ② 177  
 ーレーミン、マルクス (Rhemin, Marx) [私の洗礼立会人 (代母)] ① 125  
 レムボルト、ヨハン・ヤーコプ (Remboldt, Johann Jakob) [A市の都市行政官 (市長)] ② 171  
 レーリンガー (Rehlinger) [A市の商人、都市貴族]  
 ーアンナ (Anna) [私の祖母] ① 120  
 ーヤーコプ (Jacob) [曾祖父] ① 120  
 ーベルンハルト (Bernhart) [A市の市長] ② 178  
 ルムラー、ヨハン・ウルリヒ (Rumler, Joh. Ulrich) [A市の都市貴族、医師、A医科大学の学部長] ① 128  
 ローヴォルフ2世、マテウス (Rauwolf der Jung, Mattheus) [私の姉の夫、私の十男の洗礼立会人 (代父)] ① 124、126、137  
 ローレンツェン家 (die Lorentzen) [私の三男の学友] ③ 93

## 事項索引

### ◆ア 行

#### アウクスブルク市

- ー居酒屋 (Schenke) ② 170  
 ーヴェルタツハブルカー市門 (Wertachbrugger Tor) ② 193  
 ー関税 (Zoll) ② 193  
 ー教会 (Kirch) 他  
 ー孤児院 (Waisenhaus) ② 176、179、181  
 ー聖アンナ教会 (St. Anna) ① 126 - 127、129 - 137、③ 92、94、96、98、100  
 ー聖ウルリヒ教会 (St. Ulrich) ③ 86 - 87  
 ー聖カタリーナ教会 (St. katharina) ② 175  
 ー聖十字架教会 (St. Kreuz) ② 183、③ 102  
 ー聖シュテファン教会 (St. stephan) [墓地] ① 125、127、129、131、③ 86 - 87、100

- 聖母教会 [大聖堂] ② 183
- ドミニコ会派の礼拝堂 (Die Cappell zu den Dominik) ① 121
- プファフエン教会 (Pffaffen) ② 182
- 施療院 [貧者たちの病院] (Almosenhaus) ② 176 - 177、179、181、192
- 絞首台 (Galgen) ② 187
- 公職追放 (die Ausstoßung aus einem Amt) ② 189
- 指揮官 [統治者] (commandans) ② 190
- 市参事会 (Curia/Rat/Magistrate) ② 177、180 - 185、189、191、193 - 195、③ 102
- 市参事会員 (Senatus/Ratherr) ② 183、189 - 190、
- 市政府 (Obrigkeit) ② 172
- 市門の鍵 (Schlüssel des Stadtstor) ② 195
- 自由都市 (Libera Civitas) ② 185、188
- 商人の寄合部屋 [会館] (Kauffleutestuben) ① 128、③ 86
- 消費税 [間接税] (Ungeld) ② 193
- 都市貴族寄合い選挙 [選出] (Stubenwahl der herrlichen Patricii) ③ 98
- ペルラッハ塔 (Perlachturm) ② 183、194
- 隷属都市 (Serva Civitas) ② 188

#### 医学関係

- アウクスブルク医科大 (die medizinische hochschule) ① 119、128
- 学部長 (Dekan) ① 119、128、
- 医学著作 (全3巻) と医学研究論文 ① 118 - 119、② 177 - 178
- 医師 (Arzt) ① 119 - 120、127 - 128、③ 96、99 - 101
- 「巡礼者の宿」の医師 ② 176、182
- ヒポクラテス学派の医師 (hipocratius medicus) ② 177
- 医師登録台帳 (Maticula Medecorum) ① 127
- 医療勤務と解雇 (die 較ztliche Dienst u. die Enturlaubung) ② 175 - 176、192
- 炎症熱 (hizig Fieber) ① 134
- 黄疸 (Gelbsucht) ① 132
- 主治医としての報酬 (Honorar des Hausarzts) ② 176 - 179
- ペスト (pestis) ③ 93 - 96
- 麻疹 (kindsblatter) ③ 87
- 薬剤師 (Apoth eker) ③ 101、103
- リュウマチ痛 (Reissen) ③ 92

#### ◆カ行

##### 貨幣 (Geld)

- グルデン貨幣 (Gulden) ① 109 - 111、114、② 163 - 171、173 - 174、  
176 - 179、181、194 - 195、③ 88、91 - 92、94 - 95
- クロイツ貨幣 (Kreuz) ② 163 - 171、173 - 176、③ 91
- ターラー貨幣 (Taler) [約3マルク銀貨に相当] ② 172 - 174、177 -  
179
- バッツェン貨幣 [4クロイツ貨幣に相当] (Batzen) ② 165、168 - 171、  
173
- ペーニツヒ貨幣 (Pfennig) ② 174、194 - 195
- ライヒス・ターラー貨幣 (Reichstaler) ③ 93

## 教育 (Erziehung)

- 医学博士号 (学位) 取得 (Erwerbung des Dr. med. Titels)
  - フィリップ2世 [バーゼル大学] ① 127
  - ヨハン・フィリップ [パドヴァ大学] ③ 98
- 書き方 (Schreiben) ③ 89 - 96
- 学校閉鎖 [プロテスタント派の] (die Sperre der Schule) ③ 94
- 家庭教師 (privat paedagogus/praeceptor domesticus/privat praeceptor)
  - ③ 88 - 90、92 - 95
- 家庭教師への謝金 [報酬] (Belohung) ③ 92、94 - 96
- 裁縫学校 [針仕事] (Nehet) ③ 89 - 92
- 算数 (Rechnen) ③ 91、96
- 時間外学習 (nach der Stundt) ③ 90
- 上級学校 (die hoche Schule) ③ 92、96
- 初等科学年
  - 第1学年 (die erste Schule) ③ 88、92
  - 第2学年 (die andere Schule) ③ 88、90、92
  - 第3学年 (die dritte Schule/Class) ③ 89、90、93
  - 第4学年 (die vierte Class) ③ 89、91、94
  - 第5学年 (die finfte Class) ③ 89、91
  - 第6学年 (die 6 Schule) ③ 90、92、95
  - 第7学年 (die 7 Schule) ③ 90、93
  - 第8学年 (die achte Schule) ③ 90
- ドイツ語学校/教師 (die teutschen Schule/-Meister) ③ 88 - 89、  
91、93 - 94
  - 討論 [対話] 術 (dialectica) ③ 91、94
- バーゼル大学 [医学部] (Basel Uni.) ① 127
- パドヴァ大学 [医学部] (Padova Uni.) ③ 98
- 反復練習 [補修学習] (die Repetition) ③ 89 - 92
- 表現方法 [言葉遣い] (stylus) ③ 91
- 福音学校 (聖アンナ教会付属学校) ③ 93
- ラテン語学校 (die lateinische Schule) ③ 88、91

## 軍事（戦争）関係

- 軍事顧問 (commissari militares) ② 185
- 軍事 [軍役] 税 (Contribution) ② 190、192 - 193、195 - 196
- 軍隊 [兵隊] (militis/Soldaten) ② 185、188
  - アウクスブルク市民軍 (die Bürgerschaft in Rürtung) ② 183
  - 騎兵隊 (Reiterer) ② 184、
  - 騎兵隊隊長 (Rittermeister) ② 184
  - 皇帝軍 (kayser. Soldaten) ② 190、192、194 - 195
  - スウェーデン軍 (schwedische garnison) ② 190、192
  - 隊長 (Hauptmann) ② 184
  - バイエルン軍 (Bayr. soldaten) ② 189、190、192、194 - 195
  - 歩兵 [部隊] (Fußvolk/ Fußtruppen) ② 184
  - マスケット銃兵 (Msuqethrer/Musketier) ② 183
- 尖塔 (Thuren) ② 184
- 宿営 [地] (Quartier) ② 184、195
- 城塞 (Schlosser) ② 172
- 戦利品 [略奪物] (praeda) ② 185
- 戦争 (Krieg) ② 194
- 大砲 (Kanone/Geschütze) ① 118、② 188
- ドイツ農民戦争 (Bauernkrieg) ② 172
- 刀剣 (gladius) ② 188
- 暴力行為 [悪事/非道] (iniquitas/nefas/ferocitas) ② 185
- ライン・アム・レッヒの会戦 (1632年) (Rain am Lech) ② 182
- 稜堡 (Pastei) ② 184

## 経済社会変化

- 悪貨 (ergern) ② 168 - 169
- 家屋価値の下落 (Entwertung des Hauses) ② 193
- 賭け事 [博打] (Scholderei) ② 168
- 貨幣改悪 [鏹銭] (Kipperey) ② 168 - 169
- 飢餓 (Hunger) ② 190、191
- 飢饉 (fames) ② 180、182、187
- 給料 (pecunia) ② 180
- 公定価格 (Taxe) ② 171 - 172
- 自由売買 [市場価格での売買] (Freikauf) ② 172
- 住民数の激減 (die starke Abnahme des Bewohner) ② 193
- 成り上がり者 (Emporkömmling) ② 168
- 贋金造りの時代 (Kipperzeit u. Wipperzeit) ① 117
- 破産 (没落) 者 (Bankrotten) ② 168、193、③ 101 - 102
- 物価高騰 [インフレーション] (Inflation) ② 167、170 - 171、173、

- 貧困 (paupertas) ② 187、191
- 物不足状態 (Mangel an Proviante) ② 174、176、185
- ローマ教会財産回復勅令 [1629年] (Restitutionsedikt) ③ 94

#### 結婚と死 (Heirat u. Tod)

- 寡婦 (Witwe) ① 125、② 173、③ 97、104
  - 妊娠能力のある寡婦 (die betriebte Witwe) ③ 86
- 結婚式 (Hochzeit) ① 128、③ 86、98、100 - 101
- 結婚式場 (披露宴) (Hochzeitsmahl) [N市の雄牛亭] ③ 100 - 101
- 婚約 (Verlobung) ① 128、③ 86、99、101
- 再婚 (Wiederverheiratung) ① 121、123、125、③ 104
- 再々婚 (Wiederholtverheiratung) ① 124 - 125
- 産褥による死 (Tod von Kindbett) ① 126、③ 103
- 出産 (Geburt)
  - 死産 (Todgeburt) ① 123
  - 早産 (die vorzeitige Geburt) ① 132、136

#### ◆サ 行

##### 宗教 (Religion)

- 悪魔 (Deifel [Teufel]) ② 168、185
- イエズス会 (jesuiticus) ② 177、182、188
- 偽りの兄弟 [カトリック教徒] (pseudofratrum/Hypokrit) ② 180
- 神の御言葉 (das heilige Worth Gottes) ② 194
- カトリック教徒 (catholica) ② 194
- 教皇主義者 [カトリック教徒] (papisten/pontificius) ② 182 - 183、189、194
- 救済主キリスト (christus redimentis) ② 187
- キリストの同情と慈悲深さ (christi midercordia et clementia) ② 187
- 原罪 (Peccatum) ② 189
- ゴルゴン [メドウサ] (gorgon) ② 187
- 賛美歌 (laudantium/Kirchenlied) ② 187
  - 25番 ③ 86 - 87
  - 73番 ③ 87
- 宗教裁判官 [異端審問官] (inquartirens/inquisitors) ② 175、196
- 天国 (caelum) ① 133 - 134、② 187
- ニムロド [戦争と狩猟の神] (nimurodi) ② 187
- 福音主義者 (evangelischen) ② 182、190、19 - 195、③ 98、102
- プロテスタント (Protestant)
  - 都市貴族 (Herr) ② 182
  - 奉公人 (Dienstbote) ② 182
  - 手工業者 (Handwerksleute) ② 175、182
  - ルター派 (Lutherischen) ② 175、183、186、189、191

- フランシスコ教団 (Minoriten) ② 192
- 職業と身分 (Beruf/Stand)**
  - 貴族 (Adel) ② 185 - 186
    - 男爵 (Baron) ② 185 - 186
    - 伯爵 (Graf) ② 185 - 186
  - 刑吏 (Henker) ② 187 - 188
  - 公証人 (notar) ① 125
  - 皇帝 (Kaiser) ② 183 - 184, 186
  - 強盗団 (Räuberbande) ② 193
  - 孤児 (Waise/Orphan) ② 189, 193
  - 公僕 [書士] (Beamte=publicus) ③ 90
  - 市長 (Bürgermeister) ② 177 - 178, 189
  - 商人 (Kaufmann) ② 168, 180, 192
  - 守備隊 (Garnison) ② 190, 195
  - 市民 (Bürger) ② 172, 180, 183
  - 従者 (Gefolge/Diener) ③ 94, 99
  - 収入役 (Einnnehmer) ② 171
  - 宿営係り (Quartieramt) ② 195 - 196
  - 製塩業者 (Salzfertiger) ② 164
  - 聖界諸侯 (die geistliche Fürsten) ② 183
  - 聖歌隊 (Kirchenchor) ① 126
  - 精錬業者 (Schmelzter) ② 169
  - 世俗諸侯 (die weltliche Fürsten) ② 183, 186
  - 中流階層 (Mittel (klasse)) ② 174
  - 徒弟 (junge Geselle [Lehrling]) ③ 88
  - 仲買人 (Fürkaufner) ② 170
  - 農民 (Bauer) ② 166 - 168, 172 - 173, 184, 186
  - 判決執行官 (exsecutor) ② 188
  - パン屋 (Bäcker) ② 172
  - 法学博士 (Doctor juris.) ② 171
  - 牧師 (Pfarrer) ① 134 - 135, ③ 86 - 87, 100
  - 病人 (Kranke) ② 189
  - 貧民 (die Armen) ② 174, 191
  - 富裕者 [金持ち] (der Reiche) ② 168, 189
  - 触れ役 (praeconius) ② 189
  - 平民 [臣民] (der gemeiner Mann/subditus) ② 168, 185 - 186, 191
  - ユダヤ人 (Jude) ② 168 - 169
- 生活物資**
  - 麻のハンカチ (Taschentuch des Hanf) ② 176

- 亜麻 [粗製の—] (die ungehobelte Hanf) ③ 102
- 衣服と靴 (Kleider u. Schuh) ② 172
- エンドウ豆 (Erbse) ② 173、195
- 斧 (Axt) ② 165
- 岩塩 (Steinsalz) ② 194
- 穀物 (Getreide) ② 164 - 167、173 - 174、176、195 - 196
  - シュワーベン産の— (schwäbische) ② 170
  - バイエルン産の— (bayerische) ② 174
  - 燕麦 (Hafer) ② 174、194 - 195
  - 大麦 (Gereste) ② 166、170、174、194 - 195
  - 小麦 (Weizen) ② 166、169 - 170、174、176、194 - 195
  - 飼料 (Futter) ② 170
  - ライ麦 (Roggen) ② 173 - 174、176、194
- 穀物価格 (Getreidepreis) ② 169
- 穀物市場 (Getreidemarkt/Schrand) ② 164、171
- 穀物畑 [内畑、外畑] (Getreidefeld) ② 166
- 穀物の種子 (Getreidekern)
- 冬穀物の— (Wintergetreide) ② 166
- 夏穀物の— (sommergetreide) ② 166
- 豊作 (die gute Ernte) ② 167、196
- 柴の束 (Reisig) ② 165 - 166
- 卵 (Ei) ② 173、194
- 鉞 (Hackbeil) ② 165
- 肉 (Fleisch)
  - 牛 (Rind) ② 170、173 - 174、194 - 195
  - 子牛 (Kalb) ② 170 - 171、174、194 - 195
  - 羊 (Schaff) ② 171、173 - 174
  - 豚 (schwein) ② 170
  - 雌鳥 (Henne) ② 171
- パン (Brot) ② 166
  - 巻きパン (Semel) ① 128、② 172 - 173
- ビール (Bier) ② 173 - 174、194 - 195
- 薪 (Brennholz) ② 165、194 - 196
- 木材 (Holz)
  - シュワーベン産 (schwäbische) ② 165、171、194
  - バイエルン産 (bayerische) ② 165、171、194
- 木材市場 (Holzmarkt) ② 165 - 166、172
- ラード [豚の獣脂] (Schweineschmalz) ② 168、170、195 - 196
- ワイン (Wein) ② 170、173 - 174、184、194 - 195
- ワイン市場 (Weinmarkt) ② 183

## 星座 (Sternbild)

- 一 射手座 (Himmel des Schutzen) ① 129、③ 87
- 一 魚座 (Fische) ① 122、131、132、③ 87
- 一 牡牛座 (Stier) ③ 100
- 一 牡羊座 (Widder) ① 123、130、134、135
- 一 蟹座 (Kreb) ① 124、130
- 一 サソリ座 (Skorpion) ① 122、125、129、137
- 一 獅子座 (Löwen) ① 122、124
- 一 天秤座 (Waage) ① 132、136
- 一 双子座 (Zwilling) ① 130、③ 86
- 一 水瓶座 (Wassermans) ① 131
- 一 山羊座 (Steinbock) ① 120、128、133、134、③ 86

## ◆タ 行

### 賃貸家屋 (Mietshaus)

- 一 賃貸住宅 (Mietshaus) ② 163 - 164、③ 98
- 一 転居費用 (Wohnungswechselgeld) ② 163
- 一 家賃 (Mietzins) ② 163、164
- 一 家賃収入 (das Einkommen des Mietzins) ② 193

## ◆ハ 行

- 一 ハンガリー人 (Ungar) ② 168

## ◆マ 行

### ミュンヘン市

- 一 居酒屋 (Wirtshaus) ② 172
- 一 食料輸入 (Zufuhr von Getreide) ② 171

### 村 (Dorf) ② 172、184、194

### マゲデブルク市

- 一 食料輸入 (Zufuhr von Getreide) ② 167

## ◆ラ 行

### ライプツィヒ市

- 一 大市 (Mess) ② 168

## 地名（国別）索引

\*索引には、その地名が所属する国名の略号（ドイツはD、イタリアはI、スペインはS、オーストリアはO、スイスはSw、フランスはF）を付記した。

### ◆ア行

- アイヒシュテット (D: Eichstatt) ②172  
アウクスブルク (D: Augsburg) ①107ff. 119、121、127 - 128、②166、171、174、177 - 178、180、182 - 184、186、188 - 190、193 - 196、③90、94 - 96、98、100、102  
アフリカ (Africa) ②188  
アルゴイ地方 (D: Allgäu) ②190  
イングランド [イギリス] (England) ①120  
イタリア (Italia) ①121、②170、188、③94、98  
イベリア (S: Iberia) ②188  
ウィーン (O: Wien) ②168、③104  
ヴァルターブルク (D: Wartaburg) ②184  
ヴェネツィア (I: Venezia) ②168、③92 - 95、99、101  
ヴェローナ (I: Verona) ③99  
オーストリア (Austria/ostereich) ②172、184

### ◆カ行

- ケンプテン地方 (D: Kempten) ②190

### ◆サ行

- ザクセン地方 (D: Sachsen) ③102  
ザンクト・ガレン地方 (Sw: St. Gallen) ②195、③96  
シュワーベン地方 (D: Schwäben) ②166、169 - 171、185  
スイス (Switzerland) ②170、③86  
スウェーデン (Sweden) ②182、186、189  
ストラスブール (F: Strasbourg) ③96

### ◆タ行

- チューリッヒ (Sw: Zürich) ③96  
チューリンゲン地方 (D: Thüringen) ③102  
ドイツ (Deutschland) ①121、②168、170、182、186、192、194

### ◆ナ行

- ニュルンベルク (D: Nürnberg) ①121、②172

ネルトリンゲン (D: Nörtlingen) ① 119、③ 99 - 101、103  
ノイブルク (D: Neuburg) ① 123

◆ハ行

バイエルン地方 (D: Bayern) ② 167、169 - 170、172 - 174、184  
バーゼル (Sw: Basel) ① 127、③ 96  
パドヴァ (I: Padova) ① 127、③ 98 - 99  
ハンガリー (Ungarn) ② 170  
フィレンツェ (I: Firenze) ③ 94、96、98  
フィンランド (Finland) ② 192  
フランス (France) ① 121、② 170  
ポエニ [カルタゴ] (Punier/Carthago) ② 188  
ポーランド (Poland) ② 170  
ボルツァーノ (I: Bolzen/Bolzano) ③ 102

◆マ行

マイセン地方 (D: Meißen) ③ 102  
マグデブルク (D: Magdeburg) ② 167  
マルセイユ (F: Marseille) ① 120  
ミュンヘン (D: München) ② 172、184、194  
メミンゲン地方 (D: Memmingen) ② 190

◆ラ行

ライプツィヒ (D: Leipzig) ② 168、193、195  
リンダウ (D: Lindau) ③ 95 - 96  
レーゲンスブルク (D: Regensburg) ② 190、192  
ローテンブルク (D: Rothenburg) ① 119

敬愛大学 国際学部

# 2011年度 研究活動報告

## 掲載者一覧

(学部学科別にアルファベット音順)

### 国際学部国際学科

有馬 容子 Yoko ARIMA	131
家近 亮子 Ryoko IECHIKA	131
ジェーン・イケシマ Jayne IKESHIMA	133
覚正 豊和 Toyokazu KAKUSHO	134
櫛田 久代 Hisayo KUSHIDA	135
増井 由紀美 Yukimi MASUI	135
水口 章 Akira MIZUGUCHI	136
村川 庸子 Yoko MURAKAWA	137
中村 圭三 Keizo NAKAMURA	138
大月 隆成 Takashige OTSUKI	139
織井 啓介 Keisuke ORII	140
三幣 利夫 Toshio SANPEI	140
庄司 真理子 Mariko SHOJI	141
高田 洋子 Yoko TAKADA	143
高橋 和子 Kazuko TAKAHASHI	144
山本 健 Takeshi YAMAMOTO	146
柳原 由美子 Yumiko YANAGIHARA	147

### 国際学部こども学科

畑中 千晶 Chiaki HATANAKA	148
池谷 美佐子 Misako IKEYA	149
佐藤 佳子 Keiko SATO	150
田口 功 Isao TAGUCHI	150
武内 清 Kiyoshi TAKEUCHI	151
山口 政之 Masayuki YAMAGUCHI	153
山本 陽子 Yoko YAMAMOTO	154

**有馬 容子** Yoko ARIMA

アメリカ文学／教授

〈現在の研究テーマ〉

プロジェクト研究の計画に基づきマーク・トウェインの遺稿を管理するカリフォルニア大学パークレー校マーク・トウェイン・プロジェクトにて未発表原稿の調査にあたった。その資料の分析をもとに、死後百年経ち昨年からオリジナルの形で出版が開始された、『自伝』について研究を進めた。この新しい『自伝』が現代の読者に伝える内容、印象が現代文学の視点からどのような意味を持つか論文にまとめ発表する。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

マーク・トウェインの口述した順番どおりに復元された『自伝』が出版されたことにより、トウェインのユーモアの原点が語りの特徴を中心に再発見されている。これまでの翻訳からはこういった新たな視点が欠けており、トウェインのユーモアが十分に表現されていなかった。従って、未訳のユーモラス作品および既訳のユーモア作品の再訳を試みる。また、日本人からみたトウェイン作品の評価について海外で発表していきたい。

〈その他の学外活動〉

日本マーク・トウェイン協会 評議委員

\*\*\*

**家近 亮子** Ryoko IECHIKA

中国近現代政治史・日中関係論／教授

〈現在の研究テーマ〉

2011年度は昨年度に引き続き岩波書店から出版される単著『蒋介石の外交戦略と日中戦争』の原稿を執筆し、ようやく出版の目途をてることができた。予定よりも大幅に遅れたが、今年度中の出版を目指す。また、同時に中公新書『蒋介石』の出版の準備を行っていく。

今年度は総合地域研究所から助成を受けた「共同研究」（「近代日本におけるアジア人留学生の『日本体験』の再検証——千葉に刻まれた近代史を中心に」）

の集大成として国立歴史民俗博物館でシンポジウムを開催した。今年度はこの内容を研究所の紀要に発表する。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

次年度は新たなテーマとして、科学研究費（基盤研究B）が通ったので、「中国の政策決定過程における世論要因の分析」の共同研究を行う。研究会の開催と調査、海外からの研究者を招いてのワークショップの開催に専念したい。

〈公表された著書・論文等〉

- ①(単著)「蒋介石 1927 年秋の訪日——〈蒋介石日記〉與日本新聞報道的比較分析」(中国語)、呂芳上主編『蔣中正日記與民国史研究』上冊、世界大同出版、台北、2011 年 4 月、251-266 ページ。
- ②(単著)「中国における階級概念の変遷——毛沢東から華国鋒へ」、加茂具樹・飯田将史・神保謙編著『中国改革開放への転換——「一九七八年」を越えて』、慶應義塾大学出版会、2011 年 10 月、3-28 ページ。
- ③(単著)「『戦争責任二分論』在中國の源流——蒋介石、毛澤東、周恩来對中日戦争的叙述方式」(中国語)、『亜洲研究』64、香港珠海學院亜洲研究中心、2012 年 2 月、217-250 ページ。

〈学会報告〉

- ①(司会) 2011 年 5 月 21 日：2011 年度アジア政経学会東日本大会（獨協大学）・自由論題「中国現代史の新たな視角」。
- ②(口頭発表) 2011 年 6 月 28 日：国際シンポジウム「蒋介石與民国史研究」（台北・中央研究院）、研究発表：「蒋介石における 1935 年の意義——四川省建設と抗日戦の準備」
- ③(司会) 2011 年 9 月 16 日：アジア政経学会全国大会（同志社大学）自由論題。
- ④(企画と司会) 2011 年 11 月 12 日：国際政治学会（つくば国際フォーラム）分科会「東アジア国際政治史」責任者として企画（戦後東アジア国際関係の再構築）。
- ⑤(コメンテーター) 2011 年 11 月 19 日：辛亥革命 100 周年記念国際シンポジウム「アジア主義・近代ナショナリズムの再検討」（東京大学本郷キャンパス）。
- ⑥(企画と司会) 2011 年 12 月 5 日：辛亥革命百周年記念東京会議（東京大学駒場キャンパス）、分科会(8)「日本から見た辛亥革命」。

- ⑦(企画と司会) 2012年1月21日: 敬愛大学総合地域研究所共同研究「近代日本におけるアジア人留学生の『日本体験』に再検証——千葉に刻まれた近代史を中心に」シンポジウム、国立歴史民俗博物館。

〈その他の公表物〉

「中国外交の変遷——『次植民地』から『大国化』への途」佐倉文化大学、平成23年度『講義録』、(財)佐倉国際交流基金、2011年10月。

〈その他の学外活動〉

- ・(財)大学基準協、分科会調査委員 (2011年4月～2012年3月)。
- ・アジア政経学会、理事。『アジア研究』編集委員、査読担当。
- ・現代中国学会、理事。
- ・国際政治学会分科会「東アジア国際政治史」責任者。
- ・講演: 「中国外交の変遷」、2011年5月14日、佐倉国際文化大学。
- ・講演: 「『国際』とは何か?」、2011年11月4日、千葉県立長生高校。

〈学外からの研究助成〉

現代中国拠点研究、文部科学省、2007年～2012年度、国分良成(慶応義塾大学)、研究分担者。

\*\*\*

**ジェーン・イケシマ** Jayne IKESHIMA

英語／専任講師

〈現在の研究テーマ〉

The phenomenon of “English”

Combining Puppeteering with English Teaching

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

I am researching how to use puppets and puppet shows to teach English to children. I am examining the ways that English dialog can be combined with Japanese stories for the purpose of entertaining and educating audiences. In addition, I am researching methods for teaching the art of puppetry and puppet manipulation to students. I am studying the construction of puppet theaters and how to transport them easily to puppet-show venues.

\*\*\*

## 覚正 豊和 Toyokazu KAKUSHO

刑事法学(公法学)／教授

### 〈現在の研究テーマ〉

- ①死刑廃止論
- ②少年犯罪、高齢者犯罪など各種犯罪の類型的考察
- ③犯罪被害者論（含む修復的司法）、更生保護
- ④刑法理論研究

### 〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

- ①のテーマにつきその代替刑の導入更生や被害者感情などの観点から死刑廃止の問題をさらに考察していきたい。また、このテーマに資するため確定死刑者の処遇に関する国際比較研究も引き続き行っていきたい（③のテーマは深い関わりをもつ）。
- ②の少年犯罪、高齢者犯罪など各種犯罪の類型的考察、とりわけ少年犯罪については毎月開催されている「少年法研究会」「警察政策学会」における情報交換等を基に少年の保護主義擁護論と厳罰論の検討を踏まえ、刑事処分と保護処分との限界の問題について考察していきたい。
- ③④のテーマについては、体系書の執筆に取り組んでいるが、一日も早く脱稿したい。

### 〈学会報告〉

（司会）2011年8月8日、第16回国家犯罪学会シンポジウム（神戸学院大学、ポートピアキャンパス3F）。

### 〈その他の公表物〉

2011年3月「日本国憲法の生い立ちと憲法解釈変更の問題」『佐倉市国際文化大学講義録』（財団法人佐倉国際交流基金、69-75ページ）。

### 〈その他の学外活動〉

- ・独立行政法人放射線医学総合研究所倫理・コンプライアンス委員（平成21年10月～継続）。
- ・財団法人佐倉国際交流基金佐倉市国際文化大学運営委員（平成21年10月～継続）。
- ・千葉県生涯大学校講師（昭和60年6月～継続）。
- ・明治大学犯罪学研究所研究員（平成16年10月～継続）。
- ・千葉大学非常勤講師（憲法、昭和61年4月～継続）。

\*\*\*

## 櫛田 久代 Hisayo KUSHIDA

アメリカ政治史／教授

### 〈現在の研究テーマ〉

「アメリカ沖合石油・天然ガス田の新規掘削モラトリアムの歴史研究」  
アメリカ連邦政府による新規沖合石油・天然ガス田掘削一時停止措置（モラトリアム）が、1980年代から2010年まで存続してきた理由を、連邦レベル、州レベルの相互作用の中から明らかにしたいと考えている。

### 〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

さしあたり、上記研究成果の一部に関して、2013年6月22・23日に神戸大学において開催される日本比較政治学会研究大会において報告する。学会報告後、論文としてまとめ公表する予定である。

### 〈その他の公表物〉

（書評）Peter Lehner, *In Deepwater: The Anatomy of a Disaster, the Fate of the Gulf, and Ending Our Oil Addiction* (New York: The Experiment, 2010) 『敬愛大学総合地域研究』2号（2012年）、76-78ページ。

### 〈その他の学外活動〉

- ・日本アメリカ史学会、『アメリカ史研究』編集委員会委員
- ・立教大学文学部非常勤講師

### 〈学外からの研究助成〉

科学研究費助成 基盤研究(C)「アメリカ沖合石油・天然ガス田の新規掘削モラトリアムの歴史研究」（研究代表者：櫛田久代）、研究課題番号23530158（平成23～25年度）。

\*\*\*

## 増井 由紀美 Yukimi MASUI

アメリカ研究／准教授

### 〈現在の研究テーマ〉

イェール大学に所蔵された『朝河文書 (Asakawa Papers)』を主な史料とし、朝河貫一の歴史家／図書館司書としての役割をアメリカ近代化の中で捉え

る。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

上記研究を一冊の本の形にまとめる準備をする。

〈その他の公表物〉

「3.11以降の郡山、そしていわきを訪ねて」『朝河貫一研究会ニュース』76号、2011年8月。

「ニューヘイブン便り」『朝河貫一研究会ニュース』77号、2012年2月。

〈その他の学外活動〉

- ・イェール大学客員研究員（アメリカ研究）
- ・朝河貫一研究会、理事及び事務局長
- ・津田塾大学非常勤講師

\*\*\*

## 水口 章 Akira MIZUGUCHI

政策学(対外政策論)／教授

〈現在の研究テーマ〉

政策決定過程におけるリスク認識についての理論研究に取り組んでおり、その事例として、日本の対外政策における資源・エネルギー外交、経済外交、安全保障外交について分析をしている。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

現在の研究テーマに引き続き取り組む。さらに、日本人の対外認識の変遷についても研究の視野を広げる。

〈公表された著書・論文等〉

「リビアの政治変動と新制度構築」『中東協力センター・ニュース』Vol. 36, No. 4, 47-55ページ、財団法人中東協力センター、2011年10月。

〈その他の公表物〉

- ①「リビア 今後の課題」(2011年10月27日『読売新聞』論点)。
- ②新イーグルフライ(投資助言・代理業 関東財務局長(金商)第1898号取得のエフピーネット有限会社発行のメールマガジン)に毎月1回執筆(毎回2500字程度)。執筆テーマは次の通り。  
「中東情勢とリスクの連鎖」「中東地域の地政学的リスクと中国」「IEAの石油備蓄放出と中東情勢」「中国・中東諸国関係について」「リビア情勢

の新局面と中東の動向」「オバマ政権の外交政策への批判」「市民の連帯意識と中東情勢」「中東の政変と日本の中東政策」「2012年の中東情勢と原油価格」「今後のイラン情勢」「イラン、シリア問題の危機の本質とは」「対イラン経済制裁の行方」。

〈その他の学外活動〉

- ・エフイーシー民間外交推進協会の日本・中東文化経済委員会委員
- ・獨協大学非常勤講師
- ・千葉県立保健医療大学非常勤講師（後期）

\*\*\*

## 村川 庸子 Yoko MURAKAWA

日米比較文化論／教授

〈現在の研究テーマ〉

- ① 20 - 21世紀米国の移民・市民権政策
  1. 日系／アジア系アメリカ人の歴史の表象——例外主義再考
  2. 米国の国外退去政策と官僚政治
- ② 日本の「戦後」に関する比較文化論的考察

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

- ① 上記に関する論文執筆
- ② 自著の翻訳（邦語⇒英語）

〈公表された著書・論文等〉

- ① (単著)「日系アメリカ人の表象——『リドレス史観』を超えるための試論」『敬愛大学国際研究』第24号、2011年2月、25-46ページ。
- ② (新刊紹介) 和泉真澄著『日系アメリカ人強制収容と緊急拘禁法——人権・治安・自由をめぐる記憶と葛藤』（2009年）、『アメリカ学会会報』172号、2010年4月。

〈その他の公表物〉

- ・コラム「道標：移民史研究の入り口——私にとっての愛媛」（『愛媛新聞』2011年1月16日）。
- ・コラム「道標：いけずの陰に優しさ——記憶の中のおばちゃん」（『愛媛新聞』2011年2月20日）。

〈その他の学外活動〉

- ・敬愛高校 敬天愛人講座講師
- ・国立歴史民俗博物館第六室リニューアル委員 第6室「現代」副室における展示「日本人移民と戦争の時代」(2011年3～5月)の企画、米国からの観覧者への解説、等。
- ・(財)日本高等教育評価機構評価員
- ・日本移民学会運営委員
- ・津田塾大学非常勤講師

〈学内活動〉

- ・敬愛大学／敬愛高等学校 敬天愛人講座講師
- ・総合地域研究所共同研究「『食』と『アグリ』をめぐる新たな教育カリキュラム構築に向けての実践的活動」(研究代表)。

〈学外からの研究助成〉

人間文化研究機構連携研究「移民史の比較研究」(研究代表者：今泉裕美子、2005年～) 研究員。

\*\*\*

**中村 圭三** Keizo NAKAMURA

大気環境学／教授

〈現在の研究テーマ〉

- ①千葉県北部地域における酸性雨の地域的特性に関する研究
- ②雨水の利用に関する研究
- ③ネパールのヒ素汚染に関する研究
- ④ネパールの農業気象に関する研究
- ⑤ネパールの環境問題に関する研究
- ⑥山岳の環境問題
- ⑦印旛沼流域鹿島川の自然環境に関する総合的研究

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

- ①長年の酸性雨に関する研究の成果をまとめる
- ②ネパールのヒ素汚染に関する研究をまとめる
- ③ネパールの農業気象に関する研究をまとめる
- ④ネパールの環境問題に関する研究成果をまとめる

⑤山岳の環境問題

⑥印旛沼流域鹿島川の自然環境に関する総合的研究

〈公表された著書・論文等〉

(共著) 中村圭三・三谷雅肆「関東地方における大気混濁係数の推移について——全日射量からの評価の試み」『天気』(査読付き)、Vol. 58, No. 10 (2011)、855-864 ページ。

〈その他の学外活動〉

- ・佐倉市社会教育委員
- ・千葉大学文学部非常勤講師

〈学外からの研究助成〉

2011～2015年度までの科学研究費補助金 基盤研究(B) 海外学術調査「ネパール・テライ低地におけるヒ素汚染の実態とその対策に関する研究」研究代表者。研究課題番号 23401006。

\*\*\*

**大月 隆成** Takashige OTSUKI

アフリカ研究／専任講師

〈現在の研究テーマ〉

アフリカや途上国の開発など、学生にとってなじみが薄く、関心を持ちにくい分野について、どのようにすれば学生に関心を持たせることができるか、そのための効果的な方法にはどのようなものがあるか、という観点からの研究を行っている。具体的には、シミュレーション・ゲームを利用した教材開発が中心であり、アフリカを舞台にした開発教育用教材のゲーム、「ヴィクトリア湖のほとり」の改良及び自習用教材化を進めている。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

アフリカを舞台にしたゲームの第二弾、「ケタイ・マサイ」の開発を進める予定である。従来、牧畜を中心とする伝統的な生活を営んできた東アフリカのマサイ人の生活が、携帯電話という文明の利器を手にしたことで一変しつつある点や、固定電話の普及率が極めて低かったアフリカにおいて、なぜ携帯電話が適合したのかという点について、ゲームを楽しみながら学び、さらにマサイ人新興実業家としてビジネスに取り組む経営シミュレーション・ゲームの要素を兼ね備えたものとなる予定である。

〈学会報告〉

(口頭発表) 2011年5月29日、「ヴィクトリア湖のほとり——開発教育分野における教育用ゲーム開発の試み」、(日本シミュレーション&ゲーミング学会、千葉工業大学)。

\*\*\*

**織井 啓介** Keisuke ORII

国際金融論／准教授

〈現在の研究テーマ〉

金融危機の実証分析：経済政策・為替制度の失敗や他国からの伝染 (contagion) 等によって発生する金融危機のメカニズムを研究するとともに、危機発生の子知・予防を目的とするEWS (Early Warning System) を研究しています。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

通貨統合の為替安定性：ユーロ危機を踏まえて、バスケット通貨や単一通貨を導入した際の為替の安定性について、理論・実証両面から研究を進める予定です。

〈公表された著書・論文等〉

(単著) 「Early Warning System による危機の予測：東アジアおよび中東欧への応用」『敬愛大学総合地域研究』第2号、29-51ページ。

〈その他の学外活動〉

- ・独立行政法人経済産業研究所 (RIETI) バスケット通貨研究会研究委員。
- ・千葉大学法経学部非常勤講師 (金融論)。
- ・千葉経済大学経済学部非常勤講師 (金融論)。

\*\*\*

**三幣 利夫** Toshio SANPEI

国際経済／教授

〈現在の研究テーマ〉

インターシィプの拡大と就職先の開拓。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

インターシィプ拡大と就職先拡大の更なる推進。

\*\*\*

## 庄司 真理子 Mariko SHOJI

国際機構論／教授

### 〈現在の研究テーマ〉

国連グローバルコンパクトのビジネスと平和専門家委員会の委員として、今後も、ビジネスと平和の関係について研究していく。本年の研究目標は、国連グローバルコンパクトのマルチステークホルダー・プロセス（Multi stakeholder process: MSP）に関する研究である。MSPがビジネスと平和のガイダンス文書を作成するなどの数々の規範形成活動を行っているため、MSPの規範形成プロセスをいかにするべきかを研究している。当該ガイダンス文書は、ソフト・ローではあるが、トランスナショナルな規範である。国際法と比較して規範形成プロセスが未熟で形成段階にあり、大変に混沌としている。本研究では、この規範形成プロセスを整理し、秩序だったものとすることを検討する。また、ビジネスと平和の文脈では、このMSPが、そのまま紛争解決プロセスとなる場合がある。そのあたりの紛争の平和的解決における国連グローバルコンパクトのMSPの役割についても研究する予定である。

### 〈公表された著書・論文等〉

- ①（共著）庄司・宮脇共編『新グローバル公共政策』晃洋書房、2011年10月、3-11ページ、23-41ページ、135-143ページ。
- ②（単著）「国連の役割を問う」、押村・中山編『世界政治を読み解く』、ミネルヴァ書房、2011年11月、141-162ページ。
- ③（単著）「The United Nations Global Compact and Peace: Guidance on Responsible Business in Conflict-affected and High-risk areas: A resource for companies and investors」『敬愛大学国際研究』第25号、2012年3月、135-159ページ。
- ④（単著）「Research note: Business and Peace Project of Columbia University」研究代表者 佐藤安信『国連の平和活動とビジネス——紛争、人の移動とガバナンスの相互作用を軸として』平成21年度～23年度科学研究費補助金、新学術領域研究・研究課題提案型、研究成果報告書、課題番号

21200047、2012年3月、70-80ページ。

〈学会報告〉

(Project manager, organizer & moderator) Business and Peace Project of  
Columbia University

January 22: First member meeting, Presentation Practice Room in Lehman  
Library

January 28-29: Aspen meeting (Mariko)

February 26: Second member meeting

March 4: UNGC official presentation/learning session (2:30-4:00pm at  
Lehman)

March 11: Viewing of a Global Web meeting and discussion (Listening)

March 22: The office of the UNGC visit

April 1: Learning session with officials from the Aspen Institute and IEP

April 5: Webinar discussion, led by the office of the UNGC

April 15: Overview of UNGC Business and Peace by Mariko

Student Presentations- Interim Report (Sudan, Colombia, Nepal and Pakistan)

April 18: UNDP official Mr. Henry Jackelen presentation

April 23: Final meeting for our reports

May 17: Meeting of the Expert Group on Responsible Business and  
Investment in

Conflict-Affected Countries in Copenhagen, Denmark (Mariko)

(panelist), "Career in Asia," Mathson Hall room109, Drexell University, May  
25,2011.

(Moderator and Organizer, Speaker) Ambassador Anwarul K. Chowdhury,,  
Title: "Culture of Peace and Spirituality," June 29th, 2011 from 4:00 pm,  
the Robbins Nest cafe at the Plaza level of the Waterside, NY.

(Moderator and Organizer) Title: Business and Peace Symposium: Can multi-  
stakeholder process (the local network of the UNGC) contribute to recon-  
struction and peacebuilding?" 6:00-8:00pm, September 8th,2011, at 409  
IAB (International Affairs Building), School of International Public Affairs,  
Columbia University.

"Responsibility to Protect, Human Security and East Asia—A diagrammatic  
approach to the UN peace and security notions?" The 11th East Asian

Seminar on the United Nations System, Main Theme: “Globalization and Regional Governance in East Asia,” Co-organized by Japan Association for United Nations Studies (JAUNS) and Osaka School of International Public Policy (OSIPP), Osaka University, Dates: December 16th–17th 2011, Venue: Osaka University Hall.

〈その他の公表物〉

(書評) 松浦博司著『国連安全保障理事会』、『国際法外交雑誌』 第110巻、(1号)、2011年、116–120ページ。

〈その他の学外活動〉

- ・国連グローバルコンパクト、ビジネスと平和専門家委員会委員
- ・コロンビア大学大学院国際公共政策研究科客員研究員
- ・コロンビア大学大学院国際公共政策研究科 UN studies program, Business and Peace Project, Project manager
- ・日本国際連合学会理事
- ・国際法学会評議員
- ・中央大学社会科学研究所客員研究員
- ・立教大学法学部非常勤講師
- ・早稲田大学大学院アジア太平洋研究科非常勤講師

〈学内活動〉

- ・(講演)「グローバル都市ニューヨークから学んだこと」国際交流講演会、2011年11月13日、敬愛大学 3301教室。
- ・「多人種多宗教の街ニューヨーク」『敬愛大学学園報』、第101号(2011年11月30日)、9ページ。

〈学外からの研究助成〉

平成23年度 科学研究費補助金 基盤研究(B)「国際規範の競合と複合化についての比較研究」研究代表者。研究課題番号20330034。

\*\*\*

**高田 洋子** Yoko TAKADA

国際関係史・東南アジア研究・ベトナム経済史／教授

〈現在の研究テーマ〉

ベトナム領メコンデルタのフランス植民地統治下における社会と経済、と

りわけ土地所有制度の史的研究。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

- ①上記研究の集成による著書完成に向けた準備。
- ②紅河デルタ農村から調達された仏領期契約労働者に関する研究。ハノイ市ベトナム国家公文書センター所蔵史料の収集とデジタル化作業、データベース作成。
- ③ベトナム共和国期土地改革に関する議定資料の収集と分析。

〈公表された著書・論文等〉

(単著) 2012年3月、「仏領期メコンデルタにおける大土地所有制の成立(2)」『敬愛大学総合地域研究』(敬愛大学総合地域研究所紀要) 第2号、52-73ページ。

〈その他の学外活動〉

- ・東南アジア学会、2011年度東南アジア学会賞の審査委員。
- ・京都大学東南アジア研究所学外研究協力者。
- ・2011年10月7日、14日、21日、「ベトナム民族解放闘争のなかの人びと I・II・III」千葉市市民文化大学国際文化学科、講演、千葉市市民文化ホール。

〈学外からの研究助成〉

- ①2011年度東京大学東洋文化研究所 東洋学研究情報センター共同研究「国際的な米価高騰とインドシナ半島の稲作の変容に関する農業経済史」(東京外国語大学大学院総合国際学研究科 宮田敏之代表)の研究分担者。
- ②上記研究機関からの派遣：ベトナム社会主義共和国 2012年3月3日～3月12日、ホーチミン市、メコンデルタ農村における調査、ハノイ市、ベトナム国家人文社会科学・史学院訪問。

\*\*\*

**高橋 和子** Kazuko TAKAHASHI

自然言語処理・機械学習・社会調査方法論／教授

〈現在の研究テーマ〉

- ①サポートベクターマシン (SVM) における分類精度向上を目的に提案した「クラス所属確率を用いたアンサンブル学習アルゴリズム」の有効性を示す(公表された著書・論文①、学会報告①)。

- ②「職業・産業コーディング自動化システム」を東京大学社会科学研究所 Web サイトから公開するため、現在は、国内標準である SSM 職業・産業コーディング自動化システムを公開版に移植中である（公表された著書・論文②、学会報告②③）。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

上記②において次の3つを行う。

- ・国際標準である ISCO/ISIC コーディング自動化システムの Web 公開版への移植。
- ・コードの作業量軽減のために、機械学習手を用いたコードについて、システムが予測した分類結果に対する確信度（3段階）を付与。
- ・SSM 職業・産業コーディング自動化システムの Web 公開実現。

〈公表された著書・論文等〉

- ①（単著）2011年5月、「多クラス SVM におけるクラス所属確率を用いたアンサンブル学習の提案」『情報処理学会第201回自然言語処理・第86回音声言語情報処理合同研究発表会論文集』〈[https://ipsj.ixsq.nii.ac.jp/ej/index.php?active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=74053&item\\_no=1&page\\_id=13&block\\_id=8](https://ipsj.ixsq.nii.ac.jp/ej/index.php?active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=74053&item_no=1&page_id=13&block_id=8)（accessed 2013-2-1）〉。
- ②（単著）2012年3月、高橋・魏・田辺・吉田、「社会調査における職業・産業コーディング自動化システムの Web 公開」『言語処理学会第18回年次大会論文集』、219-222 ページ。

〈学会報告〉

- ①（口頭発表）2011年5月16日、「多クラス SVM におけるクラス所属確率を用いたアンサンブル学習の提案」、情報処理学会第201回自然言語処理・第86回音声言語情報処理合同研究発表会（於：東京大学本郷キャンパス）。
- ②（口頭発表）2011年9月6日、高橋他「職業・産業自動コーディングシステムの Web 公開に向けて——機械学習による手法」、第52回数理学会大会（於：信州大学）。
- ③（口頭発表）2012年3月14日、高橋他「社会調査における職業・産業コーディング自動化システムの Web 公開」、?言語処理学会第18回年次大会（於：広島市立大学）。

〈その他の公表物〉

2012年3月、村川他『『食』と『アグリ（=農業）』をめぐる新たな教育カリキュラム構築に向けての実践的活動』総合地域研究所共同研究報告書

2011（代表：村川庸子）副代表

〈その他の学外活動〉

- ・文部科学省「人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業」共同研究拠点「JGSS（日本版総合的社会調査）研究センター」（代表：岩井紀子〔大阪商大〕）嘱託研究員（2008年10月～）。
- ・数理社会学会研究活動委員（2011年4月1日～）。
- ・成蹊大学アジア太平洋研究センター「暮らしについての西東京市民アンケート」（代表：小林盾〔成蹊大〕）における職業データ自動コーディング処理（2011年7月）。
- ・少子社会における子育て支援政策研究会「結婚と子育て支援にかんする東京都民調査」（代表：金井雅之〔専修大学〕）における職業データ自動コーディング処理（2012年1月）。
- ・平成22年度～平成24年度科学研究費補助金 基盤研究(C)「対人援助専門職職務内容コーディングの自動化に関する実証的研究」（研究代表者：後藤隆〔日本社会事業大〕）連携研究者。
- ・社団法人「社会調査協会」連絡責任者（2011年4月～）。

〈学外からの研究助成〉

平成22～24年度 科学研究費補助金（2011年度：65万円）。基盤研究(C)「社会調査の基盤を提供する自由回答の自動コーディングシステムの開発と公開」研究代表者。研究課題番号22530516。

\*\*\*

## 山本 健 Takeshi YAMAMOTO

ドイツ中・近世都市史／教授

〈現在の研究テーマ〉

ドイツ中・近世のアウトスブルク市の様々な職業的な立場にいる人物たちが残した『日記』の分析に努めている。当時は激しく宗教的に対立した時期であり、各集団の人々が何に関心を持ち、どのように行動したのかを調査し、その相互の人間関係を明らかにするための史料調査が現在の研究テーマである。そして、今年度でアウトスブルク市の医師フィップ・ヘーヒシュテッターが著した『日記』（1579－1635年）の邦訳が完了した。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

次年度からは、私の研究の基軸たる商人、ルーカス・レムの『日記』では簡単にしか触れられていない当時の交通事情について調査し、その文献や史料の翻訳を通して、移動の手段や旅行の実態を明らかにする予定でいる。史料は、クラウス・ミリツァーが編纂したStadtkoelnische Reiserechnungen des Mittelalters (Duseldorf, 2007) である。これは中世高地(南)ドイツ語や中世低地(北)ドイツ語などで記されたものであり、苦戦を強いられそうであるが、ルーカス・レムが発病して逗留した都市だけに、辛抱強く翻訳していきたい。

〈公表された著書・論文等〉

(単著)「近世アウクスブルクの医師の日記の邦訳(2)」『敬愛大学国際研究』第25号、2012年、161-196ページ。

\*\*\*

**柳原 由美子** Yumiko YANAGIHARA

英語音声学、教育方法学／准教授

〈現在の研究テーマ〉

国際協力における技術移転をコミュニケーションと捉え、コミュニケーションの4要素を枠組みに、技術移転の内容(メッセージ)、技術移転の方法(チャンネル)、カウンターパート(受け手)の能力の問題を取り上げてきた。また、カウンターパートの語学力の問題にも関わるとして、サモアとフィリピンにおいて、教授言語についての研究を行ってきた。特に、教授言語の相違(母国語・英語)による理解度の問題を、教授言語の流暢さの観点からのみ見ていくのではなく、サビア・ウォーフの言語認知の観点(BerryのB型の問題)から取り上げた。また、1999年から行ってきた7つの実証的研究論文を、ひとつにまとめることを試みている。また、英語教授法に関する実証的研究も、再度始めている。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

次年度は、英語教授法に関する実証的研究に立ち戻って、「シャドウイングの効果」や、「CALLを使用した場合の効果」などに関して、今まで採取したデータを使用したり、新たにデータを収集し、研究しようと考えている。

〈その他の学外活動〉

①日本国際地域開発学会評議員(2001年4月～現在に至る)。

- ②放送大学 平成22年度2学期面接授業担当講師（科目名：英語の音声）。
- ③放送大学 平成22年度2学期面接授業担当講師（科目名：国際協力論——技術移転の方法と文化協力）。
- ④実業英語技能検定 面接委員（1994年～現在に至る）。

---

## 国際学部こども学科

### 畑中 千晶 Chiaki HATANAKA

西鶴浮世草子研究・翻訳研究／准教授

#### 〈現在の研究テーマ〉

- ①浮世草子研究（西鶴およびその他の浮世草子に関して）
- ②海外における日本文学研究に関する調査・考察

#### 〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

- ①浮世草子研究（事典項目執筆に備えた基礎研究）
- ②日本文学の翻訳に関する考察
- ③「児童文学論」講義に備えた基礎研究

#### 〈公表された著書・論文等〉

- ①(単著) 2011年6月、「フランス語の井原西鶴—『浮世の月』における試み—」、日本比較文学会編『越境する言の葉—世界と出会う日本文学—日本比較文学会創立60周年記念論文集』、彩流社、211-221ページ。
- ②(単著) 2012年2月、「西鶴の隠れ里—描かれざる空白を読む—」『敬愛大学国際研究』第25号、121-134ページ。

#### 〈学会報告〉

(口頭発表) 2011年8月27日、「西鶴が『男色大鑑』に登場するのはなぜか」、パネル“Saikaku’s Katari or narration”における個人報告。司会は中嶋隆氏(早稲田大学教授)、パネル全体の企画・統括はダニエル・ストリューブ氏(フランス、パリ第七大学准教授)、他の発表者はジェラルド・シアリ氏(フランス、モンペリエ大学教授)、ポール・シャロウ氏(アメリカ、ラトガース大学教授。但し、発表は事情により欠席)。13th International Conference of European Association for Japanese Studies, Tallinn, Estonia.

#### 〈その他の公表物〉

2012年3月、読書案内「科学する女子の背中を押すものとは（『マリー・キュリーの挑戦 科学・ジェンダー・戦争』、川島慶子著、トランスビュー、2010年）』『君にすすめる一冊の本』第7集、74-75ページ。

〈その他の学外活動〉

- ・ 2000年12月～至現在、日本比較文学会東京支部役員。
- ・ 2009年6月～至現在、日本比較文学会事務局幹事（名簿担当）。
- ・ 1997年4月～至現在、駒澤大学非常勤講師。
- ・ 2009年4月～至現在、青山学院大学非常勤講師。
- ・ 2011年6月～至現在、日本比較文学会東京支部幹事。
- ・ 平成23年度市原市立五井公民館主催事業「江戸文化に親しむ」講師。

\*\*\*

## 池谷 美佐子 Misako IKEYA

小学校教育／准教授

〈現在の研究テーマ〉

- ①小学校教育の教科に関しては、生活科を担当し、その概要と指導法について、教科の特性・対象児童の発達特性を具体的に理解することができる授業方法を工夫する。
- ②「子どもと家庭の関係論」においては、小学校での様々な事例をもとに、現代の社会の変化と家庭の在り方の変容を分析しながら、その中に生きる子どもの変容や課題を多様な側面からとらえ整理する。
- ③1・3・4年のゼミの指導の在り方については、将来、小学校の教員をめざしている学生たちの希望の実現に向けて、基礎的な学習上の知識・小学校教育に関する一般的な知識・教育哲学の変遷・小学校の授業の在り方や模擬授業等について、4年間を通して積み重ねができるようゼミ内容の意図的・計画的な構築を図っている。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

- ①生活科や「子どもと家庭の関係論」の内容を取り扱う上での課題は、都市部の抱える実態と学生の多くが経験してきた体験の大きな隔たりである。そのことを踏まえて、より具体的に学生に授業内容をとらえさせ理解を深めさせていくための指導方法の在り方について研究を続けていく。
- ②授業の中で学生自身が体験を通して学ぶことのできる指導の在り方をさ

らに明確にしていく。

〈公表された著書・論文等〉

- ①(単著)「敬愛大学の小学校教員養成の現状と課題」(『敬愛大学国際研究』第25号、2012年)、1-32ページ。
- ②(単著)「保育者として育ちつづけるために——シンポジウム総括報告」(『日本幼児教育学研究』第17号、2010年4月)、38-40ページ。

〈学会報告〉

(司会) 2010年9月4日「シンポジウム：質の高い保育者の養成について考える」。

\*\*\*

**佐藤 佳子** Keiko SATO

小学校英語・イギリス文学／専任講師

〈現在の研究テーマ〉

- ①小学校外国語活動のあり方について
- ②小学校外国語活動の文字指導について

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

- ①イギリスにおける外国語教育に関する研究
- ②イギリスの国語教科書・教材研究

〈公表された著書・論文等〉

“Nature and Childhood in John Betjeman’s *Summoned by Bells*” 『日本女子大学英米文学研究』第47号、2012年3月、191-198ページ(査読付き)。

\*\*\*

**田口 功** Isao TAGUCHI

ソフトウェア・理科／教授

〈現在の研究テーマ〉

ニューラルネットワークにおいて最も実用的に用いられているモデルは、階層型ニューラルネットワークである。複素ニューラルネットワークにおいてもバックプロパゲーション学習アルゴリズムは、有力である。画像処理や天気予報の分野などに広く応用され、複素パターン(複素数から構成され

るパターン)を扱う方法として、現在でも広く知られている。

複素BPは、実BPを複素数に拡張したもので、ニューロン間の結合の重みおよび各ニューロンが持つ閾値がすべて複素数であり、さらに、入力パターンや出力パターンも複素数となるニューラルネットワークである。階層型ニューラルネットワークの汎化能力に対して、複素ニューラルネットワークの汎化能力についての基礎研究はあまり行われていない。本研究では、この問題を実験的に明らかにし、関数学習に取り入れ、その効果を研究しようとするものである。

〈公表された著書・論文等〉

(単著) (日本の電気学会に掲載された日本語論文8本をアメリカのWiley社が英訳して出版): “An efficient learning method for layered neural networks based on selection of training data and input characteristics of an output layer unit” *Electronics and Communications in Japan*, Vol. 95, A Wiley Company, 21 March, 2012, pp. 57–67.

\*\*\*

## 武内 清 Kiyoshi TAKEUCHI

教育社会学・子ども社会学／特任教授

〈現在の研究テーマ〉

子ども社会学 (子ども文化)、学校社会学 (学校と教師)、青年文化研究 (遊び、メディア)、高校 (格差)、高等教育 (学生文化、学生支援)、教科書 (使い方)などを、研究テーマにし、主に実証的データを中心に研究を進めている。

〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

上記に加え、初等教育に関しても理論研究、実証的データ (観察を含む)により研究を進める。さらに、学生文化、学生支援、青年文化、デジタル教科書に関しても、共同研究を計画している (平成24年度～26年度・科研費・基盤C一般・研究代表者、テーマ「現代の学生文化と学生支援に関する実証的研究——学生の「生徒化」に注目して」)。

〈公表された著書・論文等〉

① 「大学生の現在」 (浅野智彦氏との対談) 『季刊家計経済研究』 No. 91, 2011年7月、2–13ページ、家計経済研究所。

- ② 「社会的格差と学力」、高橋恵子編『発達科学入門2 胎児～児童期』  
2012年2月、286-287ページ、東京大学出版会。
- ③ 「現代の学生文化と学生支援のあり方」『平成23年度全国学生指導担当  
教職員研修会報告書』、2012年3月、7-19ページ、独立行政法人日本学  
生支援機構。

〈学会報告〉

- ① 韓国日本教育学会春季学術大会報告「日本の大学のキャンパスライフと  
大学生の特質」(5月21日、ソウル教育大学校)、発表資料集、3-13ページ。
- ② 日本子ども社会学会・東京地区研究会・コーディネート(12月10日、上  
智大学)、テーマ:「子どもと教育社会学研究」、「子どもと地域社会」。

〈その他の公表物〉

「座談会 教科書のデジタル化をどう考えるか」(寺崎昌男、赤堀兄司、谷川  
彰英、加藤幸次、武内清他)『教科書フォーラム』No. 9、2011年10月、1-  
34ページ。

〈その他の学外活動〉

- ・放送大学客員教授(「子ども・若者の文化と教育」主任講師、平成23年4月  
～)。
- ・放送大学東京文京学習センター客員教授(平成21年4月～)。
- ・放送大学非常勤講師(東京文京学習センター面接授業講師、平成21年～)。
- ・上智大学大学院総合人間科学研究科非常勤講師(「教育社会学特殊講義 I  
II 担当」、平成22～23年)。
- ・東京成徳大学子ども学部非常勤講師(「青少年文化演習」I II 担当)(平成  
18年～)。
- ・日本子ども社会学会会長(平成23年7月～)。
- ・日本教育社会学会理事(平成23年9月～)。
- ・中央教育研究所理事(平成20年4月～)。
- ・東書教育賞審査委員(平成23年4月～)。
- ・講演「学生文化と学生支援のあり方」(11月24日)、全国学生指導担当教  
職員研究会、東京オリンピックセンター。
- ・講演「現代の子ども・青年の特質と教育」(12月3日)北区浮間中学校  
PTA。
- ・講演「大学生の生活・文化と学生支援」(平成24年3月1日)大阪人間科  
学大学FD研修会

\*\*\*

## 山口 政之 Masayuki YAMAGUCHI

国語科指導法／准教授

### 〈現在の研究テーマ〉

博士論文の中心課題である「音読時に観察される読み違いの諸相」を明らかにしていく。心理言語学におけるグッドマンのミスキュー研究や、子供の音読を教師はどのように聴くべきなのかを考察したキャンベルの研究を手掛かりに、子供の音読に見られる読み違いの実際と、それに関わる教師の役割について詳細な分析と考察を行う。

### 〈次年度に行う予定の研究や将来展望〉

音読をする子供の実態調査を公立小学校に依頼し、新たにデータを収集する。中心課題は〈再読〉行為の実際を精査することである。そして、研究内容を学会で発表し、論文を投稿していく。

### 〈公表された著書・論文等〉

- ①(単著) 2011年5月、「読み違いにおける〈非漢字部分の代用〉の諸相」『臨床教科教育学会誌』臨床教科教育学会、第11巻第1号、69-76ページ。査読付き。
- ②(単著) 2011年10月、「読みの過程で起きる〈読み違い〉の諸相」『学校教育学研究論集』東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科、第24号、1-11ページ。査読付き。
- ③(単著) 2012年3月、「音読時の〈読みかえ〉における〈自己訂正〉の諸相」『敬愛大学国際研究』敬愛大学国際学部、第25号、81-99ページ。

### 〈学会報告〉

- ①(口頭発表) 2011年5月、「読み違いにおける〈翻読〉の諸相」、全国大学国語教育学会(京都教育大学)。
- ②(口頭発表) 2011年6月、「読み違いにおける〈代用〉の諸相」、上越教育大学国語教育学会(上越教育大学)。
- ③(口頭発表) 2012年1月、「読み違いにおける〈漢字部分の代用〉の諸相」、臨床教科教育学会(信州大学)。

\*\*\*

## 山本 陽子 Yoko YAMAMOTO

音楽科教育／准教授

### 〈現在の研究テーマ〉

小学校教員に求められる力について、学生の実態や社会の要請などから、継続的に分析・研究を進めている。本年は「こども学科」に昇格した節目として、「地域こども教育専攻」の歩みと学生の実態、「こども学科」の今後のあり方等をまとめ、国際研究に掲載した。

専門である音楽科教育においては、教員として欠かせない音楽的な素養や基礎的な知識理解、技能、感性などについて研究と継続。学校教育でこれまであまり取り上げられなかった「音程感」を育てる意義や授業での実践を音楽学習学会で発表し、論文としてまとめた。

音楽科教育の指導はどうあるべきか学生との学びを通してさらに考え、提案を行っていきたい。また、学校現場で生かせる音楽的な力や日常の音楽をより深く楽しむことのできる力を伸ばすための指導について研究を続けたい。合わせて人間にとって音楽はどのような意味をもつのかという根源的な研究を深めていきたい。

### 〈公表された著書・論文等〉

- ①(単著) 2012年1月、「教職課程における音楽の基礎力——音程感に関する一考察」『音楽学習研究』音楽学習学会、第7巻、95-104ページ。
- ②(単著) 2012年2月、「小学校教員に求められる力についての一考察——『地域こども教育専攻』学生の実態と『こども学科』のこれから」『敬愛大学国際研究』第25号、55-80ページ。

### 〈学会報告〉

(口頭発表) 2011年8月、「教職課程における音楽の基礎力——音程に関する一考察」音楽学習学会(関西学院大学)。

### 〈その他の学外活動〉

- ・東京学芸大学教育学部非常勤講師「初等音楽科教育法」担当。
- ・音楽学習学会 世話人。

敬愛大学国際研究第26号 執筆者一覧  
(掲載順)

有馬 容子 (ありま・ようこ)

国際学部国際学科 教授

Yoko ARIMA: Professor of International Studies,  
Faculty of International Studies.

織井 啓介 (おりい・けいすけ)

国際学部国際学科 准教授

Keisuke ORII: Associate Professor of International Studies,  
Faculty of International Studies.

佐藤 佳子 (さとう・けいこ)

国際学部こども学科 専任講師

Keiko SATO: Lecturer of Child Studies,  
Faculty of International Studies.

櫛田 久代 (くしだ・ひさよ)

国際学部国際学科 教授

Hisayo KUSHIDA: Professor of International Studies,  
Faculty of International Studies.

山本 健 (やまもと・たけし)

国際学部国際学科 教授

Takeshi YAMAMOTO: Professor of International Studies,  
Faculty of International Studies.

\*国際学部各執筆者の専門領域などの詳細については、「2011年度研究活動報告」を参照。

## 編集後記

『敬愛大学国際研究』第26号をお届けします。本号は文学、国際経済学、英語教育学そしてボランティア活動の4本の論文・研究報告と史料紹介1本から構成されている。各論とも先生方の今、手掛けている研究の一端を示すホットな成果である。

国際学部には、上記の執筆者以外にも、多様な才能を持ち合わせた教師がたくさん「隠れて」おり、彼らの優れた研究成果を公開できないのは実にもったいない。彼らをも含めた「特集」を組みたいと編集部は考えているが、如何に。実現する日が俟たれる。

(山本)

## 『敬愛大学国際研究』規程

- 1 『敬愛大学国際研究』は、敬愛大学国際学部における研究成果の発表を目的として年1回刊行される。
- 2 刊行については、本学国際学会総会の選任した編集委員会がその任にあたる。
- 3 執筆者は、原則として本学教員とする。
- 4 原稿は未発表のものに限る。
- 5 原稿掲載の採否は、編集委員会がこれにあたる。
- 6 本誌に掲載の原稿の著作権は国際学会に帰属するものとする。
- 7 本規程の改正は、編集委員会の議を経て国際学会総会の承認をうけるものとする。

【付則】 本規程は2003年4月1日より施行する。

本規程は2011年4月1日より施行する。

## 『敬愛大学国際研究』編集委員会

山本 健 (委員長)

村川庸子

田中未央

## 『敬愛大学国際研究』第26号

発 行—2013年2月28日

編 集 者—『敬愛大学国際研究』編集委員会

発 行 者—敬愛大学国際学会

会 長 中村圭三

〒285-8567 千葉県千葉市稲毛区穴川1丁目5番21号

TEL 043-251-6363(代表) FAX 043-251-6407

印 刷 所—大日本法令印刷株式会社

# The Keiai Journal of International Studies

No. 26, February 2013

## Articles

- Wandering Around in the “Uncharted Sea” of Recollection  
—Spoken Narrative in *Autobiography of Mark Twain* ..... Yoko ARIMA ( 1 )
- Current Account Imbalances in the Euro Area Focusing  
on the SEA Countries..... Keisuke ORII ( 23 )

## Research Notes

- A Study of Teaching English as a Foreign Language  
at Japanese Elementary Schools ..... Keiko SATO ( 45 )
- Educational Achievements of the First Volunteer Trip Supported  
by Keiai University after the 2011 East Japan Earthquake  
..... Hisayo KUSHIDA ( 61 )

## Historical Materials

- Translation of a German Doctor’s Diary in Early Modern Augsburg (3)  
—*Das Tagebuch des Augsburger Arztes und Stadtphysicus*  
*Dr. Philipp Hoehstetter, 1597–1635*  
..... Takeshi YAMAMOTO ( 83 )

## Reports

- Reports on Faculty Research Activities 2011 ..... (129)